サード幼なじみはＧｅｎｉｕｓ！

音無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サード幼なじみはＧｅｎｉｕｓ！

【Ｎコード】
Ｎ４９４６Ｕ

【作者名】
音無

【あらすじ】
女にしか使えないはずの『ＩＳ』を動かせてしまった織斑一夏。
彼にはイタリア人の天才幼なじみがいた。
彼女の名はセラ・ヴィヴィット・アーレン。
この物語は、セラ・ヴィヴィット・アーレンを主人公とした彼女の周りの出来事を描く、バトル系ラブコメである。

オリ主設定

名前：セラ・ヴィヴィット・アーレン

性別：女

ＩＳ専用機：覇式・天雷

備考：イタリアの代表候補生で、大手ＩＳ会社の社長令嬢。スタイルが良いので、トップモデルとしても働いている。バストサイズは８７ｃｍのＥｃｕｐ。雰囲気は千冬に近く、話し方も似ている。

第二のＩＳコア開発者で、束に次ぐ天才。また、ＩＳ操縦能力も高く、運動神経も良い。

生まれつき左目が神眼と呼ばれる、動体視力が神がかった眼で、色は青。右目は普通で、緑色と、オッドアイである。

一夏のサード幼なじみで、初恋の相手。小学校６年からの知り合いなので、鈴とも幼なじみ。

髪の毛の色は金で、ロング。

ＩＳ性能：覇式・天雷は、セラ自作のＩＳで、白をベースに黄色で

彩った本体に、薄い青色と、まさに電気色。

攻撃力、飛行速度は第四世代をも大きく上回るが、その分防御が薄い。第二世代の攻撃でも、まともに喰らえば三発以上で墜落。第三世代だと、ギリギリ二発まで耐えられる程度。

ワン・オブ・アビリティは、反射（リフレクション）と、瞬動。反射は、物理攻撃は跳ね返し、レーザーなどの遠距離型のビーム系攻撃はシールドエネルギーに変換して吸収できる。瞬動は、瞬間加速（イグニッション・ブースト）を越える亜光速の速度で移動する、いわゆる瞬間移動。ただし、反射も瞬動もどちらも連発は不可。

搭載武器は、近接用ブレード、ランスがそれぞれ四本と、ミサイルが十発、アサルトライフルが二丁。

序章

俺の名前は織斑一夏。
ごく普通の小学校６年生だ。

今日もいつも通り学校に来て鈴たちと話していた。

『キィーンコーンカーンコーン……』

「ほら、チャイム鳴ったぞ、席につけー！」

担任の先生が教室に入って来て、声をあげた。

「えー、今日は皆に嬉しいお知らせがある。なんと、このクラスに新しい仲間がやってきました」

「センセー、そいつって、男ー？女ー？」

「女の子だ。イタリアからの留学生、セラ・ヴィヴィット・アーレンさんだ。セラ、入ってこい」

『ガラガラ…』

教室の扉を開けて入ってきた少女は…、

「はじめまして、セラ・ヴィヴィット・アーレンだ。セラと呼んでくれ」

小学生とは思えない気品と美しさと妖艶さで溢れていて、俺は目が話せなかった…。

―鈴ｓｉｄｅ―

（女の子の転入生で留学生かぁ…。仲良くできるかなぁ…？）

先生が名前を呼んだとき、私はそんなことを考えていた。

『ガラガラ…』

「はじめまして、セラ・ヴィヴィット・アーレンだ。セラと呼んでくれ」

その時私は、自分でも何故だか分からなかったが、その女の子にときめいてしまった…。

―セラｓｉｄｅ―

さて、本日転校生としてやってきたわけだが、やはり日本人だらけだな…。

こちらに来る前にしっかり日本語を学んでおいて正解だったか…。

それにしても、視線が凄いな。主に男子が私をジロジロと眺めてくる。

目が合った者には微笑みで返している。

こういうのは第一印象が大事と母上から言われているからな…。

……休み時間……

「ふぅ…」

私はとりあえず、学校の構成を把握しようと教室を出ようとした…。
が、

クラスの男子に囲まれ質問責めにされている…。

「そのオッドアイって生まれつき？」

「まぁな…」

「なぁなぁ、セラさんって恋人とかいんの？」

そんな質問ばかり。

「いや、いないが…」

『うぉっしゃぁぁ――っ！！』

何故か男子たちのテンションが上がっている。

全く、誰かここから抜ける手助けをしてくれないものか……。

と考えていると、

「お前ら、セラさんが困ってんじゃねぇか！」

「一夏の言う通りよ！ほら、退いた退いた！」

一組の男女が私を男子の群れから連れ出してくれた。

「おい一夏、鳳！お前らだけセラさんにアピってんじゃねーよ！」

そうだそうだと声が上がる。

「はぁ？転校生困らせといて何がアピールよ！バッカじゃないの！？行きましょ、セラさん」

「あ、あぁ……」

「一夏も行くわよ！」

「おう！」

……

「さっきはありがとう、助かった。えーと…」

「一夏だ。織斑一夏。よろしくな！」

「私は鳳鈴音よ。鈴でいいわ。仲良くしましょ♪」

「一夏に鈴だな。よろしく頼む」

「セラさんはイタリアからの留学生なのに日本語ペラペラなのね？」

「ん？あぁ、向こうでしっかり日本語を学んでから来たからな。そう言う鈴も、名前からして中国人か？」

「そうよ♪私は小5からここにいるの」

「まぁ、俺たちはその時からの仲だよ」

「へぇ…。仲良いんだな。恋人か？」

『違う！絶対違う！』

「そ、そんな怒らなくても…」

「わ、悪ぃ…」

「ごめん…」

「いや、変なことを聞いてすまないな。だが結構絵になるぞ？一夏はカッコイイし、鈴は可愛いじゃないか」

「か、カッコイイ…か？」

「あぁ。結構好みだな♪」

「なっ！？一夏！アンタ…」

「鈴？もしかしてヤキモチか？」

「なんで一夏にヤキモチなんか…！私は一夏とだったらセラさんの方が百倍良いわよ！」

「……え？」

まさかの展開だな。一夏は口が空きっぱなしだ。

まぁ私は同性愛には抵抗は無いがな。

「ふむ。鈴は私が好きなのか…？」

「えっ！？い、いや…その……まぁ綺麗だし、良いなぁとは思ってるけど…／／／」

「……鈴には負けねぇ…（ボソッ）」

「一夏、何か言ったか？」

「へ？い、いや、何でもねぇよ！そ、それよりセラさんって、まだこの学校のことあんまり分かんねぇだろ？俺たちが案内するよ」

「そうね！主に私がしっかり案内したげるね♪」

「ふふっ……♪」

おもしろい二人組だな♪

『～～っ！！……／／／』

「ん？二人とも、顔が赤いぞ？大丈夫か？」

「ふぇっ！？な、何でも無いわ！行きましょセラさん！」

「あぁ。それと、私のことはセラと呼び捨てで構わないぞ」

その後私は一夏と鈴に校内を案内してもらった。

……

あれから数日後……。

「セラさんってさ、めちゃくちゃ良くね？」

「お、お前も狙ってんのか？」

「だってめちゃくちゃ可愛いし、小学生なのにあの胸ってさ…」

「体育とかでめちゃくちゃ揺れてるよな…」

「勉強も運動もできるし性格も完璧」

「でもさ、最近ずっと一夏と鳳と一緒にいるよな…？一夏…狙ってんじゃね？」

「セラさんも満更でも無いような顔してるときあるぜ…？」

『ザワザワ…』

私がこちらに来てからまだ数日だというのに、私の噂が後を絶たない…。

まぁ一夏が相手でまだマシだがな…。

「ったく、あいつら好き勝手言いやがって…」

「セラも迷惑よね～。あんな根も葉も無いこと言われて」

「あぁ…まぁな。だが、相手が一夏や鈴ならまだ良いさ」

『えっ？……／／／』

「この数日間で二人が良い奴だと分かったし、何より私に優しくしてくれているからな。私は二人のことは好きだぞ？」

「うん……／／／」

「あ、あぁ……／／／」

二人とも顔を真っ赤にして……初なやつらめ♪

「まぁいいさ、気にしなければ噂も消える」

「そ、そうね！そうだ！ねぇセラ、今日、アタシん家にご飯食べに来なよ」

「良いのか？」

「うん！美味しい中華料理をご馳走するよ」

「ま、作るのは鈴の親父さんだけどな！」

「一夏うるさい！アタシだって何時かは料理上手くなるもん！」

「じゃあ、遠慮なく行かせてもらおうかな？鈴のお父様にもご挨拶したいしな」

「うん、来てきて！」

……

「ただいまぁーっ！！お父さん、友達連れてきたよー！」

鈴が勢いよく入っていった。なかなか風情のある店で、中華料理の香りが漂う素敵なところだ。

「んぁ？おぅ鈴、おかえりぃ！つーかまた一夏だろう？」

「違うわよ！一夏なんてどうでも良いの！ほら、セラ、入って」

「お邪魔します、はじめまして（ニコッ）」

「この子はセラ・ヴィヴィット・アーレンさんよ。こないだ話したでしょ？」

「あぁ！鈴がすっごく可愛い女の子が転校してきたっつって家中のたうち回った「わぁーっ！わぁーっ！！」なんだ？うるさい奴だ……」

「いらないこと言わないで！それよりセラはお客さんなんだから、お父さんの料理、振る舞ってあげて」

「お願いできますか？」

「おぅ！可愛い嬢ちゃんの頼みだ。任せろ！ったく、一夏も鈴も少しはこの子見習って上品にできねぇかね？」

『う、うるさい！』

「もう、お父さんったら……」

「素敵なお父さんじゃないか。元気で楽しい人だな」

「そうかなー？」

「ま、一人暮らしの身には羨ましいよ」

「え？セラって一人暮らしなの？」

「あぁ、言ってなかったか？父は次世代兵器『ＩＳ』の会社の社長で忙しいし、母はそこの研究員でな。テストパイロットをしているから、日本には居ないよ」

「寂しく…ないか？」

「まぁ少しはな。だが、私には二人が居るだろう？だから平気さ」

「そっか…♪」

と、鈴が納得したところで、

「お待ちどおさん！ラーメンにチャーハン、餃子だ」

「ありがとうございます」

「サンキュー親父さん！」

「おぅ！」

「さぁ、たぁっくさん食べてね！」

「だからお前が言うなっての！」

「うるさいわよ！」

「ふふっ…。あっ、このチャーハン美味しい…」

「そうかそうか！そいつぁ良かったぜ！」

鈴のお父さんは満足気に部屋に戻って行きました。

「ねぇセラ」

「ん？何だ？」

「もしね、アタシがいつか料理が上手くなったら、毎日アタシがセラにご飯作ってあげるね？」

「ふっ、それは楽しみだな」

「約束ね！」

「あぁ。約束だ」

「良いなぁ鈴…」

？？？普通そこは、良いなぁセラ…じゃないのか？

……

「今日はご馳走様でした」

「おぅ！またいつでも来てくれよ？」

「はい♪じゃあな、鈴」

「うん、また明日♪」

「じゃあな～」

「ちゃんとセラのこと送って行きなさいよ？」

「分かってるよ！行こうぜ、セラ」

「あぁ」

私と一夏は夜道を歩き出した。

「なぁセラ」

「何だ？」

「今度はさ、俺んち…来いよな。姉さんもセラに会ってみたいって言ってたから」

「ふーん。一夏は姉上がいるのか」

「あぁ。剣術がめちゃくちゃ強くて鬼みたいだけどな、すげぇいい姉さんだよ」

「そうか。一度会ってみたいな」

「ぜひ！」

そんな他愛もない話をしているうちに家の近くにたどり着く。

「ああ、ここまででいい。すぐそこだからな。ありがとう、一夏」

「ん。じゃまたな！」

そう言って一夏は走って帰っていった。

さて、私も家に入る――

『フニッ』

「ん？」

何か柔らかいものを踏んだような…？

足元を見てみると…

「……奇人？」

ウサ耳を着けて、真っ青なワンピースとエプロンという如何にも奇怪な服装の女性が家の真ん前で寝ていた…。

「あの…大丈夫――『ギュルルル…』……」

ただ単にお腹が空いてるだけみたいだ。

「仕方ないか…」

私は女性の物らしき荷物（殆どが書類）を拾い、女性を抱えて家に入った。

……

「ハグハグハグ…んぐ、……ぷはぁ！束さん、ふっかぁつ！」

「……」

とりあえず私は冷蔵庫にあった卵と挽き肉、その他もろもろを使ってオムレツを作ってあげた。

彼女は料理が出来た途端に起き上がり、オムレツにがっついた。

「あの…身体は大丈夫ですか？」

「ん～？あぁ！うんうん、束さん、絶好調だよー！助けてくれてありがとうねー♪」

どうやら彼女は束さんというらしい。

ん？束？確か、父が開発中のあのＩＳの創作者が確か…

「束さんって、もしかしてあのＩＳの創造主の…？」

「そうそう、その通りぃ―♪」

「そうなんですか…」

「あれあれー？あんまりびっくりしてないみたいだねー？」

「まぁ、天才には変人が多いと聞きますし」

「私もそれに入ってたりは――」

「しますね。特にその服装とかはちょっと…」

「むむー…可愛いのにぃ…ってあれ？私のＩＳの資料は？」

「ああ、これですか？」

私は大量の書類が入ったカバンを取り出す。

「何故か私の家の前に散らばっていたので、回収しておきました」

「ありがとうー♪これ、大事な書類なんだよねー」

「みたいですね。未完成な部分が多いみたいでしたが」

「あれれ？分かるの？」

「えぇまぁ。例えばそうですね…、こことかはこっちに繋げてこうすれば、エネルギーの運搬の効率が上がり、動きも良くなります」

「どれどれー？おお！ホントだぁ！天才の束さんにも分からなかっ

たことを一瞬で見破るとは、君も私並みに天才だねー♪」

「どうも。あと、他にも色々と気になるところはありますが、そもそもこれってＩＳのどの部分なんですか？」

「えっとねー、今案を出して貰ったのは、次世代型ＩＳ『第三世代型』の草案なんだよね。まだ世界中のどこにも開発されてないよー」

「これなら少しは手伝えますけど…」

「ホント？じゃあお願いするねー♪」

それ以後、私は学校から帰るとＩＳの創作を手伝うことになった…。

―１年後―

私は中学に通いながらも、相変わらず束さんの手伝いをしていた。
既に五機の第三世代型ＩＳを完成させ、それぞれをモデルとしてアメリカ、ドイツ、フランス、イギリス、中国に渡して、今は束さんと第四世代型を創作中――なのだが、

『ちょっと旅に出まーす！探しても見つからないよー♪あと、造りかけのＩＳよろしくねー♪ｂｙ天才の束さん』

という置き手紙が残され、束さんは行方不明になった。世界中でも捜索されているが見つからないようだ。

「仕方ないか。……せめて私の『覇式・天雷』だけでも完成させるか…」

覇式・天雷は、第三世代は愚か、第四世代をも凌駕するスペック。
その代わり、機体との相性がＳ＋以上の私しか乗れないらしい。
要するに私の専用機だ。

私が初めてコアから造り、本体を完成させ、プログラミングする機体だ。

プログラミングは今からするが、１０分もあれば完璧だろう。

そうして私の専用機『覇式・天雷』は完成した。

―さらに2年後―

私は去年に、留学を終え、イタリアへ帰った。

クラスメートの皆には送別会をしてもらえた。

その時少し泣いてしまったのは秘密だ。

一夏や鈴は、私と離れることを悲しんでくれたが、私は必ずまた帰って来ると約束し、帰国した。その際、鈴に「次に会うときはきっと自分の気持ちに素直になるから」と言われたので、意味は分からなかったが、「楽しみにしてる」と言っておいた。
その時鈴は真っ赤になっていたが。

その後まもなく鈴も中国に帰ったらしい。

イタリアに帰ると、父や母が迎えてくれ、日本でのことをたくさん話した。

その後はＩＳのテストパイロットとして働いたり、世界レベルのモデルとして雑誌に載ったりと大忙しで、イタリアでは中学にはあまり通えなかった。

今日は卒業も近づいてきて、進路を話そうと父や母の元へやってきた。

「お父様、私はやはりＩＳ操縦者として働きたいです」

「そうなのか？ちょうどいいな、ママ」

「そうね、パパ」

「何かあるのですか？」

「うむ。実はお前に、イタリア政府からイタリアの代表候補生としてＩＳ学園に入らんかという話がきていてな」

「ＩＳ学園…確か日本にある…？」

「そうよ。もしかすると、貴女が日本で知り合った…鈴ちゃんだったかしら？もいるかもしれないわよ」

「……行きたい…です！その話、受けます。お父様、ＩＳスーツ。ヴィヴィット社特製の私専用スーツを作って貰えますか？」

「うむ！任せろ！最高の機能性とエロスを備えたスーツを作ってやろう！」

……何か聞こえた気がするが、無視しておこう。

私の進路は『ＩＳ学園』に決定した。

クラスメートは全員女？（前書き）

今回は前半一夏視点、後半セラ視点です。

クラスメートは全員女？

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲはじめますよー」

黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生（さっき自己紹介していた）。

身長はやや低めで、生徒のそれとほとんど変わらない。しかも服のサイズが合っていないのかだぼっとしていて、ますます本人が小さく見える。また、かけている黒縁眼鏡もやや大きめなのか、若干ずれている。

なんというか、『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さ……というより背伸び感がするんだが、そう思うのは俺だけなんだろうか。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

『……』

けれど教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ちょっとうろたえる副担任がかわいそうなので、せめて俺くらいは反応しておこうと思わなくもないのだけれど、いかんせんそんな余裕はない。

何故か。

簡単だ。俺以外のクラスメートが全員女子だからだ。

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け、その初日。それ自体はいい。むしろ喜ぶべきところだ。

だがしかし、問題はとにかくクラスに男が俺一人という点だ。

（これは……想像以上にきつい……）

自意識過剰ではなく、本当にクラスメートほぼ全員からの視線を感じる。

だいたい席も悪い。

なんで真ん中&最前列なんだ。めちゃくちゃ目立つ上に否が応でも注目をあびるじゃないか。

俺はちらりと窓側の方に目をやる。

「……」

何かしらの救いを求めての視線だったんだが、薄情なことに幼なじみの篠ノ之箒はふいっと窓の外に顔をそらした。なんてやつだ。これが六年ぶりに再開した幼なじみに対する態度だろうか。……いや、もしかして俺は嫌われているんじゃないか？

「……くん。織斑一夏くんっ！」

「は、はいっ！？」

いきなり大声で名前を呼ばれて思わず声が裏返ってしまった。案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきて、俺はますます落ち着かない気分になる。

別に俺は女子に対する苦手意識はない。ないけど、でも限度ってもんがあるだろう。

ともかく、クラスで男は俺だけ。他の生徒二十九名が女子。副担任も女性。担任は……知らないけど、女性らしい。らしいというのは未だに顔を出さないからだ。

何をしているのだろうか？

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

気がつくと、副担任の山田真耶先生がペコペコと頭を下げていた…。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いて下さい」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

がばっと顔を上げ、熱心に詰め寄る山田先生。……あの、またすごい注目を浴びてるんですが。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

儀礼的に頭を下げて上げる。――ちょっと待て、なんだその『もっと色々喋ってよ』的な視線は。そしてこの『これで終わりじゃないよね？』的な空気はなんだ。

「……」

どうしたら良いだろうか、何を言えば良いんだ？

そもそも何で俺はここにいるんだ――？

……

時は遡り二月の中旬。

俺は中学三年生で受験の真っ只中だった。

「うー、寒っ……なんで一番近い高校の、その試験のために四駅乗らなきゃいけないんだ……。しかも今日、超寒いじゃないか……」

去年起きたカンニング事件のせいで各学校が入試会場を二日前に通知するという政府のお達しはそりゃあ無茶苦茶なんだが、何せ俺はただのどこにでもいる中学三年生。何を言えるというのか。せいぜいこうやって愚痴りながら試験会場に向かうのが関の山だ。

俺が受けるのは自宅から近く、学力は普通の私立藍越学園。

私立なのに学費が安いのが魅力だ。

「えっと……あれ？これ、どうやって二階に行くんだ？」

いかん、迷った。というか、なんて分かりにくい構造をしてるんだ…。

中学三年生にもなって迷子――いかん、恥ずかしすぎる。

「ええい、次に見つけたドアを開けるぞ、俺は。それでだいたい正解なんだ」

っと、いいところにドアがあった。ちょっと入りますよ？

「あー、君、受験生だよね？はい、向こうで着替えて。時間押してるから急いでね。ここ四時までしか借りられないからやりにくいったらないわ。全く、何考えて……」

部屋に入った途端に神経質そうな女性に言われた。忙しさのあまり判断力が鈍っているのか、俺の顔も見ずにぱっぱっと指示だけして

出ていった。

（着替え？今日日の受験は着替えまでするのか？あぁ、カンニング対策か。大変だなぁ、どこの学校も）

なんてことを考えながらカーテンを開けると、奇妙な物体が鎮座していた。

――知っている、これは『ＩＳ』だ。

「男には使えないんだよな、たしか」

そう、これは女以外には反応しない。だから今目の前にあるのは人形と同じ。なにもしない、出来ない――

――そう思って触れた。

『キンッ』

「！？」

頭の中に金属音が響いて飛び退く。

「……まさか…動くのか…？」

もう一度そっと触れる。

「っ！！」

頭の中に膨大な量の情報が入ってくる。

知らないはずのＩＳの情報が、あたかも最初から知っていたかのように…。

そして『ＩＳ』から送られてくる情報で見る世界はまるで――

「……」

――えっと、状況を再確認するぞ。今俺は自己紹介の途中で、目の前にいるクラスメート２９名は全員女の子。

そして後ろには副担任の山田先生。

いかん、長時間黙りっぱなしだ…。このままじゃ暗い奴のレッテルを貼られちまう…。

何か言わねーと…！えっと――

「以上です」

『ズコっ』

クラスメートの女の子数人がずっこけた。更に――

「くっ……ぷふ…あはははっ！何だ一夏、その自己紹介は。笑かすな、腹がよじれる！」

「なっ、何だと!?誰だよ！」

一人の女子には大笑いされた。ムカついて声の方向を見ると――

「誰だって?二年しか離れていなかったのに、もう私を忘れたか?」

金髪をなびかせた俺の初恋の相手――

「ま、まさか…セラ…?」

「あぁ。久しぶりだな。そして頭上注意、だ」

セラ・ヴィヴィット・アーレンが居た。

にしても、頭上注意って…？

そう思って頭の上に意識を向けたその時――

『パァンっ！！』

「痛てぇ！！」

「貴様はまともに自己紹介も出来んのか！」

「げぇっ！？関羽！？」

『スパーンっ！！』

「～～～っ！！」

さっきより痛い…。

「誰が三國志の英雄か、馬鹿者」

トーンの低い声に、黒いスーツにタイトスカート、すらりとした長身につり目。

まさに俺の実姉『織斑千冬』がいた。

「あ、織斑先生。会議は終わられたんですか？」

「あぁ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「いえ、副担任ですからこれくらいのこと…」

山田先生がそう言ったら千冬姉はこっちに振り返って、

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年間で使い物にすることが私の仕事だ」

挨拶のような暴力発言をした。が、

「キャー――――っ！！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて感激です！」

きゃいきゃいと黄色い声が飛び交った。

「…毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それともなにか？私のクラスにだけ馬鹿者を集めているのか？」

本気で鬱陶しいらしい。

「おい、千冬…いや、織斑先生と呼ぶべきか。その馬鹿者には私も含まれるのか？納得できんな」

「……そんな分かりきったことを聞くなセラ。お前が馬鹿者ならこの世の全ての人種はどうなる？」

「それは言い過ぎだと思うがな。まぁいいか」

「で、話を戻すが織斑。貴様は挨拶すら出来んのか？」

「いや、千冬姉……」

『スパンっ！！』

「～～！」

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

……と、このやりとりがまずかった。俺と千冬姉が姉弟ということがバレた。

「え？織斑くんって、千冬様の……弟？」

「それじゃあ男で唯一ＩＳが動かせるのもそれが関係して…？」

『キーンコーンカーンコーン……』

運良くチャイムが鳴り、ショートホームルームが終わった。

―セラｓｉｄｅ―

「一夏」

ホームルームが終わったので、私は一夏に話しかけることにした。

周りで女子が聞き耳を立てているようだが気にしないでおこう。

「セラ！久しぶりだな！元気だったか？」

「お陰様でな。お前も元気そうで何よりだ。…にしても驚いたぞ。お前がＩＳを動かしたと聞いた時は」

「あはは…まぁな」

一夏は苦笑している。

「やはり女ばかりで辛いか？」

「あぁ。まぁ流石にちょっとな…」

「ま、何かあったら私に頼れ。ＩＳのことならきっと助けになってやれるさ」

「そうか！サンキュな！」

「ふふっ、構わんよ」

軽くウインクしながら言ってやった。

「／／／」

一夏のやつ、顔が赤いが大丈夫か？まだ緊張がとけてないのか？

…と、そこへ、

「ちょっといいか？」

つり目でポニーテールの女子が話しかけてきた。

「箒！」

「ん？一夏、知り合いか？」

「あぁ、俺の幼なじみで同じ剣道場に通ってた篠ノ之箒だ」

「そうか。私はセラ・ヴィヴィット・アーレンだ。よろしく頼む」

「ああ。それより、少し一夏を借りていいか？」

「構わないよ」

「そうか」

「あ、おい！って引っ張んなよ箒！」

一夏は篠ノ之に引きずられて行った…。

「あの～」

「ん？」

今度は私と一夏の話を立ち聞きしていた女子数人が話しかけてきた。

「何か用か？」

「あ、うん、あのね、セラさんって織斑くんと知り合いなのかなぁ〜って」

「あぁ、その事か。私と一夏は私が小学生のときイタリアから留学してきた時に仲良くなったんだ」

「へぇ〜。ってことは、セラさんってイタリア人なんだ」

「そうだ」

「もしかして、代表候補生だったりして？」

「そうなの？」

「まぁな。一応イタリア代表候補生で専用機持ちだ」

「専用機持ち!?すごーい！」

「っていうか、ヴィヴィットってあのヴィヴィット社のじゃない？」

「そうだ」

「セラさん凄すぎー！！」

「ついでに言えばＩＳのも含めてモデル活動もしている」

「え？うそうそ～！何の雑誌？」

「これだ」

私は今日発売だったファッション雑誌とＩＳの情報雑誌を一冊ずつ取り出す。

「あ！これどっちも知ってるよ！かなり有名な雑誌じゃん」

「私この雑誌のファッションかなり参考にしてるよー」

「私も～」

「セラさん今月載ってる？」

「そう聞いているが……あった。これだ」

「どれどれ…？わぁ、カワイ――っ！！」

「ホント、凄く似合ってるよ」

「ありがとう。よかったら一冊ずつあげるが」

「え、いいの！？」

「ああ。見本誌はわりと多めにくれるんでな。今日は五冊ほどある」

「ありがとー！！」

「ねぇ、サイン貰っていい？」

「構わんよ」

「ヤッター♪」

サインをささっと書いてやり、手渡す。

どうやら喜んでくれているらしいな。

「あ、そろそろチャイム鳴るね」

「ホントだ。じゃあセラさん、また話とか聞かせてね～」

「ああ」

ちょうど千冬も教室に入ってきた。篠ノ之も一緒のようだな。

……ん？一夏は…？

『キーンコーンカーンコーン』

「さて、授業を始めるぞ……ん？織斑はどうした？」

とその時、

「す、すみません、遅れまし『スパーンっ！！』痛ぇっ！？」

「遅いぞ！早く席につけ！」

「す、すみません…」

……

授業が進んで行っているが、私はさっきから違うことが気になっている。

一夏だ。

なにやらキョロキョロして、集中できていないようだ…。理解できていないのか？

「織斑、何をキョロキョロしている？」

「え？いや、その…」

千冬も私と同じことを思ったらしい。

「えっと、織斑くん、分からないところがあったら、先生に聞いてくださいね？」

流石は副担任だけはあるな、山田先生。まぁ無駄だろうが。

「えと、じゃあ…はい！」

「はい、織斑くん！」

「全部わかりません！」

やっぱりな…。

「…織斑、お前、入学前の参考書は読んだのか？」

千冬が聞いた。流石に一夏でも読んでいる――

「古い電話帳と間違えて捨てました」

――期待した私が悪かった。

「馬鹿者め…」

千冬も呆れて物も言えないらしい。他のクラスメートもあんぐりしてるしな。……仕方ない。

「先生、織斑には後で私から説明しておく。授業を進めてくれ」

「はぁ…でも…」

「山田君、セラに任せておけ。私たちよりもアイツの方が専門だ」

「え？えっと、じゃあお願いしますね？」

「あぁ。一夏、後で私のところまで来い」

「分かった。けど、セラってＩＳのこと詳しいのか？」

「織斑、お前は本当に馬鹿か。セラは……まぁいい、後々知るだろう」

「？？？」

私がＩＳに詳しいかを聞くとは…。一夏、それとクラスメートたちよ、何も分かっていない顔をするな…。

「では、授業を再開しますね」

私はその後、授業を聞かずに一夏に教えるために情報を纏めていた…。

クラス代表

授業が終わり、再び休み時間。私は一夏にＩＳについて教えていた。

「――で、これは……」

一夏は思ったよりは理解……というよりも雰囲気を掴むのが早く、スムーズに進んでいた。が、

「ちょっとよろしくて？」

突然金髪の巻き髪の女生徒が話しかけてきて説明が止まる。

「ん？お前は確か……」

「知ってるのか、セラ？」

「あぁ、イギリスの代表候補生のセシリア・オルコットだったはずだ。…むしろお前は知らなかったのか？」

「あぁ。……つーか代表候補生って何だっけ？」

「なっ、わたくしを知らない上に代表候補生が分からないですって!?」

「あぁ!知らん!」

「……威張るなバカ…。代表候補生というのはその言葉の通り、各国の国家代表ＩＳ操縦者の候補生に選出されるＩＳの言わばエリートだ」

「ふーん」

「そもそもそんなことは単語から想像できるだろうが」

「おぉ、そういやそうだな。……まぁあんまり興味ないしな」

「一応私もイタリア代表候補生なんだがな」

「へぇ、セラって凄いんだな?」

「少しは代表候補生に興味が出たか?」

「そうだな」

まぁ一夏に対して説明することが減ったから時間を取られたことは良しとするか。

「で、そのイギリスのエリートさんが俺たちに何の用だ？」

と、一夏が聞くと、セシリアが、

「わたくしは優秀ですから、ＩＳのことを教えて差し上げてもよろしくてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

やけに唯一を強調するな…。

「入試ってあれか？ＩＳを動かして戦うやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は……？わ、私だけだと聞きましたが……」

「ふ、女子だとなどというオチだろうな、どうせ」

「ん？じゃあセラは負けたのか？」

「いや、私は入試を受けていない」

「「……は？」」

セシリアと一夏が間抜けな顔でこちらを見る。

「私は学園側から入るように頼まれたようなものだしな」

「ちょ、貴女何者ですの！？」

「ただの専用機持ちの代表候補生だ」

「それならわたくしだって専用機持ちですわよ！？」

そう言ってセシリアはアクセサリ状になったＩＳを見せてきた。

「ほう、ブルーティアーズか……第三世代型。懐かしい物だな」

「わ、わたくしのＩＳをご存知ですの？」

「はぁ…知ってるも何も、そのブルーティアーズのモデルになったイギリスの初代第三世代型ＩＳは私が造ったのだからな」

「「「「「「え――――――っ！！？」」」」」」

クラス中が驚愕の声をあげた。……正直煩い。

「う、嘘ですわ！！」

「本当だ。疑うならお前のＩＳで製作者欄を検索してみるがいいさ。セラ・ヴィヴィット・アーレンの名が出るだろうさ」

セシリアは直ぐに確認を開始した……。クラス中がこちらに寄ってきてその様子を見守る。

「……製作者、篠ノ之束、セラ・ヴィヴィット・アーレン……ほ、本当……ですわ……」

「当然だ。そもそも第三世代型自体私の作品だ」

「え！？束さんじゃないのか！？」

一夏が食いついてきた。

「仕方ない、説明してやろう。私が中学1年の頃か、家の前にウサ耳を付けた女性倒れていてな、家で介抱してやったんだ」

「それって……」

「篠ノ之束さんだ。で、その時はまだ世間には第二世代型しか出ていなかったし、束さんも第三世代型を造るのに手間取っていた」

「それでそれでー？」

クラスの女子がせかしてくる。

「偶々介抱したときに第三世代型ＩＳの資料を見てしまってな、そこから私がアドバイスして、二人で第三世代型を完成させた」

「じゃあさ、そのセラの専用機ってさ……」

一夏が私の待機状態のイヤリング型のＩＳを指差して言った。

「……コアから全て自作だ。第三世代は愚か、第四世代並みの……いや、それ以上かもしれんスペックだがな」

「すげぇ……」

「天才……ですの……」

「おっと、先に言っておくが、よほどのことがなければ私は自作ＩＳは人には譲らんからな。あまりコアの数を増やすのは良くないからな。私に専用機を造って貰おうなどと考えるなよ？」

クラスの大半がギクリとしたようだった。

「ん、そろそろチャイムが鳴るぞ。席についたほうが良いんじゃないのか？」

『あっ！』

全員が慌てて席に着いた直後チャイムが鳴り、千冬が入ってきた。

「よし、全員着席しているな。ではこの時間はクラス代表を決めようと思う。立候補者、推薦は手を挙げろ」

「はい、織斑くんが良いと思います！」

クラスの一人が言った。

「私もそれが良いと思いまーす！」

クラス中が一夏に投票していくようだ。

「え、俺っ！？ちょっと待ってくれよ…！」

「自薦他薦は問わん！」

一夏の反論？に千冬が冷たく言い放った。

「じゃ、じゃあ俺はセラを推薦する！」

「ん？私か…？」

一夏の意見に対するクラスの反応を見てみるか…。

「セラさんかぁ…。確かに凄いしいいかも！」

「うんうん、色々しっかり教えてくれそうだし」

「カッコイイし綺麗だし」

「専用機持ちの代表候補生だしね！」

ふむ、悪い印象は無いみたいだな。

「セラ、お前自分のことをばらしたのか？」

「あぁ、いけなかったか、織斑先生？」

「いや、別に構わん。……さて、他に候補者はおらんのか？」

と、千冬が言うと、

「ちょっと待って下さい！納得がいきませんわ！イタリア代表候補生のセラさんはともかく、男がクラス代表だなんて、良い笑い者ですわ！実力的に考えてもセラさんかこのわたくしが代表になるのは当然のこと。男が代表のクラスで一年間も過ごすだなんて屈辱耐えられませんわ！」

と、セシリアが偉そうにほざいた。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

ブチッ…。

「イギリスだって「セシリア・オルコット、お前、日本を侮辱したな？後進的な文化だと？ＩＳを開発したのはどこの国だと思ってい

る？そもそもイギリスも島国に変わりない。しかも食事は世界一不味いではないか。どうだ、お前に日本を侮辱できるほどの優れた点はあるのか？言ってみろ」……セラ」

一夏の言葉を遮りセシリアに言った。私の第二の故郷を馬鹿にされたのだ。これくらいは言っても許されるだろう。

「そ、それは……」

「ふん、言い訳すら出来ないか。まぁいい、そんなに気に入らなければＩＳで試合をして決着をつけろ！」

「……構いませんわ…」

「セラにあんだけ言って貰ったんだ。負けるわけにはいかねぇ」

「それと一夏には専用機を用意してある。戦闘訓練は、そうだな…篠ノ之、一夏に訓練をしてやってくれないか？」

「……引き受けよう」

「頼む。たっぷりしごいてやってくれ」

「あぁ」

ニヤリと笑って篠ノ之が返事をした。アイツとは仲良くなれそうだな。

「ふむ、話は纏まったな。では一週間後の月曜日の放課後、第三アリーナで先ず織斑対セシリア、その後勝者対セラだ。勝者がクラス代表だ。三人はそれぞれ用意をしておくように。では授業を始める」

千冬が締めてこの場が収まる。

「（さて……そろそろ天雷のフォーマットとファーストシフトを済ませておくか）」

私は授業開始後、ＩＳを一部展開してフォーマットとファーストシフトを行なった。

「（一夏のＩＳ『白式』のインプットもやらねばな……）」

私はやはり授業中、授業を聞くことなくＩＳをいじっていた…。

ＶＳセシリア・オルコット（前書き）

お待たせしました。
更新です（、∇´）ゞ

VSセシリア・オルコット

「さてと、白式の点検に移るか……」

私は自室で一夏の専用機『白式』を展開し、スペックや装備を確認する。

「……ほう、スペックだけならブルーティアーズ以上だな。第四世代か…？武器は……まさかこれだけか？」

一夏のＩＳに搭載されていた武器は近接戦専用のブレードが一本のみだった。

「……いったいどういう…？」

確かに一夏は銃を撃ったことが無いだろう。そもそも銃撃戦は向いていない。だから銃が搭載されていないのは分かる。が、ミサイル等なら話は別のはず…。

「ん？容量が一杯だと？……これは…そうか。一夏は良い姉に恵まれたな…」

一夏の白式を片っ端から調べると合点がいった。

「ま、これだけだと確実にセシリアには負けそうだな…。仕方ない。ちょっとだけ、サービスだ」

一夏の白式にとある細工をしておいた。

……と、そこへ、

『コンコン』

「俺だ。セラ、入っていいか？」

ドアが叩かれ一夏の声がした。

「ん？ちょっと待て」

私は白式を待機モードにして、ズボンのポケットにしまいこんだ。

「良いぞ。入ってこい」

『ガチャ……』

「おす！悪いな、こんな時間に。着替え中だったのか？」

「いや、お前のＩＳの整備をしていただけだ」

「俺のＩＳ？どこにも無いけど？」

「当たり前だ。今、待機モードに戻したところだ」

「えぇ！？何でだよ？見せてくれよ！」

一夏が私の肩に手を置いて言った。

「一夏、顔が近い」

ちなみに今、一夏と私の顔の距離は目測５ｃｍだ。

「えっ？あ、わ、悪いっ！！／／／」

一夏が顔を赤くしながら離れた。

「全く…。お前も年頃の男だから仕方ないが、誰でも彼でもそんなことしていると、本当に好きな奴に見られたら誤解されるぞ？」

「そ、それは困る！！」

「だろう？今回は私の部屋で良かったな」

「あ、あぁ。（やっぱり俺の気持ちには気づいてなさそうだなぁ…）」

「それより何か用か？」

「え？あ、そうそう、とりあえず「私の部屋着姿を見てハァハァしにきたか？」そうそう……ってちげぇよ！！／／／」

「冗談だ。一夏がそんな変態だったら私はお前と親しくしていない」

「ったく、変なこと言わないでくれよ…」

「いいからさっさと用件を言え」

「セラのせいだろ！？……まぁいいや。あのさ、ＩＳの操縦のこと教えてくれよ」

「ん？篠ノ之は教えてくれなかったのか？」

篠ノ之は一夏が頼めば教えてくれそうだと思うがな…？

「いや、聞いたんだけどさ、……擬音語が多すぎて理解出来ないんだ……」

なるほどな。説明が下手な訳か。

「良いだろう。教えてやるよ」

「ホントか！？」

おうおう…。目をキラキラさせてこっちを見てくるな…。子供みたいなやつだ…。

「あぁ。いいか、ＩＳの操縦のコツは私からしたら一つ。『敵の攻撃に当たるな』だ」

一夏がキョトンとしている。

「……聞いてるのか一夏？」

「え？いや、聞いてるけどさ、そんなのコツって言うのか？」

「一夏、お前敵の攻撃に当たらない方法をいくつ思いつく？あげてみろ」

「そりゃあ……かわす？」

「……それだけか？」

「……はい」

「はぁ…。いいか、今お前があげた、かわす以外に、受け止める、受け流す、跳ね返す、相殺する、消すなどがある」

「おぉ…。確かに。……でもさ、相殺と消すって一緒じゃないか？」

ほう…。一夏にしては良い質問だな…。

「相殺はな、危険が高い。例えばだ。敵がミサイルを射った。こちらも同じミサイルを射ってぶつけた。さて、そこには何が発生する？」

「……爆発？」

「そのとおりだ。爆発すれば煙や爆音が出て五感の内の視覚、嗅覚、聴覚が聞かなくなる。勿論ＩＳにはハイパーセンサーはあるが、敵の接近や攻撃が分かるだけ。かなり動きが難しくなる」

「なるほど……で、消す場合は？」

「相殺は同じ威力同士をぶつけるわけだ。当然こちらの攻撃も残らない。が、消す場合は敵の攻撃力以上の攻撃をぶつければいい。尤も、敵の攻撃力が分からなければ出来ないがな」

「そうかぁ…」

納得がいったのか、一夏はうんうんとうなずいた。

「ま、その二つはあまり物事を考えないタイプの一夏には向いてないな。敵の攻撃に対しての瞬時の判断が出来そうにない」

「あはは……」

「そして跳ね返すのはお前の…いや、ほとんどのＩＳでは難しいな。そういった機能がなければな。受け止めるのは剣道をやっていたお前なら出来るかもしれん。が、下手するとシールドエネルギーが減少してしまう。それに物理攻撃にしかできないしな。受け流しも同様だ」

「つまり、俺に残された選択肢は……」

「回避だ。幸いにもお前のＩＳのスペックはかなり高い。セシリアのブルーティアーズの攻撃をかわすことも不可能ではない」

「俺の……ＩＳ」

「今、私が考えている一夏が勝つ方法は――」

……

―クラス代表決定戦当日―

～一夏ｓｉｄｅ～

「なあ、箒」

「なんだ、一夏」

「気のせいかもしれないんだけどさ」

「そうか、気のせいだろう」

いや、絶対気のせいじゃないと思う…。

「俺、剣道ばっかやっててＩＳの操縦全くやってないよな？」

「……」

箒が俺から目をそらした。

「ＩＳの操縦方法とか戦略はセラと考えたけどさ、確かＩＳって稼働時間とかが関係するんだよな？」

「……ああ」

「……」

「……」

箒と俺、沈黙。

「お、織斑くーん！！セラさんから伝言ですぅ！」

「お前の専用機が、完成したそうだ」

「山田先生、千冬姉！！」

『パァンっ！！』

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」

……頭も心も痛いです、はい。
っていうかこのセリフ、教育者の発言じゃねぇよ…。
美人の割に彼氏がいないのはこの性格のせいだよな、絶対。

「ふん。馬鹿な弟にかける手間暇がなくなれば、見合いでも結婚でもすぐにできるさ」

……なんでこの人、心読めんの？

「そ、それよりも早く準備にかかって下さい！アリーナの使用時間は限られてるんですよ！」

「あ、そうか！」

ピット搬入口を探し、その向こう側に走り込んだ。

――そこに、『白』がいた。

白。真っ白。飾り気のない、無の色。眩しいほどの純白を纏ったＩＳが、その装甲を解放して操縦者を待っていた。

「これが……」

「ああ。お前の専用機『白式』だ」

俺の呟きに、白式の隣に立っていたセラが答えた。

真っ白なそれ。無機質なそれは、けれど俺を待っているように見えた。そう、こうなるのをずっと前から待っていた。この時を。ただこの時を。

「いいか、すぐに装着しろ。時間が無いからな、フォーマットとフィッティングは実戦でやれ。いくら私がアドバイスしたからと言って、それが出来なければ……負けだ！」

俺はセラの言葉を理解し、即座に純白のＩＳに触れる。

「あれ…？」

試験の時に、初めてＩＳに触れた時に感じたあの電撃のような、弾かれる感覚がない。

ただ、馴染む。理解できる。これが何なのか。何のためにあるのか。――わかる。

「楽にしろ。背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化をしてくれる」

セラの言う通りに装甲が開いているＩＳ――白式に体を任せる。受け止めるような感覚がして、すぐに俺の体に合わせて装甲が閉じた。

かしゅ、かしゅ、という空気を抜く音が響き、俺と白式が『繋がる』。

〈戦闘待機状態のＩＳを感知。操縦者セシリア・オルコット。ＩＳネーム『ブルーティアーズ』戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り――〉

「ハイパーセンサーは問題ないようだな。一夏、気分は悪くないか？」

「大丈夫だよ、セラ。サンキュ」

「そうか。気にするな」

セラがニッコリと笑ってかえしてくれた。……やっぱ可愛いな…。

／／／

「箒！」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

その箒の言葉を聞き、俺はピットから飛び去った。

「あら、逃げずに来ましたのね？」

セシリアが鼻をふふんとならす。また腰に手を当てたポーズが様になっている。が、俺の関心はそんなところにはない。

ブルーティアーズか…。

今セシリアの手には二メートルを越す巨大な銃器『スターライトMK?』がある。射程距離では十分に俺を撃ち抜ける距離だ。

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンスって?」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの姿を晒したくなければ、今ここで謝るなら、許して差し上げますわよ?」

〈警戒、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認〉

「そういうのはチャンスとは言わないな」

「そう?残念ですわ。それなら――」

〈――警告！敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填〉

「お別れですわね！」

『キュイン――』

耳をつんざくような独特なかん高い音が鳴り響き、一筋の光がセシリアのスターライトＭＫ？から放たれた。

「ぐっ……！」

ＩＳの警告のおかげで少しだけ動くことができ、エネルギー弾は白式の右肩の装甲をかすっただけだった。

〈――バリア貫通、ダメージ２５。シールドエネルギー残量、５４２。実体ダメージ、レベル低〉

「あら、すばしっこいネズミですこと。さぁ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲で！」

射撃、射撃射撃射撃。豪雨のように降り注ぐ弾丸。しかもそれらが

全て正確に俺を狙ってくる。

徐々にシールドエネルギーが削られていく。

「そ、装備！装備は！？」

白式に問うと、すぐさま現在展開可能な装備の一覧が現れる……一覧？

「一つしかないんだが……」

『近接ブレード』

一覧にはそれだけが書かれてあった。

「えぇい、無いよりはマシだ！」

『スゥ……カチャッ』

粒子が集まりブレードを型どった。それを右手で力強く掴む。

「行くぞ！」

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で挑もうだなんて…
…笑止ですわ！」

すぐさまセシリアの射撃。それをひねってかわしたが、俺とセシリアの距離は約３０ｍ。今の俺には、とてつもなく長く感じる。が、

「やってやんよ」

引くわけにはいかない。

……

「――二十七分。なかなかしぶとく頑張りましたわね。誉めて差し上げますわ」

「そりゃどうも」

シールドエネルギーの残量は６７。実体ダメージ中破。武器はかろうじて使えるが、かろうじて使えるというだけだ。

「ですけど、そろそろ終わりにいたしますわ！」

セシリアは笑みとともに右腕を横にかざす。すぐさま、命令を受けたビットが二機、多角的な直線機動で接近してくる。

「くっ……」

ビットのレーザーを回避するとセシリアのライフルが俺を撃ち抜く。そのパターンだ…。

「左足、いただきますわ」

――まずい！装甲を失っているそこに攻撃を食らえば、必ず『絶対防御』が発動する。
そうなればシールドエネルギーは残量０。確実に俺の負けだ。
なら、一か八か――

「うぉぉぉっ！！」

『ガギンッ！！』

派手な音と一瞬の火花。無理矢理加速して、セシリアのライフル銃身に正面からぶつかった。その衝撃で砲口が逸れ、なんとか一撃を免れた。

「なっ……!?無茶苦茶しますわね。ですけど、無駄な足掻きっ！！」

……そうか!!そういえば忘れてた!セラが言ってたな…。

『セシリアはおそらく、ブルーティアーズのビットを動かしている間は無防備だ。しかもそのビットは一々命令を送らなければ動かん。そこを突けば勝機はある』

「よし、反撃開始だ!」

セラｓｉｄｅ……

「一夏のやつ、やっと思い出したようだな……」

ここへきて、一夏の動きが変わり出した。
明らかにセシリアの攻撃は一夏によって誘導されていて、かわされている。

「後は篠ノ之との特訓の成果だな…」

剣術の基礎である集中。これが放課後の篠ノ之との剣道の特訓により感覚が戻った訳だ。

しかし、危険だな…。

「はぁぁ……。凄いですねぇ、織斑くん」

私の隣でリアルタイムモニターを見ている山田先生が呟いた。確かに一夏はＩＳの起動が二回目とは思えないほどの健闘ぶりだった。
が、

「あの馬鹿者。浮かれているな」

「だな」

私と千冬は忌々しげな顔をする。

「えっ？どうして分かるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、アイツの昔からのクセだ。アレが出るときは大抵簡単なミスをする」

「そうなのか？私はアイツの表情と性格、この状況からして、アイツは浮かれていると予測したのだが……」

「……その方が凄くはないか？」

「簡単なことだ」

「へぇ…。流石はご姉弟と幼なじみですねぇ…。そんな細かいことまで知ってるなんて」

なんとなくそう言った山田先生に千冬がハッとした。

「ま、まぁ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな…」

「あー、照れてるんですかー？照れてるんですねー？」

「……」

『ぎりりりりっ』

ヘッドロックが炸裂した。

「いたたたたっ！！」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「は、はいっ！！分かりました！分かりましたから、離し――あうぅっ！！」

「何をやってるんだか…」

私はため息をつきながら呟いた。

そしてもう一人、この場にいる人間。篠ノ之は、あちらを気にすることもなくずっとモニターを見つめている。心なしか、その表情は

険しい。

「……」

だが私は、励ますような真似は、決してしない…。

その時、試合は大きく動いた…。

一夏ｓｉｄｅ……

――よし、貰った！

セシリアの間合いに入った俺は、降り下ろした刀でビット３を撃墜し、そのままＩＳ独自の無重力機動でビット４に回し蹴りをして吹き飛ばした。

ライフルの砲口は間に合わない。確実に一撃が入るタイミングだった。

「――かかりましたわね」

ニヤリ……とセシリアが笑う姿が見えた。

――そうだ！あのビットは確か……

『ヴンッ――』

セシリアの腹部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

くそっ！！セラから聞いてたのに……！すっかり忘れてたっ！！

回避が間に合わない。しかも、さっきまでのレーザー射撃を行うビットではない。これは……『弾道型』だっ！！

『ドカァァンッ！！』

赤を超えて白い、その爆発と光に俺は包まれた……

決着！そして天才の実力（前書き）

お待たせしました！

セシリアｖｓ一夏決着です。

そして今回はセラも戦います！

ではどうぞ。

決着！そして天才の実力

『ドカァァァンッ！！』

「い、一夏ァ――っ！！」

セシリアのブルーティアーズのレーザー射撃によって、一夏は射たれた。爆煙で様子は見えない。

篠ノ之が一夏の名を叫んだ。が、

「……アイツめ、機体に救われたな」

「あぁ。これで…」

千冬と私は全く心配していなかった。なぜならば――

〈フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください〉

『白式』は一次移行（ファーストシフト）を済ませて、ようやく一夏の専用機になったからだ。

一夏ｓｉｄｅ……

「ふ、一次…移行…？」

な、何だかよく分からないけど、セシリアの攻撃は効かなかったみたいだな…。ん？武器が変わってる…？

「雪片…弐型…。千冬姉の……？そうか、俺はつくづく良い姉に恵まれてるみたいだな」

表示されていた武器は雪片二型。元々は千冬姉が使っていた武器だ。

「な、一次移行ですって!?まさか貴方、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの!?」

「そうみたいだな……!さてと、ここからが、本番だっ!!」

俺は、そう言った直後に動き出した。セシリアのブルーティアーズのビットが俺を追いかけてくる。が、

「はぁぁ――っ!!」

さっきまでとは違い、白式がイメージに対して鮮明に動く。

「なっ…!?くっ…このっ!!」

セシリアは必死になって俺を狙ってくるが、俺はそれをかわしまくる。

そして、全ての攻撃をくぐり抜けてセシリアに突撃する――。

セラｓｉｄｅ……

「あのう、セラさん」

「なんですか、山田先生？」

今まで黙って観戦していた山田先生が私に話しかけてきた。

「織斑くんの白式のシールドエネルギーが…」

「ん？あぁ、それはな、あの武器のせいだな」

「そうなんですか？……って、もうシールドエネルギーがほとんど無いですよ！？６８……５６……８！！」

「大丈夫ですよ…」

私がそう呟いた時、白式のシールドエネルギーが無くなると同時にセシリアのブルーティアーズに一夏の雪片弐型が斬りかかった。そして……

一夏ｓｉｄｅ……

『ビーーーーー！！』

決着を告げるブザーが鳴り響いた。

俺のシールドエネルギーはなぜか減っていっていた。正直間に合わなかったと思う。……が、

『試合終了。勝者――織斑一夏』

勝ったのは、俺だった。

ふと白式のシールドエネルギーを確認してみた。

「エネルギー残量……１４７…？」

白式に何故かそこそこのシールドエネルギーが残っていた。

「一体……何が…？」

俺は疑問を残したままピットに帰還した。

……

「一夏！」

出迎えてくれたのは箒。それに千冬姉と山田先生だ。

「約束通り、勝ってきたぜ！」

俺は箒にブイサインを出した。

「ふん、お前はセラが白式を整備していなければ負けていたぞ」

「え？」

突然の千冬姉の言葉に驚く。

「どういうことなんだ？」

「セラがな、お前の白式に、シールドエネルギーが１になったら一度だけエネルギーを１５０回復するシステムをインプットしていたそうだ」

「……マジ？」

「あぁ。私も信じられんがな、お前の戦闘はセラのシミュレーションと９２．５％一致していたらしいぞ？」

……驚きを超えて呆れた。

いや、そもそもこんな天才がずっと近くにいたのに気づかなかったなんてな…。

思い返せばセラって確か学校のテストで採点ミス以外で点数が１０

0点じゃなかったことって無かったな…。

「さてと、次はその天才とお前の試合だが、一時間後に始めて構わんか？」

「勿論！」

「そうか。なら今のうちに身体を休めておけ」

そう言って千冬姉はピットを後にしようと俺に背を向けた。

労いの言葉の一つくらいかけてくれても良いのにな…。

「……一夏」

俺がそんなことを考えていると、千冬姉が後ろを向いたまま話しかけてきた。

「な、なに？」

「……頑張ったな」

「……！あぁ！！次も頑張るよ！」

千冬姉に誉められるなんてな…。

…一時間後…

セラｓｉｄｅ……

「さてと…、行くか」

私は一人、ピットの中で呟いた。

「頼むぞ、『天雷』」

その名を呟くと、天雷が私の身体を包み込んでいく…。

〈お久しぶりです、マスター〉

「あぁ、今日はそこそこ飛ばしていくからな」

〈御意〉

天雷は自我を持ったＩＳだ。自分で造った時も流石にたまげたな…。

「よし、翔べ！！」

〈了解、飛翔開始！〉

天雷は大きな翼を拡げてピットを飛び立った。

……

「よぉ、セラ！それがセラの専用機か？」

「そうだ。これが私の最高傑作にして最強の相棒。『覇式・天雷』だ」

「すげぇ……まるで天使みたいだ…」

「一夏、天使様は容赦しないぞ？」

「分かってる！」

「さて、そろそろ始めるか。お喋りはここまでだ」

「あぁ…」

その直後…私たちの間にあった、数十メートルの距離は無くなっていた。

『ギィィーン……！』

私が突撃し、ランスで突きを放ったが、一夏はそれを近接用ブレードで辛うじて防いで見せた。

「ぐっ……！」

「ほぅ、やるな一夏！これを防ぐとは思わなかったぞ」

「超ギリギリだけど…な！」

「なら、これならばどうだ？」

私は更にランスを三本展開し、片手に二本ずつ構える。

「ちょ、そんなのありかよ！？」

「ふん、手加減はしないと言ったぞ？」

ここからはほぼ一方的だ。目に見えないほどの速度で放たれる突き。私はあえて一夏がギリギリ受けきれる場所へと放ち、少しずつシールドエネルギーを削る。

「どうした一夏、もうさっきのシールドエネルギー回復システムは無いぞ？」

「くっ…」

そして段々と追い詰められる一夏。背中は壁にピタリと張り付き、私のランスが一夏の身体の横に刺され、身動きを封じた。

「くそぉ……このまま負けて……たまるかァ――っ！！」

一夏は雪片弐型を展開する。今のエネルギー残量では、もって一分だ。

「ふ…ならば私も、近接用ブレードで戦ってやろう…」

私は近接用のブレードを展開し、前に構える。

「やっぱ…隙が無いな…」

「お前や千冬と剣道で戦った時を思い出すな。確か二人合わせて私ｖｓお前たちで１２６戦１２６勝０敗だったな」

「……今日こそ…勝つ！てやぁぁ――っ！！」

『ブンッ！！！』

私と一夏はお互いに剣を振るう。そして……

「完敗だよ……参った！」

「１２７戦１２７勝０敗……だな」

『試合終了。勝者、セラ・ヴィヴィット・アーレン』

ワァッ！！……と観覧席から歓声があがるのが聞こえた。その歓声を聞きながら私と一夏はピットに帰還した。

……

「ああ――っ！！くっそぉ、悔しいなぁ…。まさか一撃も当てられずに負けるなんてなぁ…」

私と一夏は二人で寮に歩いて帰りながら話していた。

「ふふっ、まぁ一夏も頑張ったさ。そうだな…最初の一撃で決めるつもりだったからな…それを防いだ一夏には褒美をやろうか？」

「え？褒美って？」

「…よし、一夏、コッチをむけ」

「ん～？……んぐっ！？」

私は一夏の唇にキスをしてやった。

「んっ……ぷはぁっ……これが褒美だ」

「えっ？あ…えぇ――っ！！？／／／」

「ん？嫌だったか？」

「いや、そんなこと無いぞ!!寧ろそのぉ…／／／」

「ん?足りないか?ま、これ以上は、私に勝ってからだな」

「……はい…」

「ちなみにな、今のが私のファーストだ」

「……うぉぉぉ――――――――っ!!」

……何か知らんが一夏は叫びながら走り去った。

「変なやつだな…?クスッ、元々か」

少し気分が良い。

今日は造りかけの第三世代型を完成させてから寝るか…。

私はご機嫌で自室へと帰っていった。

……

その晩の一夏……

「ファーストキス……ムフフ……／／／」

「な、なんだ…？一夏……頭がイカれたか…？」

箒は一夏を奇怪な物を見る目で、半分引きながら見ていた…。

「セラに勝てば…もっと先まで…へへっ…／／／」

一晩中妄想が絶えない一夏なのだった…。

……

その晩のセシリア……

『サァァァァ……』

自室でシャワーを浴びるわたくしことセシリア・オルコット。

「織斑……一夏……」

今日の試合、わたくしは織斑一夏に勝つ自信を持って挑みましたわ…。でも結果は敗北。

今まで出会った男性に、このように強かった男性は居たかしら…？いえ、それ以前に、女尊男卑の世になってから、今回のようにわたくしに真っ向勝負を仕掛けることができた男性が居たかしら…？

答えは否。断じて否でしたわ…。

知りたい…。

もっと、織斑一夏のことを知りたいですわ…。

決着！そして天才の実力（後書き）

というわけで、セシリアは一夏に惚れました。

さて、篠ノ之箒さん…出番少くてごめんなさいです（汗）

きっと出番はありますよ…。

多分…。

か、感想やアドバイスお待ちしてますっ！！

転校生、鳳鈴音（前書き）

感想を下さったセイバーさん、そして読んでくださってる読者の方々、お待たせしてすみませんでしたっ！！

その代わりといっては何ですが、長めです！

どうぞ！

転校生、鳳鈴音

「というわけで、クラス代表は織斑一夏君に決まりましたぁ～」

山田先生がニッコリと笑って言った。

「へ…？……はあぁッ！？何で俺なんだ！？俺、セラにボロ負けしたよな？」

一夏が私に向かって言う。

「そんなもの、決まっているだろう？なぁ、皆」

「「「はいっ♪お姉さま！！」」」

何故かこの前のクラス代表決定戦以降、クラスメイトの半数以上が私のことを『お姉さま』と呼ぶようになった……。

嬉しくも無いが、言うほど嫌でも無いので放置している。少し鬱陶しい時もあるがな。

「な、何が決まってるんだよ…？」

一夏がクラスの女子の統一感に少しビビりながら聞き返す。

「それはな……」

「そ、それは…？」

ゴクリと唾を呑む一夏。

「『せっかく男子がいるんだし、ここはやっぱりアピールするべきだよね、えへっ♪』……というノリだ！！」

前半部分は『きゃるるん♪』という効果音が付きそうなくらいキャピキャピとしたキャラを作って言ってみた。

ん？何故クラスメイトたちは鼻を押さえて悶えているのだ？

ふと千冬の方を見ても、顔を赤くして私と目線を合わせない。

一夏に至っては「こ、これがギャップ萌えか……」という、意味の

分からんことをほざいている。

「と、とにかく…、クラス代表は織斑、お前だ…！後セラ、そのキャピキャピとしたキャラは止めろ…」

「何故なのだ？」

私は目をパチクリさせながら首を傾げる。

すると「カハッ……！」という声を発して次々とクラスメイトが倒れた。

……だから何故？

「良いから止めるんだ！危険すぎる！」

「わ、分かった……」

千冬があまりにも必死に言うから私も了承した。

「で、では、授業を開始する…。全員、気持ちは分かるがそろそろ

復活しろ！」

「「「……はっ！？わ、私はいったい何を…？」」」

一斉にクラスメイトが起き上がり全員が同じタイミングで同じセリフを口にした。

その様子を見て少し笑ってしまったのは内緒だ。

……

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、セラ。試しに飛んでみせろ」

「了解だ…」

私は頭の中で素早く鮮明なイメージを描き、ＩＳを展開する。

「０．４秒か…。起動時間が少ない割にはかなり速いな。流石はイタリアの代表候補生、セラ・ヴィヴィット・アーレンだな」

『おぉー…』やら、『さ、流石はお姉さま！！』やらと賞賛の言葉がかけられた。

隣を見ると、一夏とセシリアもＩＳを展開していた。

「よし、飛べ」

千冬の号令がかかった直後、既に私は遥か上空にいた。

フライングしたわけではなく、ただ単に『天雷』のスペックを八割ほど使いこなせればこうなる。

私に続いてセシリアも直ぐに上がってきた。

「流石ですわね、セラさん」

「いや、これも天雷のおかげさ」

「あら、そのＩＳを造り出したのも貴女でしょう？ご謙遜なさらなくてもよくてよ？」

ニッコリと笑ってセシリアが私に言った。
セシリアはこの前のクラス代表戦以来、すっかり嫌味なところが無くなり、私も仲良くしている。

（それにしても一夏は遅いな…？）

ふと下を見てみると、セシリアや私に比べてかなり遅いスピードで上昇してきた。

「一夏、遅いぞ。ブルーティアーズより白式の方がスペックは上なんだぞ」

と、私が言うと、

「う…。それ、下で千冬ね「織斑先生と呼べ！」……何で聞こえてんだよ……。織斑先生にも言われたよ……」

下から聞こえた千冬の声に溜め息をつきながら一夏が言った。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

「そう言われてもなぁ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ」

一夏が訳が分からんという顔をした。

「一から理論を説明してやろうか？……まぁ、軽く数時間はかかるぞ？」

「遠慮しておきますっ！」

「フフッ…。賢明な判断だ」

即答だったのでつい笑ってしまった。

「セラさんマジ天使っ！！」

……この馬鹿は何を言っているんだか。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。そのときはふたりきりで――」

「一夏っ！！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」

セシリアが一夏に言いかけたとき、下から山田先生のインカムを借りた（奪った）篠ノ之が叫んでいた。

「織斑、オルコット、セラ、急下降と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチ以下だ」

「了解です。一夏さん、セラさん、お先に」

言って、すぐにセシリアは急下降をした。

「ふむ…。十センチだな。流石だと言っておこう」

「ありがとうございます」

どうやら難なくクリアーしたらしい。

「では一夏、私も先に行くぞ」

「あぁ。頑張れよ」

「ふっ…。言われんでも頑張るさ」

集中力を高め、地表へ向かって超スピードで降下する。

『ギュンッ――――――――――フッ』

「地表…五センチだ。見事だな」

千冬が私に言った。

「それはどうも。……で、一夏、そろそろ良いぞ！」

遥か上空にいる一夏に向かってオープンチャンネルで言う。

『オーケー。……行くぞ！』

一夏がそう言った直後、降下を始めた。……が、

『ギュンッ――――――――――！！』

速度が私ほどでは無いにしても速すぎる。……仕方ないな…。

「ふっ……！」

私は一夏に向かって突撃する。

「えっ…？」

「ちょっ、セラさんっ！？」

上空からは一夏の、後ろからはセシリアの間抜けた声が聞こえたが気にしない。

「セラっ、ぶ、ぶつかるっ!?退いてくれぇ――っ!!」

一夏は私に叫ぶ。
それに対して私は寧ろ一夏への速度を上げていた。

「……馬鹿者」

『パシィッ!!』

「ふぅ……」

ため息が出た。
現在、私が一夏の右足を掴んで一夏が宙吊りの状態になっている。

「地表二センチ。これまた見事だな。ま、セラが止めていなければもっと地核に近づけただろうな」

千冬が皮肉を込めて一夏に言った。

「……すまん、セラ。助かったよ」

「あぁ。……だがな、お前はまだ自分のＩＳのことを理解出来ていない。そして使いこなせてもいない。そんな状態であんなスピードで降下すれば止まりきれずに地面に衝突することくらい分かるだろう？」

「で、でも、セラの方がスピードは出てたし…」

「はぁ…。あのな、私は少なくとも自らのＩＳのことは全て把握しているつもりだ。創作者だしな。そして私は降下スピード、止まる位置、加速を計算してやっている。お前はまだイメージが掴めていない間は無茶をするなよ。お前に怪我でもあったらどうする」

「そういうことだ織斑。もっと自分の実力を把握しろ」

「……はい」

少し落ち込む一夏。
それを見て私は一夏の頭に手を置き、

「ま、私が少しずつ教えてやるさ。まだお前は慣れていないだけだ。お前は必ず強くなる」

ニッコリと微笑んで頭を撫でながら言った。

「あ、あぁ…。よろしく頼む／／／」

「では次は武器を展開してみろ。先ずは織斑」

「は、はい！」

一夏の集中力が高まっていくのが目に見えて分かる。

一夏の左手に粒子が集まり、刀を型どっていく。

そして『雪片・弐型』が展開された。

「遅い！０．５秒で出せるようになれ！」

「千冬は誉めないが、やり方やイメージは良かった。もう少し時間を縮めるよう練習していこう」

一夏は力強く頷いた。

「では、セシリア」

「はい！」

こちらもまた粒子が集まり、『スターライトｍｋ？』が握られていた。

「流石だな。代表候補生。――ただし、そのポーズは止めろ。横に展開して誰を撃つ気だ。正面に展開しろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージを纏めるために必要な――」

「直せ。いいな」

千冬が一睨みする。

「――、……はい」

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「えっ？あっ、は、はい」

ん…？何を慌てているんだ？

何やら手間取っているのか、なかなか粒子が形にならない。

「くっ…！」

「まだか？」

「す、すぐです。――ああ、もうッ！《インターセプター》！」

セシリアはとうとう武装の名を言い武装を展開した。

だがこれは教科書の頭の方に書かれてある、『初心者用』の手段だ。代表候補生であるセシリアがこの手段を使うのはかなり屈辱的だろう。

「…何秒かかっている。お前は実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題あり

ませんわ！」

とセシリアは言うが、この前のクラス代表決定戦の時には初心者である一夏に懐に入られていたが…。

「ほう…。この間の代表決定戦のとき、織斑に懐に入られていたのはどこのどいつだ？」

「うっ…。そ、それは…」

セシリアが黙る。

「セシリア、お前ももう少し頑張らんといかんな」

「そうですわね…」

私の言葉に対してセシリアは悔しそうに言った。

「ではセラ。二人に手本を見せてやれ」

千冬が私に言った。

「手本になるかは分からんが…」

頭の中で三本のランスと一丁の超電磁砲を思い描く。

粒子が発すると同時に超スピードで集束し、型を成す。

「0．5秒で四つの武器か。相変わらずお前には驚かされるな」

「ま、これくらいは何とかなるさ」

ウインクをしながら私は千冬に言った。

「お姉さま素敵……／／／」だの、「結婚して下さいっ！！」だのというのは聞こえなかったことにしておこう……。

「織斑、オルコット。お前たちもここまでとは言わんが、セラを見習って腕を上げろ。いいな」

「分かりましたわ」

「分かったよ」

と一夏とセシリアが言った直後、授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「ふむ…。もうこんな時間か。授業はこれで終いだ」

「さてと、私は風呂でも入ってくるかな…」

と口にしたことを少し後悔した。なぜなら――

「「「お姉さま、お背中お流し致しますっ！！」」」

と、クラスメイトが口を揃えて言い出したからだ。

「いや、いらん…」

……結局ついてこないよう説得するだけで二十分かかった。

―???side―

「ふうん、ここがＩＳ学園ね…」

私は今、ＩＳ学園の正面ゲート前に立っている。

「えっと、受付は……」

ポケットから一枚の紙を取り出し、拡げる。少々くしゃくしゃだけど気にしない。

「なになに…？本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあんのよっ！！」

あぁもう、イライラするわ。地図でも付けとけっての。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさぁ」

とりあえずじっとしてても何も出来ないし何も起こらないので行動することにする。

私は『実践主義』なのよね。……にしても、出迎えがないとは聞いてたけど、不親切すぎじゃない？

「誰かいないかなぁ…。生徒とか、先生とか、案内できそうな人」

まぁ時間も八時を過ぎてるし、こんな時間にうろつく人はあんま居ないよねぇ…。

あーもー、面倒くさいなー。空飛んで探そうかな……

と思ったけど止めた。タ●ンページ三冊分にもなる学園内重要規約書を思い出したから。

まだ転入手続きが終わってないのに学園内でＩＳを起動させたら問題になるもんね。最悪、外交問題にも発展するし。

政府のじじい達がそれだけは止めてくれ、と何回も懇願してた顔を思い出して私の気分はちょっと晴れた。

ふっふーん、まぁ私ってば重要人物だし、自重しないとねぇ～♪

私は昔から『歳をとっているだけで偉そうにしてる人』が嫌いだ。
だから今の世の中は凄く居心地がいい。

篠ノ之博士とあの子に感謝しなきゃ…。元気にしてるかな、あの子。

と、考えた瞬間、

「あぁん、待って下さい、お姉さまぁ！！」

ふと声が聞こえた。視線をやると、大勢の女子が大浴場と書かれてある建物へ向かっていくのが見えた。

――お姉さまって…。ま、ちょうどいいや、場所聞こっと。

声をかけようと、女子たちのもとへ歩く。

「あぁもう、鬱陶しい、体くらい一人で洗えるわ！！だからついて来るなっ！！そして腕を絡めるなっ！！」

不意を突かれて私の体はビクッと震えて足が止まる。

知ってる声に似てる…。いや、私があの子の声を聞き間違える訳がない。

予期しなかった再会に、私の鼓動が早まる。

（アタシって分かるかな…？分かるよね、ほんの二、三年会わなかっただけだし……）

そう自分に言い聞かせつつ、でも分かってもらえなかったらどうしようという不安に思考が乱れる。

（だ、大丈夫よ、あの子は記憶力が凄かったし、もしわからなかったとしても、そるは私が綺麗になったからだもん！）

ポジティブ思考に切り替え、再び歩みを再開する。

「セラ――」

あぁ、声が裏返っちゃった。すっごい意識してるみたいで恥ずかしいよぉ…。

「そんな冷たいことを言わないで、一緒に入りましょうよぉ♪」

「しつこいっ！！」

「あぁん、怒ったセラお姉さまも素敵っ！！」

「ぐっ……ここまでくると一種の病気だな…。ここは一旦……逃げる！」

「「「あぁっ！！置いてかないで下さいぃ！！」」」

あの子が全速力で走って行って、それを大量の女子が追いかけて行った。

「――誰よ、あの女の子達。お姉さまって、セラのこと？ってか何で腕を絡めたりベタベタ引っ付いたりしてんの？」

さっきまでの胸の高鳴りが一瞬で消え去った。ひどく冷たい感情と苛立ちが雪崩れ込んできた。

それからすぐに総合事務受付は見つかった。なぜかは分からないけど。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。ＩＳ学園へようこそ、鳳鈴音さん」

「セラ・ヴィヴィット・アーレンって何組ですか？」

「あぁ、噂の子？一組よ。鳳さんは二組だからお隣ね。そういえばあの子、クラス代表を決める模擬戦をやって、無傷の圧勝だったのに、クラス代表を男子に譲ったらしいわよ。やっぱりＩＳ創作者にしてイタリアの代表候補生だけはあるわよね」

「そうなんだ…」

やっぱり凄いな、セラは。

「じゃあ、二組のクラス代表って、もう決まってますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え、ええと……聞いてどうするの？」

私の発言に事務員は戸惑って聞き返す。

「お願いをしようかと思って。代表、アタシに譲ってって――」

―セラｓｉｄｅ―

「というわけで、織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと～！」

風呂へ行こうとして引き返した結果、一夏のクラス代表決定のパーティーに無理矢理連れていかれた。

で、私はというと……

「……離せ」

「「嫌ですぅ♪」」

両腕をガッチリとホールドされ、クラスメイトの女子たちにすりつかれていた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねぇ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

動けない私をチラチラ見て半分笑いながら（コイツらは私を普通にセラと呼ぶ奴らだ）、話している。

……相づちを打っているのは二組の奴だがな。なぜここにいるかは

私も知らん。

「人気者だな、一夏」

「ホントにそう思うか？……つーかセラには負けるだろ。見てみろよ、箒」

一夏と篠ノ之が私を見てくる。

「……見てるだけなら助けろ」

「「すまんが無理だ。頑張ってくれ」」

「息ピッタリだな、おい！」

まさかの完全なハモりに思わずつっこんでしまう。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君とセラ・ヴィヴィット・アーレンさんに特別インタビューをしに来ましたー！というわけで、ちょっとセラさんを解放してあげてくれるかな？」

と、二年か三年と思われる女生徒が声をかけると、仕方ない……と女子たちが離してくれた。

「ふぅ、助かった。すまんな」

「いやいやぁ～。にしてもモテモテだねぇ♪」

「……あまり嬉しくも無いがな。ところで……」

「あ、私は二年の黛薫子（まゆずみかおるこ）。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

「どうも。……では一応私も」

懐から『ＩＳ第二創作者、セラ・ヴィヴィット・アーレン』としての名刺を取り出して渡す。

「おぉー…。凄いなぁ！こんな物、私なんかが貰っちゃって良いのかな？」

「構わないさ。ＩＳの整備くらいはしてやるぞ？」

「あはは～。私は専用機無いからあんまり意味ないと思うけどねぇ…。まぁありがとう」

「専用機、無いのか？」

「うん。っていうか、専用機持ちの方が少ないよ？……セラさんが私のこと気に入ったら造ってくれたり？」

「よっぽど気に入ったら……な」

ニコッと笑って返す。

「うわぁ…。その笑顔は反則だわぁ…。スタイルも噂以上に良さそうだし……／／／」

「誉めてくれるのは嬉しいが、変な気は起こすなよ？」

「あ、あはは～……」

……話がかなり脱線してきたな。

「話がかなり脱線してきたな」

あ、一夏とハモった…。

「へっ？あ、織斑一夏君？居たんだ」

「居たよっ！！つーかアンタが呼んだんだろ！？」

「あはっ、そうでしたぁ♪じゃあ織斑一夏君、クラス代表になった感想を一言！」

「えっ！？えーと……まぁ、なんというか、がんばります？」

「……一夏、それは無いな」

「もっといいコメントちょうだいよ～。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

「自分、不器用ですから」

「二人とも、えらく前時代的な台詞だな」

「そう？」

「ひ、否定はできん……」

間抜けな奴らだな……。

「まぁ、適当に捏造しておくからいいとして」

……一夏にインタビューした意味、無くないか？

「じゃ、セラさんもコメントを」

「ん？そうだな…。私を越えるのは誰だっ！？」

「それ、某、龍の玉を集める超人のバトル漫画の世界チャンピオン（弱）の台詞？」

「それ、雑魚の台詞じゃん…。それを言った本人を越える人間、めちゃくちゃ居たしな」

「まぁネタだから構わん」

「「ネタなのかよっ！？」」

おぉ、一夏は色んな人とハモれる能力でもあるのか？凄いな。

「まぁそれもちょこっと捏造しとくよ。あ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくしですの？こういうコメントはあまり好きではありませんが、仕方ありませんわね」

とか言いつつ、やけに嬉しそうだな、おい。私たちのすぐ近くに待機してたしな。髪をセットし直していたのも他の奴らは見ていなかったが、私は見ていたからな。

「コホン、では先ずは――」

「あ、長くなるならいいや。適当に織斑君に惚れたとでも書いておくから」

「なっな、な……／／／」

何が言いたいのかはさっぱり分からんが、図星というのはよく分かった。

ん、篠ノ之が不機嫌そうだな。

「おい、篠ノ之」

「なっ!?……何だ、セラか。何か用か?」

「一夏のこと、取られるぞ?もっとアピールしなくて良いのか?」

「ななっ!?何を…／／／」

「ま、私は篠ノ之もセシリアも仲は悪くないしな、どちらも応援できるしな、篠ノ之、お前は素直になればそこそこ勝ち目はあるぞ?」

「ぐっ……言われんでも……」

「ま、後はお前次第だな。頑張ってくれ」

手をひらひらさせながら黛二年生の方へ戻る。

「で、写真でも撮るのか？」

「うん！じゃあ三人とも並んで～」

黛二年生がカメラを構える。

「それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」

「え？えっと……２？」

「馬鹿者。答えは７４．３７５だ」

「はい、せいか～い♪」

パシャッとシャッターが切られた。勿論私はプロだからな、カメラに向かって最高の笑顔を向けた。

「なんで全員入ってるんだ？」

一夏が言った。

「まぁ良いじゃないか。クラスの思い出になるしな」

篠ノ之がちゃっかり一夏の隣に入ってたのも確認済みだ。

「それにしても流石モデル。セラさん写真映りいいねー。後で個人の写真も撮って良い？」

「構わんが……誰にも見せるなよ？一応モデルの写真なんだ。流出は困る」

「分かってるよ～。個人的に宝物にするから♪」

……それならいいか。

……良いのか？何やら寒気が……。

「じゃあ私の部屋で良いか？一人で使っているし、最近セキュリティを改造しているから誰にも入られんし見られもせんしな」

最近はクラスの女子たちが部屋に侵入しようとしているからな。一応セキュリティは他のＩＳ学園のどの部屋よりも上だ。

「せ、セラさんの部屋？い、良いの…？」

おい、なぜ顔を赤らめる？
そしてクラスメイトども、「お姉さまの部屋……羨ましいっ！！」とか言うのは止めてくれ…。

「じゃ、行くか」

「うん……」

結局写真は数十枚……いや、百は余裕で越えてただろうな…。

色んな服やポーズを撮られた。際どいのもお願いします、と土下座までされたので仕方なく撮らせてやったら部屋が鼻血だらけになって、掃除が大変だったのはここだけの話だ…。

……

「セラさん、おはよー。ねぇ、転校生の噂聞いた？」

朝、席に着くなりクラスメイト（良い奴）に話しかけられた。……ちなみに私を『お姉さま』と呼ぶのはクラスメイト（追っかけ）とでも呼んでいる。

「この時期に転校生か？」

「うん。私もよく知らないんだけどね、どっかの国の代表候補生なんだって」

代表候補生……。

私はＩＳの第三世代型を各国に渡しに行くときに何人かには会っているからな…。知り合いかもな。

「うちのクラスに来るのか？」

「ううん、二組だって」

隣か。なら後で顔でも見に行くか…。

「まぁクラス対抗戦に備えて一夏を鍛えるのが先決か」

「う…。朝一からそんな話かよ……」

「ん、一夏か、おはよう」

「あぁ、おはようセラ。にしても転校生か」

「聞いてたのか？」

「ああ。ま、確かに俺にはクラス対抗戦の方が先決かもな」

「そうですわよ！クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが勤めさせていただきますわ。なにせ専用機を持つのは、創作者のセラさんを除いてクラスでわたくしと一夏さんだけなのですから」

「セシリアも来てたのか。朝から長々とご苦労なことだな」

セシリアには悪いが聞いてて少しだるかった。

「まぁ、やれるだけやってみるか」

「織斑くん、頑張ってねー」

「優勝賞品の『学食デザートの半年フリーパス（一クラス分）』の為にもね！」

「今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから余裕だよ」

「――その情報、古いよ」

教室の入り口から声が聞こえた。聞き覚えのある声だ。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組んで入り口のドアにもたれ掛かっていたのは――

「鈴……？お前、鈴か？」

一夏が呟いた。

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ？」

「んなっ……！？なんてこと言うのよ、アンタは！……っと、それより……」

鈴は走り出した。そして……

「セラぁ――っ！！会いたかったよぉ！！」

私に抱きついた。

「「「「あぁ――っ！！」」」」

その後クラスメイト（追っかけ）が騒いだのは言うまでもない。

さらにその後千冬によってＳＨＲの時間だと、騒いだクラスメイト＋鈴が出席簿アタックを喰らったのも言うまでもないだろう。

転校生、鳳鈴音（後書き）

感想、アドバイスお待ちしてます！

ホントにお待たせしてすみませんでしたｍ（＿＿）ｍ

女を懸けた、男と女の真剣勝負！？（前書き）

今回は短いです。

女を懸けた、男と女の真剣勝負！？

鈴が転校してきた日の昼休み……。

「よし、やっと昼休みか！セラ、箒、セシリア、飯行こうぜ！」

「ああ、そうだな」

「そうですわね」

「今日は何を食べようか…？」

「セラ、気がはえーよ」

一夏は私にそう言った。

「むぅ…。お腹が空いているのだから、仕方ないだろう」

プンプンと怒る私。

「はいはい、分かったよ」

一夏は軽く私の言葉を受け流した。酷い奴め。

そんなことを考えながら学食に移動した。

……後ろからぞろぞろとクラスメイト（追っかけ）がついてきていたのだがこの際気にしない。

一夏は券売機でいつも通り日替わりランチ、篠ノ之はきつねうどん、セシリアは洋食ランチを頼んだ。
私か？私は……まだ迷っている。と、その時、

「あ――っ！！セラだ！セラも学食？一緒に食べよ！」

と、鈴が私にかけよってきてくっついた。……思わず五百円玉を落としてしまったが、リフティングの要領で蹴り上げてキャッチした。
……自分でもよくこんなことが出来たなと思う。

「鈴か。……そうだ、今日はラーメンにしよう！」

鈴の持っているお盆の上のラーメンを見て食べたくなったので、ラ

ーメンに決めて食券を買う。
というか、そのお盆を持ったまま、勢いよく私にくっついてきて、溢さなかった鈴は凄いと思う。

「あ、セラもラーメンなんだ。アタシもだよ♪……えへへ～、お・そ・ろ・い♪」

ニコッと笑って言う鈴。
うん、可愛いな。

「じゃ、ラーメン貰ってくるから、先に食べててくれ」

「い～や♪セラと一緒に食べるもん♪」

「麺が伸びるぞ?」

「良いもーん」

よっぽど私と一緒に食べたいらしい。仕方ない、早く買ってくるか。

「じゃ、少し待ってろ。すぐに戻る」

「うん、待ってる♪」

私は現時点では誰も並んでいない（が、今にも並ぼうとしている女子が大量にいる様子の）食券を出すところ（名称は知らん）に全速力で駆けつけ、食券を出す。その後、食堂の調理師にアイコンタクトで「急ぎめに頼む」と伝えて一休み。その後「お待ち！」とラーメンが出てきたので受け取り、溢さないよう鈴の前にダッシュした。

……ちなみにこの間僅か３０秒だ。流石はプロの調理師。ＩＳに関することの私並みに良い仕事をするな。

「……待たせたな」

「へっ？……え、は、速っ！！」

鈴が目を見開いている。

「ま、鈴をあまり待たせたくなかったからな」

ニコッと笑い、ウインクして私は鈴に言った。

「……／／／」

「「「……／／／」」」

おい、鈴だけじゃなくて何故食堂にいる全生徒が顔を赤らめてうつむく？

「せ、セラは天然でそう言うことしたり言ったりするんだもん。……卑怯よ／／／」

いやいや鈴、私が何を言った？そしてそんなになるようなことはしていないぞ？

「？？？……お、やっと一夏たちも来たか」

「お、お待たせ……つーかさっきの笑顔ウインクは反則だろ／／／」

「わ、私もドキッとしたぞ……／／／」

「わ、わたくしも不覚ながら胸がドキッと致しましたわ……／／／」

全く、コイツらは何が言いたいのかさっぱり分からんな。

「って、ちょっと、アンタたちも一緒に食べるわけ!?」

「ん、悪いか?」

一夏たちはポケーッとした表情で鈴を見る。

「わ、悪いっていうか…、ち、ちょっとは空気読みなさいよ!ここは普通、私とセラが二人っきりで良いムードになりながら食べるところでしょ!?」

「イマイチ意味が分からん……」

「全くですわ……」

私も箒とセシリアに同意したい。

「む…。尚更一緒に食べる気になった!二人っきりなんざさせるか!」

一夏が鈴に張り合う。

「何よ！何か文句でもあるわけ？」

はぁ、……収拾がつかなくなってきたな。止めるか。

「二人とも、そこまでにしろ。私はお腹が空いている。ラーメンは伸びたら不味いしな。早く食べたい」

ん？止めるつもりが私の我が儘になってないか？

「まぁ、セラの為なら……」

「止めてやってもいいぜ……」

二人は言い合いを止めて、席に向かう。私たちも、それについていった。

「で、一夏、セラ。コイツは一体誰なんだ？知り合いのようだが…」

「わたくしも気になりますわ。説明をお願いできますか？」

篠ノ之とセシリアが鈴を見ながら私たち二人に尋ねる。

「あぁ、そっか。箒とは丁度入れ違いに転校してきたんだった。コイツは鳳鈴音。まぁ、一応俺とセラの幼なじみだよ」

「幼なじみだと？私だけではなかったのか？」

「ああ、残念ながら…な」

一夏はため息をつきながら言う。

「アタシだってイヤよ。セラとだけ幼なじみになれれば良かったのに……」

「……なぁ一夏、鈴。お前たち、そんなに仲悪かったか？一体何があったのだ？」

「別に何もねぇけど？」

「ま、あるとすれば、セラかな？」

鈴の言葉に私はキョトンとした。

「私が？」

「まぁね。あ、でも気にしなくて大丈夫よ。別に喧嘩って訳じゃ無いから。寧ろライバル意識？」

「まぁそんなとこ」

鈴と一夏が言う。

「そうか。それにしても鈴、また一段と可愛くなったな」

「えっ？そ、そぉ？」

「あぁ。中国に第三世代型を渡しに行ったとき、代表候補生の鈴には会えるはずだったのに会えなかったからな。……見違えた」

中国代表候補生は鈴だとは聞いていたが、何故か会えなかったのだ。

「ああ。あの時さ、インフルエンザにかかっちゃって…。セラが中国に居たのに会えなかったなんて、凄く悔しいわ。……ま、セラ手造りのＩＳを使えてるから良いけどね」

そう言って鈴は待機状態の自分の専用機を眺めてニヘヘと笑う。

「そうか。鈴はそのまま『甲龍』を使っているのか。使い心地はどうだ？」

「最高よ。流石はセラね。私にぴったりの専用機だったわ」

「気に入って貰えて何よりだ」

「あ、そういえば一夏、アンタ、クラス代表になったんだって？」

鈴がふと思い出したかのように言い、一夏を睨む。

「だ、だったら何だよ…？」

「何でセラに負けたくせに代表やってるわけ？セラも、何で譲っち

やったの？」

「知ってたのか？」

「当然。こっちに来てすぐに事務員に聞き出したわ」

流石は鈴。行動が早いな。

「セラが代表をやったら、クラス対抗戦…、全試合ボロ勝ちになってしまうぞ…」

箒が呟いた。

「クラス対抗戦？そういやそんなのあるって聞いたわね。……なら一夏！」

「…何だ？」

「私が勝ったら……セラに手を出さないで！」

鈴はビシッと一夏に指を指して言った。

ちなみに全員もう食べ終えているので、溢したりはしないので安心しろ。

「なっ……!?だ、だったら俺が勝ったらその逆だ!」

一夏も立ち上がって言う。

「アンタ、アタシに勝つ気?……上等じゃない。本気で潰すから」

「こっちこそ、手加減はしねぇ……!」

こうして、何故か私の意見も聞かずに私を懸けた二人の男女の戦いが幕を開けたのだった……。

女を懸けた、男と女の真剣勝負！？（後書き）

質問があったので、一応書いておきます。

セラのヒロインになるであろう人物（現時点で）

《確定》
◎鳳鈴音
◎シャルロット・デュノア
◎ラウラ・ボーデヴィッヒ

《検討中》
◎織斑千冬
◎篠ノ之束
◎更識楯無
◎更識簪

とりあえず、こんな感じです。もしヒロインにして欲しいキャラがいれば、感想、アドバイスと共にお願いします♪

クラス対抗戦！（前書き）

更新です！どうぞ！

クラス対抗戦！

一夏と鈴の、何故か私を懸けて真剣勝負宣言から早くも一週間…。

はしょりすぎた気がしないでもないが、まぁ気にしないでおこう。

この一週間、一夏と鈴はそれぞれＩＳの訓練をして過ごしていた。

そして今日はいよいよクラス対抗戦の当日である――。

「じゃあセラ、行ってくるね？」

「ああ、頑張れよ、鈴」

「うんっ！！セラの為に絶対に勝つからね！」

鈴がＶサインを作って言いました。

「……行くよ、『甲龍』」

鈴はそう言って、ピットを出ていった。

「さて、一夏の方にも行くか…」

……

「おっ！セラ、来てくれたのか？」

「ま、まぁな（鈴の後とは言えん……）」

「そうか……！セラ、見ててくれよ、俺、勝ってくるから」

一夏が気合いを入れて言った。

「ああ、頑張れ」

一夏もまた、ピットから勢いよく飛び立った。

―Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ―

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに誘導され、一夏と鈴は空中で向かい合う。

「一夏、降参するなら今のうちよ？」

「それはこっちの台詞だ。後で泣いても知らねぇぞ？」

「はん、言ってくれるじゃない。なら……」

『それでは両者、試合を始めてください』

《ビーーっ！！》

「こいつをお見舞いしてやるわ！」

《ガギィンッ！！》

開始合図のブザーの音と同時に、鈴が突撃し、かなり異形の青龍刀で斬りかかった。

一夏は瞬時に『雪片弐型』を展開し、辛うじて防ぐ。

「へぇ、初撃を防がれるとは思ってなかったわ。意外とやるじゃない。けど――」

今度はさっきのような直線的な一撃では無い。
フェイントを織り混ぜた、多方からの襲撃。
それも一度や二度ではない。十や二十は軽く越える回数だった。

「（まずっ…。このままじゃ消耗していくだけだ…。ここは一度距離を――）」

一夏はそう考えている。が、

「――甘いわよ」

鈴の肩アーマーがスライドして開いた。
一夏の、いや、この試合を観ている殆どの者の目にはその中心の球体が光ったようにしか見えなかった。

そしてその瞬間――

《ゴッ……！》

「ぐあっ……！！」

一夏は目には見えない衝撃に殴り飛ばされた。

「今のはまだ軽いジャブだから」

にやりと笑って鈴が言う。

ジャブ（牽制）の後にくるのは、ストレート（本命）と決まってい

る。つまり――

《ドガッ……！！》

「かはっ……！」

さっきよりも数段も強力な一撃が一夏の腹部に決まる。

《ヒュー……ドォォン！》

一夏は勢いよく地表に叩きつけられる。シールドバリアを通過したダメージが一夏に襲いかかる。
更に、ＩＳのシールドエネルギーにも七八という大きなダメージが入っていた。

「（これはかなり……まずい）」

一夏は焦り始めていた。

―セラｓｉｄｅ―

「衝撃砲か。なるほど、鈴は『甲龍』の特性をよく理解しているようだ」

私は一人呟く。

第三世代型ＩＳ『甲龍』。
その肩アーマーの内部には、衝撃砲という空間に圧力をかけて砲身を生成し、余剰で生じる衝撃を砲弾化して撃ち出すという隠し武器が搭載されている。
『甲龍』に私が搭載させた衝撃砲の砲弾、砲身は全く見えず、砲身斜角をほぼ無制限に撃てる。
更に操縦者が代表候補生という、各国トップクラスの腕を持つ人間であることもあり、欠点らしい欠点といえば、砲弾が直線的にしか飛ばないことくらいである。

「一夏はどう出るだろうな…？」

このまま何もできなければ敗けは確実だぞ、一夏！

―Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ―

「よくかわすじゃない。衝撃砲《龍咆》は砲身も砲弾も目に見えないのに」

だが、そう言いつつも鈴は余裕の表情だった。

それもその筈、ここまで一夏は衝撃砲を辛うじてかわしてはいるが、全てを完全にかわしている訳では無い。シールドエネルギーもそこそこ減っていた。

一方の鈴は、常に攻めている。一夏に攻撃の隙を与えず、衝撃砲を撃ち続け、隙を狙ってダメージを蓄積させていく。

つまり、現段階でダメージを受けているのは一夏一人だけなのだ。

「さてと、そろそろ終わらせてあげるわ」

鈴はそう言って青龍刀をグルっと一回転させ、パシッと音を立てて構える。

「（こうなったら……やるか！？）」

一夏の目の色が変わった。

そして一夏は鈴の衝撃砲が放たれる前に自分の攻撃範囲に、雪片弐型の射程内に鈴の姿を入れるための勝負に出た。

《ヴンッ……》

「き、消え…？ま、まさか『瞬間加速（イグニッション・ブースト）』！？」

「うおぉぉぉっ！！」

恐らくこの奇襲作戦は一度しか通用しない。これに全てをかけた一

夏の一撃が決まる！

――誰もが、鈴でさえそう思った。が、

《ズドォーンっ！！》

「「っ！？」」

突如大きな衝撃が、アリーナ全土に響き渡る。

鈴の衝撃砲では無い。
威力の桁が違う。

――ならば誰が…？

そう思って一夏と鈴はステージ中央に上がっている砂煙に視線をやった。そこに居たのは、深い灰色をした、『全身装甲』の異形な一

機のＩＳだった……。

―セラｓｉｄｅ―

「あのＩＳは…？いや、それよりまずい！あのＩＳは明らかに異常だ！すぐに一夏たちの元へ……」

そう言って私はピットから出ようとした。……が、

「アリーナ全体がロックされているだとっ！？」

一夏と鈴、そしてあの異形のＩＳが居るアリーナ内にはどこからも行けないようにロックされていた。

「くっ…、だがな、私を侮ってもらっては困る！」

私は空中投影のディスプレイを四枚呼び出し、ロックされたドアをハッキングする。

「ふん、この程度、私にかかれば……！」

カチンっとロックが外れる音がして、ゴゴゴゴ……！とドアが開く。

「よし、行くぞ、『天雷』！」

私はピットから飛び立った。

―一夏ｓｉｄｅ―

な、何なんだ、コイツは…？

『全身装甲』のＩＳなんて、聞いたことが無いぞ…。

ふと鈴の方を見ると、鈴も驚愕していた。

そうだ！先生に連絡を……！
そう思ってアリーナ内にいる先生に連絡しようとアリーナの地図を出す。
するとあることに気がついた…。

「鈴、アリーナが封鎖されてるっ！！」

「な、何ですって！？」

鈴も地図を出して確認する。

「う、嘘でしょ？アリーナのシールドを破るほどの威力の武器を搭載してるＩＳに、アタシたちだけで戦えって言うの…？」

「ぐっ…。だが、やるしか無いだろ……！」

「そ、そうね……！食らいなさい、『龍咆』っ！！」

よし、鈴が衝撃砲を撃ち出した。当たる！

そう思ったのに、

《グンッ……！》

「なっ！？」

「嘘っ！？かわされた！？」

あのＩＳは、急加速で衝撃砲をかわした。さらに、

「おわっ！？」

「きゃっ！！」

俺たちの間の僅かなスペースにビームを撃ってきた。これは本格的にまずいな…。

「ちょっ、一夏！何ボケッとしてんのよ！左よ！」

「えっ？」

鈴に言われて左を見る。
するとそこにはあの異形のＩＳがブラスターを構えていた。

「やっべ……」

今からじゃ避けるのも間に合わねぇ。
俺が諦めると同時に、異形のＩＳが発砲した。

《ギュン……！》

思わず目を瞑ってしまう。

《ドガァッ！！》

……あれ？
当たった音はしたのに、衝撃が全く来ない。

俺は恐る恐る目を開く。
すると、セラが俺の目の前にいた。

―セラｓｉｄｅ―

危なかったな。
私の天雷のワンオフ・アビリティ『反射』の効果で、あのＩＳのビームを反射して逆にダメージを与えてやった。

「大丈夫か、一夏、鈴？」

私は目線をあのＩＳに向けたまま、二人に尋ねる。

「あ、ああ！助かったよ」

「セラ！どうやって入ったの！？」

「あんなロックなんざ、私にかかればチョロいもんだ。軽くハッキングしてやったのさ」

ふんっと鼻をならしながら言ってやった。

「「……ホント、セラって規格外だよな（よね）」」

「ムッ、いくら私でもそういうことを言われると傷付くぞ、プンプンっ！」

「「……（か、可愛い）／／／」」

「まぁそれよりも、油断するな。ダメージは与えたがまだやっつけた訳じゃ無いからな」

「ああ……」

「オッケー！」

二人も再び構える。

「……来るぞ！」

《ギュンっ！！》

右斜め前からブラスターが放たれた。

私たちは全てかわす。

「甘いんだよ！はぁっ！！」

一気に接近して、瞬時に展開したランスで突く。

右腕の部分が外れ、内部が丸出しになった。

「機械だと？……無人機か。なるほど、そういうことか。一夏、これは無人機だ。遠慮なく雪片でぶった斬れ！」

私は後方の一夏に言う。

「無人機だって？ホントか！？」

「間違いない！！行けッ！！」

「分かった！うらぁぁ――っ！！」

《ブゥンっ！！》

雪片で無人機がぶったぎられる。丁度上半身と下半身でキレイに別れた。

「やった！」

「全く、セラも一夏も、ひやひやするわ…」

鈴の方へ戻る私たち。しかし、

《――敵ＩＳの再起動を確認！警告！ロックされています！》

「「何っ！？」」

振り替えると、私と一夏がそれぞれの腕に持たれているレーザー銃にロックされていた。
恐らくあのレーザーは、威力が並の物ではない！
エネルギーが減っている一夏や防御が薄い天雷では……耐えきれない！！

くそっ！！『反射』は一発の攻撃しか跳ね返せん！二人分は――

そう考えている間に、レーザーが放たれた。

「くそっ！！、こうなったら一夏だけでも……！！！」

私は一夏の前に立ち、『反射』を起動。

《ギュインっ！！》

一発のレーザーは跳ね返され、スピードを増して無人機へと命中し、無人機は粉々砕けた。

そしてそれと同時にもう一発が――

《ドカァァァン……！！》

私に当たり、大きな衝撃と音を発して消えた。

「せ、セラァァ――っ！！」

「い、いやぁ――っ！！」

私の意識が途切れる直前、一夏と鈴の絶叫がアリーナ中に響き渡った……。

クラス対抗戦！（後書き）

一夏を庇って大威力のレーザーを食らったセラ。どうなるんでしょう？

感想もらえると嬉しいです！

「この子をヒロインにして欲しい」というのも、まだまだ受付中です♪

二人の転校生（前書き）

サブタイトル通り、二人の転校生が来ます。
皆さんはもう誰かはお分かりですよね？

では、原作と少し違ってますが、どうぞ！

二人の転校生

「ここは……？痛っ…！」

何故か眠っていた私。
とりあえず起き上がろうとすると、腹部に痛みが走った。

目線をやると、血が滲んだ包帯でウエストをぐるぐる巻きにされていた。

服装はＩＳスーツだった。

ちなみに、今まで描写しなかったが、私のＩＳスーツは露出度がかなり高い。上下に別れていて、上は胸のすぐ下までしかなく、へそが丸出し。下はまぁスパッツみたいになっている。どちらもピッチリとしていて身体のラインがハッキリ分かる。

正直エロいと思う。

このＩＳスーツは父がヴィヴィット社で特注で作らせた。変態め…。

「そういえば私は何故寝ていたんだ…？」

身体の傷も含め、何故こんなことになったのか記憶を探ってみる。
すると、割とすぐに思い出した。

「そうか、一夏を庇って…。……そうだ、一夏たちは…！？」

そう言って立ち上がろうとした。……が、

「馬鹿者、怪我人は大人しくしてろ」

《ペチッ……！》

「あいたっ！」

私の頭に軽くチョップが当たる。ふと横を見ると、千冬が腕を組んで立っていた。

「全く、お前は無茶ばかりしおって…。最後の攻撃を受けたとき、絶対防御も切っていただろう？」

「そうなのか…？」

気づかなかったな…。
もしかすると、『反射』の影響かもしれんな。……後で調べるか。

「千冬」

「何だ？」

「心配……かけたな」

私は苦笑しながら言った。

「心配など……しておらん…。お前のことを信頼しているからな」

と、顔を紅くしながら言う千冬であった。……可愛いな。

《ペチンッ！》

「にゃふっ！？な、何をするっ！？」

突然叩かれたから変な声が出てしまったではないか…。

「（に、『にゃふっ』だと!?コイツは本当に……／／／）い、要らんことを考えていたのが顔に出ていたからだっ！」

こ、コイツはエスパーかっ!?

「と、とにかく私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も後少し休んだら部屋に戻って構わないぞ」

「あぁ、ありがとう（ニコッ）」

「ふ、ふんっ！／／／」

千冬はすたすたと保健室を出ていった。

私はもう一眠りしようと掛布団を首元まで掛け直し、目を瞑る。すると、

《ドタドタドタ……！》

複数の足音が近づいてくる。

《シャッ……！》

私が寝ているベッドの周りのカーテンが勢いよく開けられる。そして入ってきたのは――

「「セラっ！！大丈夫か（なの）っ！？身体の具合はっ！？痛いところはっ！？」」

一夏と鈴の二人だった。

「お前たち、息ピッタリだな…。というか、一応怪我人の前なんだから少し静かにしろ。傷に障るだろう……」

尤もらしいことを言って二人の後ろから入ってきたのは篠ノ之だ。

「三人とも、来てくれたのか…。ありがとう、もう大丈夫だ」

そう言って首元までかかっていた布団をどける。すると、

「「「なっ……！！／／／」」」

三人ともが顔を赤らめて私から目を逸らす。

「ん？どうした？」

「いや、その……」

「いつもはＩＳを装着してるし、あまり意識して無かったが……」

「セラのＩＳスーツって……」

「「「スッゴくエロいっ！！／／／」」」

「そうか？別にこんなもの、水着と変わらん」

何をそんなに恥ずかしがることがあるのか分からん…。

私はＩＳスーツの襟元を持ってパタパタと扇ぐ。

「ちょっとセラっ！！一夏がいるのよ！？そんなことしたら先っちょが見えちゃうじゃない！！」

「……／／／」

「おい、一夏…。何をニヤついているんだ？この変態」

篠ノ之が一夏に言った。

「まぁとにかく……」

《ぐいっ……ギュッ》

「ふぇ…？」

「心配かけたな、すまなかった」

私は鈴を優しく胸元に抱き寄せて頭を撫でる。

「せ、セラぁ……／／／」

一夏は羨ましそうな顔で見ている。……あっ、そういえば、

「なぁ一夏、鈴。結局勝負はつかなかったが、どうするんだ？」

「「！！！！！」」

二人の目の色が変わる。

「せ、セラっ！！」

「何だ、鈴？」

「あのね、昔私とした約束、覚えてる？」

「何故このタイミングで言うのかは分からんが、ちゃんと覚えてるぞ。鈴が料理が上手くなったら私に毎日ご飯を作ってくれるってやつだろう？」

私が言うと、鈴は目を輝かせた。

「そ、そんな約束いつの間に……」

一夏は呟く。

「そうっ！！でね、アタシさ、毎日お料理してさ、だいぶ上達したと思うんだよね…。でね、その……」

「何だ？」

「そのうちセラの為に中華料理作ってあげたいなって。何が食べたい？」

「そうだな…。鈴が作るなら、何でも食べたいかな？」

「〜〜〜っ！！も、もぉ、セラってばぁ……／／／」

鈴は両手で顔を覆って照れている。

「一夏、これから私はセラにガンガンアピールするつもりだから」

ようやく照れが収まった鈴が一夏に指を指して言った。

「の、挑むところだ！」

ちなみに置き去りにされた私と篠ノ之は――

「セラ、なんだか分からんが……頑張れよ」

「……あぁ」

そんなやり取りをしていた。

―千冬ｓｉｄｅ―

「あのＩＳの解析結果が出ましたよ」

山田君が言った。

「あぁ。どうだった？」

「はい。戦闘中セラさんが叫んでいたように、無人機でした」

「そうか」

「どのような方法で動いていたかは不明です。セラさんが跳ね返したレーザーにより、機能中枢が熔けてしまっていました。修復も恐らく無理かと」

「コアはどうだった？」

「それが、登録されていないコアでした」

「そうか」

山田君の報告に、やはりと確信した。

「何か心当たりでもあるんですか？」

私の表情を見て、山田君が聞いてきた。

「いや、無い。……今は、な……」

そう、今は……。

―セラｓｉｄｅ―

あの対抗戦からしばらく経ち、六月。私の傷もようやく完治し、幸い特に傷跡も残らなかった。

「さてと、山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

まともに聞いてはいなかったが、千冬が連絡事項を言い、山田先生にバトンタッチした。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名ですっ」

「ほう……」

「「「え……えぇ――っ！！？」」」

いきなりの転校生紹介にクラスがざわつく。

「失礼します」

「……」

二人の転校生が入ってきた。それを見てざわめきがピタッと止まった。まぁ仕方がないだろう。何故なら、そのうち一人が男子の制服を着ていたのだから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルルはにこやかに丁寧な挨拶をした。

クラス全員が呆気に取られた。私は他とは違う意味だったが。

「お、男……？」

誰かが呟く。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

と、シャルル・デュノアが言うが、私はずっと気になっていることがある。

「お前、シャルか？」

私は無意識のうちに聞いていた。

バッと転校生二人を含めたクラスメイト全員が私に視線を向ける。

「も、もしかして…、セラなの……？」

シャルは言った。

「あぁ。だがお前は確か――」

「せ、セラ！後でゆっくり話したいから良いかなっ！？」

シャルが焦って私の言葉を遮る。

「わ、分かった……」

「では、もう一人の自己紹介もする。挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

軍人のような雰囲気の女子。こちらにも見覚えがある。というか、

こちらも完全に知り合いだ。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました。……ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「「「……」」」

あまりにも短い自己紹介に、クラスメイトは沈黙。そんなとき、ラウラは一夏の方を見て目を見開いた。

「！貴様が――」

つかつかと一夏の方へ歩いていく。

《バシンッ！》

「……」

「は？」

いきなり一夏を平手打ちした。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

クラス中が一夏に注目する。あの篠ノ之でさえポカーンと口を開けている。

「い、いきなり何しやがる！」

「ふんっ……」

「ま、まさか一夏……、お、お前……、転校生に何かやらしいことでもしたのか？」

迫真の演技で一夏に言った。

「なっ！？一夏っ！！お前――」

篠ノ之がギロッと一夏を睨む。

「し、してないっ！！セラも、そんなややこしくなるようなことを言うな！！」

「「「あははははっ」」」

一夏が言うと、クラス中に笑い声が響く。

そんな中、ラウラは私をみて驚愕していた。

「なっ！？セラだとっ！？」

私の方へもつかつかと歩いてくるラウラ。

「「「お、お姉さまっ、危ないっ！！！」」」

クラスメイト（追っかけ）の声が聞こえるが気にしないでラウラを見つめる。そして――

「さ、サインを下さい、セラ博士っ！！！」

ラウラは私にキラキラとした眼差しを送ってきた。

「「「……へっ？」」」

さっきとは違う意味で全員がポカーンだ。

「じ、実は私、セラ博士の操縦技術とＩＳ製作技術に憧れておりまして…、以前ドイツでお会いした時は博士はお忙しそうでしたので、少ししか話が出来ず……」

「そうか。ドイツの第三世代の発展具合はどうだ？」

「はいっ、お陰様で、大きく進歩しております！」

「ラウラも専用機持ちの代表候補生だったな。またそのうち診てやろう」

「光栄ですっ！！」

完全に周りが空気化してしまった。

「すまん、織斑先生、山田先生。続きは後にするので続けてくれ」

「え…？あ、はい。ホームルームは以上です。すぐに着替えて第二グラウンドに集合してください。二組と合同でＩＳ模擬戦闘をやります！」

「先生、シャルはとある事情で私が面倒を見るが構わんか？」

「ん？セラか。まぁお前なら構わんだろう。但し問題はおこすなよ？」

「了解した。じゃあ行くぞ、シャル」

「へっ？あ、うん！」

私はシャルの手を引き教室をでて第二アリーナ更衣室に向かう。

「セラ、その……」

「黙っていてやるさ。お前の本当の性別は」

「良いの？」

「あぁ。何故お前が男装をしているのかは知らんが、何かしら事情があるんだろう？」

「うん…」

「但し、困ったことがあれば、直ぐに私に相談しろ。私はこのＩＳ学園でも、それなりに地位はあるからな（笑）」

「そうなんだ。……うん、頼りにしてるね、お姉さま？」

「嫌味か…」

そんな話をしながらも、他の生徒に見つかる前に更衣室に到着する。

「さて、とっとと着替えるか」

私はＩＳと共に粒子化してあるＩＳスーツを展開する。

「セラ、着替え早いね…って、そのスーツはダメだよっ！！／／／」

シャルは紅くなって後ろを向く。いつも通りの露出度が高いＩＳスーツだが、シャルも女だし気にはしない。

「何を言ってるんだか。別にシャルに見られてどうなることも無いだろ？」

「そ、そうだけど…（いくら何でもえっちぃよぉ…。セラは身体も綺麗だし…って、わぁーっ！ボクは何を考えてるんだぁっ！！）」

「シャル、悶えてないで早く着替えた方が良いぞ。多分後数分で一夏も来る。見られると都合が悪いだろう？」

「へっ？わ、分かった！」

シャルは下にＩＳスーツを着ていたらしく、早着替えを済ました。

「では早く行くぞ。千冬の授業で遅刻は命取りだからな」

「千冬って、織斑先生だよね？そんなに恐いの？」

「あぁ。あの出席簿アタックはもはや殺人技だな。私以外では避けられんだろうな」

「そ、そうなんだ…」

シャルは苦笑いして呟く。

「ま、シャルは食らわないように私が何とかしてやるから安心してろ」

「うん、ホント何から何までごめんね」

「気にするな」

私たちは一緒に第二グラウンドに急いで向かった。

二人の転校生（後書き）

はい、シャルとラウラはセラの顔馴染みということになりました！

そのうち出逢いも番外編として書こうかな？

千冬もヒロイン候補っぽくなっちゃいましたね。

今後の展開は作者も分かりません！（笑）

感想もらえたら嬉しいです♪

ＩＳ実戦訓練！（前書き）

更新です♪どーぞ！

ＩＳ実戦訓練！

私たちが第二グラウンドに到着し、五分ほど経ってから、始業のチャイムの直後に一夏が走ってきた。

「遅い」

《パシーンッ！》

「〜〜〜っ！」

声にならない叫びを上げて苦痛にもがく一夏。

「あ、あれがさっき言ってた……？」

「あぁ。凄いだろ？私以外では絶対避けられんな」

「た、確かに凄いよ……」

シャルは苦笑しながら言った。

「いてて……」

一夏が頭を擦りながら私たちのところへ来た。

「織斑くん、大丈夫？」

「一夏でいいよ、俺もシャルルって呼ぶから」

「分かったよ。……にしても、災難だったね」

「ったく、ホントだぜ…。いてぇ…」

「ま、お前が遅刻するから悪いな」

「仕方ないだろ、トイレ行ってたんだから」

コイツ、そんなことを女子の目の前で大声で言うか、普通？

「はぁ…」

「な、何で溜め息？」

「いや、デリカシーとかが無い奴だなって思ってな。それより千冬にまたしばかれる前にとっとと並んだ方が良いぞ？シャルも、行くぞ」

私がそう言うと、二人はさっきの出席簿アタックを思い出したのか、急いで列へと並んだ。

「さて、全員並んだな。では今日は実戦訓練を行う。先ずは専用機持ちに実戦を見せてもらおう。まずは……そうだな。鳳、セシリア、お前たちだ」

「千ふ……織斑先生、まずはということは、その後私たちもやるのか？」

「ふむ……。なら、最も実力があるセラ、お前にも実戦をしてもらう。いいな？」

しまった、余計なことを言ってしまったか。

「……了解だ」

「ところで織斑先生、わたくし達の相手はどなたですの？鈴さんと戦えば宜しいので？」

「いや、お前たちの相手は――」

《キィィィン……！》

千冬につられて上を見上げると、上から誰かが『ラファール・リヴァイヴ』に乗って降りてくる。

「ど、どいてくださいぃ～っ！！」

この声……山田先生？

と、考えていると、山田先生は勢いを増して私の方に突っ込んでくる。

「セラさん、危なぁい！そこをどいてくださぁい！」

「はぁ、仕方ないな……」

私は瞬時に『天雷』の両腕を部分展開し、

《パシィッ！》

「きゃっ！」

山田先生をお姫様抱っこでキャッチした。

「全く…。大丈夫ですか？」

「は、はい。助かりました」

私は山田先生を下ろして再び千冬の方を向く。

「お、織斑先生？アタシ達の相手って……」

「山田先生だ。なぁに、安心しろ。山田先生は元代表候補生だ。腕も一流だしな。今のお前たちでは絶対勝てん」

千冬が二人に言った。

「私が代表候補生だったのは昔の話ですよぉ～。それに、候補生止まりでしたしね～」

あはは～っと山田先生は笑いながら言う。

「さて、では始めるぞ？準備は良いな？」

「構いませんわ！」

「アタシも良いです」

「お願いしますっ」

いつの間にかセシリアと鈴もそれぞれ『ブルーティアーズ』と『甲龍』を展開していた。

「では、はじめ！」

《ギュンッ！》

三人が一気に上昇し、向かい合う。そしてまず仕掛けたのはセシリアと鈴ペアだ。が、山田先生はいとも簡単に回避する。

「さて、では……よし、ちょうど良いか。デュノア、山田先生が使っているＩＳの解説をしてみろ」

「あっ、はい！」

シャルは上空で行われている戦闘を見上げながら説明を開始する。

「現在山田先生が使用されているＩＳは、『ラファール・リヴァイヴ』で、第二世代最後期の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付け武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ＩＳの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七ヵ国でライセンス生産、十二ヵ国で制式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替えを両立しています。装備によって格闘、射撃、防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティーが多いことでも知られています」

「ああ、一旦そこまででいい。……勝負がつくぞ」

あまりにもシャルがスラスラと言うので、私すら感心して聞き入っ

てしまって試合を見るのを忘れていた。私はすぐに試合を見るのを再開した。

すると、山田先生の射撃がセシリアを誘導し、鈴にぶつかったところへグレネードを投擲。爆発が起こって、二人が墜ちた。

「くっ、うぅ……まさかこのわたくしが……」

「アンタねぇ……簡単に動き読まれてアタシの邪魔しないでよ！」

「り、鈴さんこそ、無駄にぼかすかと衝撃砲を撃ちすぎですわ！」

二人は言い合い…いや、敗因を相手に押し付け合っている。

「これで教員の実力が分かっただろう？今後は敬うように。……さて、では次に本物の実力を見せてもらう。セラ」

「了解だ」

私は『天雷』を展開する。

「行くぞ、『天雷』！」

《了解です、マスター》

『天雷』からの返事を聞き、山田先生に向かい合う。

「では全員しっかりと見ていろよ？……では、開始！」

《ヴンッ……！》

「は、速いっ！！」

誰かが呟く。

『天雷』のスピードのスペックは現在するＩＳでも段を抜いてトップだ。『瞬間加速』を使わなくてもこれくらいは容易い。

「行きますっ！！はぁっ！」

《ダダダダダ……》

無数の弾丸が私に襲いかかる。並の操縦者ではかわすのは愚か、防

ぐことすら難しい程の量だ。が、

『超電磁砲』を展開し、チャージ。そして……撃ち出すっ！

《ドガァッ！！！……パラパラ…》

私に命中するはずだった弾丸は、電磁砲を受けて熔ける。

「『天雷』、今の出力は何％だ？」

《およそ５５％です》

５５％か、なかなか良いものを作ったな…。

「ま、まだまだ行きますよっ！！」

《ダダダダダ……》

今度は正面からではなく、飛び回りながら色々な方向から撃ってくる。確かにこれならば超電磁砲では撃ち落としきれんな。ならば……

「ワンオフ・アビリティ『反射』っ！！」

一瞬の間だけ、相手のどんな攻撃も跳ね返すことが出来る『反射』。
こういった多方向一斉攻撃には滅法強い。

《バチィッ！ギンギンギンっ！！》

同時に私に何十発の弾丸が命中し、跳ね返る。
跳ね返った弾丸が、他の銃弾に当たって相殺する。

《……『絶対防御』、瞬間的に遮断されています。自動再起動します》

「っ！！……やはりか」

やはり『反射』を使うと『絶対防御』が切れるらしいな。

「ま、まさかこの量の銃弾を全て撃ち落としきるなんて……！」

山田先生は驚愕している。――好機っ！！

私はランスを右手に瞬時展開。
一気に加速し突っ込む。

「はぁっ！！」

鋭い突きが一閃。しかし、山田先生は紙一重でかわした。

「まだまだ！今度は二本だっ！！」

即時に左手にもランスを展開し、両手のランスで突きの乱舞。山田先生は必死にかわすが、少しずつ当たり始める。

「ぐっ……！い、『瞬間加速』っ！！」

山田先生は『瞬間加速』で私の後ろに回り込む。そしてグレネードを投擲した。

《ドカァァァン……！！》

「やった……？」

「残念、まだ墜ちてないぞ」

私もまた瞬間加速で山田先生の死角に回り込んだ。

「う、後ろっ！？」

山田先生は、ばっ、と振り返る。が、

「それも残念、上だ！はっ！！！」

《バキィッ！》

「きゃっ！！」

私は山田先生の真上から、全力で踵落としを叩き込む。

《ヒュー……ドガァッ！！！》

山田先生は地面に叩きつけられ、大ダメージを受ける。さっきの突きの乱舞でも少しダメージを受けていたようで、山田先生のシール

ドエネルギーはもう殆どない。

「くっ、まだ――」

「いや、チェックメイトだ」

山田先生は落下後すぐに上へ視線を向けるが、既に私は山田先生の右側からランスを首元につきつけていた。

「……ま、参りましたぁ…」

「勝負あり！勝者、セラ！」

千冬が宣言した。

「『天雷』、お疲れだ」

山田先生は『ラファール・リヴァイヴ』を、私は『天雷』を解除する。

「流石だと言っておこう。全員、セラを見習うことだ。では班に分

かれて実習を行う。専用機持ちは織斑、オルコット、鳳、デュノア、ボーデヴィッヒにセラか。だがセラが見ると不公平だからな…。では、八人グループになり、装着から歩行までを行え。各班の班長は専用機持ちがしろ。ただし、セラは全体を回ってくれ」

「分かった」

「では、出席番号順に一人ずつ各班に入っていけ。順番はさっきの通りだ」

おそらく勝手に生徒だけでグループを作ったら一夏とシャルのところに密集するだろうからな。流石は千冬。よく分かっている。

「さてと、では私は適当に見て回るか…」

私はブラブラと歩き出した。

……

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機を整備する。各グループで格納庫に集合しろ。解散！」

千冬の号令で各人解散していく。

「おーいシャル、一緒に更衣室まで行こうぜ！」

一夏がシャルを誘う。

「あ、え～と……」

シャルは咄嗟に言い訳が思いつかないようだ。助けてやるか。

「あー、すまん一夏。少しシャルに用があるから先に行っててくれ」

「ん？セラ。なんかシャルルと仲良いな」

「まぁな。シャル、行こうか」

「あ、うん！」

私はシャルの手を引いて第二グラウンドから出ていった。

「まさかシャルルもセラを狙って……？」

一夏が何か言っていたようだが、私には何を言っていたのか聞こえなかった。

「セラ、また助けられたね、ありがとう」

「まぁお前の秘密を知っているのは私だけだからな。私がお前を守ってやらないとな」

「ま、守って……えへへっ／／／」

シャルは少し顔を紅くしながら微笑んだ。

「……っ／／／」

その笑みを可愛いと思ってしまい、私も顔が熱くなる。

「セラ、顔が紅いよ？」

「うっ…。そ、そろそろ一夏も着替え終わってるだろう！更衣室へ行こう！」

自分でも少し不自然に焦っている。

「あぁ、誤魔化したぁ♪もう、仕方ないなぁ～♪行こっか！」

今度は私がシャルに手を引かれ、更衣室へ向かった。

（こういうのも……悪くないかもな）

シャルの手の温かさを感じながら、私は胸をドキドキさせながらそんなことを考えていた…。

ＩＳ実戦訓練！（後書き）

感想をもらえたら張り切って続きを書き出す単純な作者（笑）

ヒロインの方は、今のところ候補だった千冬、束、楯無、簪の四人ともをヒロインにしてほしいという意見しか無いです（笑）

とりあえず千冬は決定かな？後の三人は登場次第考えますが、今の予定ではハーレム入りさせたいと思ってます！

もし他のキャラをハーレム入りさせてほしいというのがあれば、感想と共に書きこんでもらえると嬉しいです♪

ではまた近々更新しますのでその時まで、アディオス（笑）

波乱の予感（前書き）

毎回いろんな方から感想を貰えて嬉しいです♪

感謝を込めて更新です（笑）

波乱の予感

昼休み、私たちは屋上にいた。私も今日は弁当を作ってきたから丁度良かった。

「セラ～、アタシの酢豚、食べる？」

鈴がタッパーを開いて私に酢豚を見せてきた。

「おぉ、なかなか良い匂いがするな。美味しそうじゃないか」

「えへっ♪今朝作ってみたんだ♪ほらほら、食べて食べて！」

鈴がニコニコと私に言ってくれたので、ありがたくいただく。

「はむっ……ん、凄く美味しいよ、ありがとう（ニコッ）」

「あぁんっ、幸せ……！」

鈴が目をトロンとさせて悶える。

一夏も箒の手作り弁当を貰っている。箒もなかなかやるじゃないか。

「む…。わ、わたくしも何か作って来るべきでしたわ……（ボソッ）」

私だけにはセシリアの呟きが聞こえた。……イギリス人の味覚で、ましてや包丁すら握ったことの無さそうな奴だからな…。どんな物になるのやら……。

私は苦笑が止まらない（笑）。

「ところでセラはどんなお弁当を作ってきたの？」

シャルが私の弁当箱を見て尋ねる。

「あぁ、別に普通だぞ？ただ、一応モデルをやっている以上、栄養バランスは考えて低カロリーにしてるがな」

パカッと弁当の蓋を開ける。

「わぁっ！美味しそうだね、全部セラの手作り？」

シャルが目を輝かせた。
弁当の中にはお握りと唐揚げ、ポテトサラダ、蒟蒻の唐辛子炒め、黒豆などの色とりどりの献立が並んでいる。

「まぁな。一口食べるか？」

「良いの？じゃあいただこうかな？」

「何がいい？」

「じゃあね、唐揚げがいいな」

「分かった」

私は弁当箱から唐揚げを一つ箸でつまんでシャルの口元まで運んで……

「ほら、あ～ん」

微笑みながらそう言った。

「ふえっ！？えと、あ、あ～ん……／／／」

顔を紅くしながらもモグモグと唐揚げを味わうシャル。

「あ…、凄く美味しい……」

「そうか、それは良かった」

いつも自分の好みで料理しているからな。他人に食べさせる機会もなかなか無い。

「し、シャルルだけずるいわ！セラ、アタシも！あ～ん！」

「な、何だいきなり…。仕方ないな、あ～ん」

「はむっ……あん、美味しいっ♪」

鈴もまた、私の唐揚げを絶賛してくれた。

ちなみにこの頃一夏は、篠ノ之とセシリアの二人に半ば強引に口の中にねじ込まれていた。

「もがもがが――っ！！（こんなに入るか――っ！！）」

何やら叫んでいるが、何を言ってるんだか全く分からん。ここは放置しとくか。

――十分後……――

「ふぅ、やっと飲み込めた……。早く残りも食べないと、俺はまたアリーナの更衣室まで行かないとダメだしな」

「ん？一夏ってもしかして実習で毎回スーツ脱いでんの？」

「え？脱がないとダメだろ？」

一夏が鈴に聞き返す。

「女子の半分くらいは着たままだぞ？面倒だしな」

私も一夏に言う。

「ていうことは……」

一夏は私たちをジロジロと眺めだす。

「ちょっ、女子の身体をジロジロ見んな！この変態っ！！」

「え？いや、別にそういう意味で――」

「い、意味はどうであれ、紳士的ではないと言っているのですわ！」

「だから眺めてただけ――」

「お、女の身体を凝視しておいて、眺めてただけとはなんだ！破廉恥だぞ！」

「いや、だから――」

「一夏、そういうのはちょっとヤダな…」

「……」

私の一言で一夏は黙って『ｏｒｚ』の状態になっていた。

「あはは……」

シャルは苦笑いだ。

―数日後……―

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、経験の差だけじゃなくて、射撃の特性を理解しきっていないからだよ」

「そ、そうなのか？一応分かっているつもりだったんだが……」

シャルとラウラが転入してきてから5日が経ち、今日は土曜日だ。
今は一夏がシャルにＩＳ戦闘のレクチャーを受けている。

「うーん、知識として知ってるだけって感じかな。さっきのボクとの試合でもあまり間合いを詰められなかったしね」

「『瞬間加速』も読まれてたしな……」

「一夏の『瞬間加速』って直線的すぎて反応出来なくても動きが読めちゃうからね。まぁだからといって無理に軌道を変えると身体に負荷が掛かりすぎて危ないからダメだけど」

「直線的かぁ…。あっ、ちなみにセラに勝てないのは？」

「あー……圧倒的な実力の差だね」

「やっぱりか…」

「まぁ落ち込まなくて良いと思うよ？セラの操縦技術は異常と言っ

て良いほどの高さなんだ。ボクらみたいな代表候補生ですら攻撃を当てられるかどうか……」

少し私を過大評価し過ぎだと思うがな…。

「一夏の『白式』って後付武装がないんだよね？」

「ああ。何回かはセラにも見てもらったんだけどな、拡張領域がほぼ０で、『幾ら何でもこれを拡張するには時間が掛かりすぎる』そうだ。だから量子変換は難しいってさ」

「多分、ワンオフ・アビリティに容量が取られ過ぎてるんじゃ無いかなぁ？」

「ワンオフ・アビリティって……なんだっけ？」

「言葉通り、唯一仕様（ワンオフ）の特殊才能（アビリティ）だよ。各ＩＳが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する能力。普通は第二形態（セカンド・フォーム）から発現するんだけど、それでも発現しない機体の方が圧倒的に多いから、それ以外の特殊能力を複数の人間が使えるようにしたのが、セラの造った第三世代型ＩＳなんだ。オルコットさんの『ブルー・ティアーズ』や鳳さんの『衝撃砲』みたいにね」

シャルの説明は分かりやすいな。第三世代型のこともよく学んでいる。

「なるほど。それで、『白式』の唯一仕様ってのはやっぱり『零落白夜』なのか？」

エネルギー性質の物を何であれ全て無効化し消滅させる『白式』の最大攻撃能力。それが『零落白夜』だ。しかし、自身のシールドエネルギーも削るという、言わば諸刃の剣だ。

「セラの『天雷』もそうだけど、『白式』は第一形態なのにアビリティがあるってだけで物凄い異常事態だよ。前例なんて全く無いし」

「そっかぁ。でもまぁ、今は考えても仕方ないだろうし、そのことは置いておこうぜ」

はぁ、全く呆れるな…。

「シャル、私も少し、超電磁砲での射撃練習に行ってくる。すぐに戻ってくるからそれまで一夏を頼むな」

「分かったよ。がんばってね♪」

無言で手をヒラヒラさせて歩いていく私。

「さて、じゃあ行くぞ、『天雷』ッ！」

《了解》

『天雷』を展開し、話しかける。

「今から超電磁砲でのトレーニングをする。出力を５％にして命中を高めるつもりだ。出力の強さのチェックを頼むぞ」

《了解。少数第一位まで出力をチェック致します》

「では行くぞ！」

前方１５～３０ｍほど離れたところに数十枚の的が現れる。

《バチチチッ……ダダダダダ……！》

電撃をチャージし、出力を抑えて連射する。

《ドドドドドドド……！》

全て的の中に当たる。

「ふぅ、どうだった？」

《はい、計測結果によると、三発目、六発目、十四発目は的の中心を捉えていません。さらに、最初から五発目までと十二発目、十七発目と二十三発目は出力が８％前後に上がっていました》

「そうか、ありがとう。……にしてもまだまだだな…」

《いえ、四十発中三十発は完璧でした。上出来です》

「ありがとう。そろそろ一夏とシャルのところに戻るか」

私は『天雷』を解除し、戻っていく。

「――シャルルのＩＳって『リヴァイヴ』だよな？山田先生が操縦

してたのとだいぶ違うようにみえるけど、ホントに同じ機体なのか？」

戻ってみると一夏がシャルに質問していた。

「ああ、ボクのは専用機だからかなりいじってあるよ。正式にはこの子の名前は『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』。デュノア社が造った『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』を見て更にセラが改造して第三世代型にした『リヴァイヴ』なんだ。基本装備（プリセット）をいくつか外して、その上で拡張領域を倍にするのが『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』なんだけど、それのスペックと拡張領域を更に1．5倍にしたのが『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』で、特殊能力としては『原子崩し（メルトダウナー）』っていう物が搭載されてるんだけど、破壊力が凄くてボクは滅多に使わないけどね」

シャルの『リヴァイヴ・カスタム？』の『原子崩し』は、少し私が好きなとある科学の漫画の技を劣化版とはいえ再現してみたんだ。

「ねぇ、ちょっとアレ……」

「嘘っ、ドイツの第三世代型っ！？」

急にアリーナ内がざわめきだした。

「おい」

そのドイツの第三世代型の操縦者、ラウラ・ボーデヴィッヒが一夏にオープンチャネルで言う。

「……なんだよ」

「貴様も専用機持ちのようだな。ならば話が早い。私とたたか――」

そう言いかけて止める。
なぜなら私がラウラの横に飛んだからだ。

「何の用ですか？」

「無駄な戦いはやめておけ」

「無駄ではありませんっ！！あいつがいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえたことは間違いない！私はあいつを――あいつの存在を認めない！」

「駄目だ。戦うなら、今度の学年別トーナメントにしろ」

「どうしても……ですか？」

「ああ」

「……わかりました。が、次は容赦しない」

ラウラはそう言い、アリーナから立ち去る。

あの目、本気で一夏を憎んでいる…。

一抹の不安を抱えたまま、私たちは部屋に帰るのであった……。

波乱の予感（後書き）

さてさて、シャルのＩＳを第三世代型にしたかったためこうなりました。

ちなみにフランスでは第三世代型をセラに受け取ったものの、開発が上手くいかずそのままセラの作品をシャルが使っているということにしています。

あと、ラウラのＩＳは、ドイツで開発されたもので、セラの作品とは別物ですので。

感想お待ちしてます♪

シャルの真実（前書き）

今回は短いです（ー ｏ ー；）

そしてセラがシャルに……！？

シャルの真実

「あー……」

「えーと……」

「……」

今、シャルと一夏の二人は私の部屋で私の正面に座っている。

何があったかというと、シャルの秘密が一夏にバレたのだ。

そのうちバレる可能性も無くはないと思っていたが、まさかこんなに早くバレるとはな…。

「で、何でバレたんだ？」

「あー、俺がさ、部屋に戻るとさ、シャルルは風呂に入ってたんだが、そういえばボディソープが切れてたなって思い出して渡してやろうとしたんだ」

「で、一夏がバスルームに入ってきて、ボクの裸を……。うぅ、セラにも見られたこと無いのに……」

「シャル、それは色々な誤解を生むから止めろ？」

「誤解されても良いのに……（ボソッ）」

シャルがボソッと誰にも聞こえないよう何やら呟いた。

「ま、概ね事情は分かった。入っていいか確認しないで中に入った一夏はどうかと思うが、バレたものはしょうがないな…。一夏、このことは他の奴には黙っててくれ」

「とりあえず、俺が黙っていれば良いんだな？」

「そうだ。シャルもそれでいいか？」

「うん、そうしてくれると……助かるかな……」

シャルが苦笑しながら言った。

「で、シャル。そろそろ話してくれないか？お前が男装してここに来た理由を」

私はシャルの顔をじっと見つめて聞いた。

「あっ…。うん、分かったよ。あのね、ボクの父がさ、デュノア社の社長なのは言ったでしょ?その人がね、ボクに直接命令したんだ」

「命令…。そんなッ!親だろ!?なんでそんな――」

一夏が怒鳴る。が、

「ボクはね、愛人の子なんだよ」

シャルのそのたった一言で、絶句した。

「引き取られたのが二年前で、お母さんが亡くなった時に父の部下がやってきたの。それで色々と検査する過程でＩＳ適切が高いことが分かって、非公式だけどデュノア社のテストパイロットになったんだ」

その話をするシャルの顔は凄く悲しそうで、そして辛そうだった。とても言いたくないことだろう。だがそれを健気に話してくれる。

「父に会ったのは二回くらいかな。普段は別邸で暮らしてたんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。『泥棒猫の娘が！』って、本妻の人に殴られちゃった」

あはは、と愛想笑いをするシャル。でも、その声は全く笑っていなかった。私も一夏も笑えなかった。その代わりに怒りがふつふつと湧いてくる。

「それから少し経ってからデュノア社は経営危機に陥ったんだ」

「デュノア社には私の第三世代型があるにも関わらず、いつまでも量産は愚か、二台目すら出来なかったと聞く。それゆえ、政府からの援助が大幅にカットされて、か？」

「そうだよ」

私の推測にシャルが一度だけうなずく。

「なぁ、話は分かったけど、それがどうして男装に繋がるんだ？」

「簡単なことだよ。注目を浴びるための広告塔。そして、同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能ならその機体

と本人のデータを取ってこい…ってね」

「そ、それってつまり――」

「そう、『白式』のデータを盗んでこいって言われてるんだよ。ボクは」

――ムカつく。
娘を道具としか扱わないクズが…。

「とまぁ、こんなかんじ。でも、一夏にバレちゃったし、国に強制送還されるだろうね。あぁ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、黙っててごめん――」

《ガバッ……っ！！》

シャルは最後まで言葉を続けなかった。いや、私が続けさせなかった。
シャルが、可哀想すぎて、こんなにもいい子が何故こんな目に遭わなければいけないのか、分からない。

「せ、セラ……？」

「そんなのは、駄目だ」

「えっ……？」

「強制送還なんて、させない……！シャルには生き方を選ぶ権利がある……！それを、親なんかに邪魔させてたまるか！！」

「でも、どうしようも無いし――」

「私が守ってやる。この三年間はＩＳ学園にいれば特別事項第二一により、シャルも自由にできる。その後は、今のところは三つほどなら思いつく案もある」

「あ、案って……？」

「一つは、私が自分の権力によりフランス政府を脅迫し、シャルの安全を確保させる。二つ目は私が武力と金によりデュノア社を潰し、シャルを引き取る」

まぁ二つとも物騒だがな。

「も、もう一つは……？」

「あー…。まぁなんだ、その……、同性婚が認められている国に行って私と婚姻関係になる、だ。私の嫁になれば私の立場上、どの国もそう簡単に接触はできんからな」

「「け、結婚っ！！？／／／」」

二人は顔を真っ赤にして、私に詰め寄る。

「まぁ…な。この案はまぁ、シャルが良いならの話だがな。まぁ先のことだ。ゆっくり考えて決めろ」

「セラは…良いの？」

「何がだ？」

「もし、……ボクがその、三つ目の選択肢を選んだとしたら、ボクとで良いの？／／／」

「えっ……ま、まぁな……／／／」

顔が熱い…。
これは恥ずかしいな…。

「そ、そうなんだ……／／／じゃ、じゃあゆっくり考えるよ……」

「ん……／／／」

なんだか凄く照れる…。
よ、よくよく考えてみたら、私はシャルに求婚したことになるのかっ！？
いや、別にシャルが嫌な訳じゃないし、寧ろ好きだが……って、何を考えてるんだ私は！！！

「と、とにかく三年間は安全だ。だから、私たちのところに居てくれ。シャルが居ないと、寂しいからな」

「そ、そうだぜシャルル！ここに居ろよ！」

「ボクなんかが……居ても良いのかな……？」

「当たり前だろ？」

「『ボクなんか』なんて言うな。シャルだからこそ居て欲しいんだからな」

一夏の言葉に続けるように私が言う。

「ありがとう……。本当に、ありがとう……っ！」

シャルの目からは、涙がこぼれ、その表情は心からの笑みが溢れたのであった。

シャルの真実（後書き）

まさかのプロポーズ（笑）シャルもまんざらじゃない様子（爆）

この先どうなるか（どうしたらいいか……）分からないです（笑）

感想やアドバイスお願いしますっ♪

VSラウラ？（前書き）

文才欲しいなー（泣）

VSラウラ？

「そ、それは本当ですの！？」

「う、ウソついてないでしょうね！？」

月曜日の朝、教室に入ろうとしたときに私は廊下にまで響く声に首を傾げた。

「なんなんだ？」

「さあ？」

「とりあえず入ろうぜ」

隣にいるのはシャルと一夏である。

「本当だってば！この噂、学園中で持ちきりなのよ？学年別トーナメントで優勝したら織斑くんかデュノアくんかお姉さまと交際できる――」

「私たちが何だって？」

「「きゃあああっ！？」」

な、なんなんだ……？

クラスに入って自分たちの名前が聞こえたから声をかけたら悲鳴をあげられた。

「で、何の話だったの？」

シャルが少し興味深そうに聞いた。

「あ、いえ、えーと……」

「なんか俺らの名前が出てたよな？」

何故か戸惑っている女子たちに一夏も聞いた。

「えーと？そ、そうだっけ？」

「さ、さぁ、思い出せませんわ？」

鈴とセシリアも笑って誤魔化そうとする。一体何の話なのだろう？

「じゃ、じゃあアタシ、自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですわね！わたくしも自分の席に着きませんと」

よそよそしい態度で私たちから離れていく二人。一緒に話していた女子たちも、えへへ……、と苦笑いをしながらこの場を去っていく。

「何なんだ、一体……？」

「「……さぁ？」」

私たち三人は顔を見合わせて首を傾げた。

～放課後～

「さて、学年別トーナメントに向けて、一緒に特訓でもするか？」

珍しく一夏から訓練に誘ってきた。

「そうだな、シャルもどうだ？」

「ボク？勿論行くよ♪」

一夏と私に全てを話してから気持ちが楽になったのか、シャルはとても楽しそうだ。

「だがその前に、少し機体の調整がしたいんだが」

「あ、じゃあボクのも一緒に見てもらえるかな？」

「俺のも良いか？」

「ああ、三人分くらいなら直ぐに終わるしな。じゃ、私の部屋に行こう」

「「オッケー」」

私たち三人は、私の部屋に向かって歩き出した。

……

「さてと、こんなところか？」

作業道具を置き、三機のＩＳを眺める。

「にしてもさ、セラの部屋って一人部屋なのに広いよな……」

「流石はＩＳ学園のＶＩＰだね」

二人はキョロキョロと部屋を見回す。
私の部屋は大体他の二人部屋の2～3倍程の広さだ。

「ま、こんな風に機体の調整をするときがあるからな。私個人専用の道具や新作ＩＳを置いたりするから、セキュリティの強化は自分でやったが」

「新作ＩＳっ！？また造ってるの？第三世代型？」

シャルが興味深そうに私に聞く。

「いや、今回は第三世代型だけじゃないんだよ。第二世代型や、新しい第四世代型も造っている」

「すごいな…。そういえばセラの『天雷』は第何世代型なんだ？」

「あぁ、コイツはちょっと特別でな、第一から第四のどの世代にも当てはまらない、所謂、第五世代型だ」

「「だ、第五世代型っ！？」」

二人は驚愕した。

「あくまで「所謂」だからな。実際にそうとは言えん。が、スペックではそれくらいかもな」

フッと笑って言う。

「篠ノ之博士より天才なんじゃない……？」

「つーか、そんな天才が目の前にいるなんて……」

「はは、まぁとりあえず調整は終了だ。二人の機体もエネルギー循環の効率を良くしたからな、少しは動きやすくなってると思うぞ」

「ありがとうセラ♪」

「サンキューな！」

『天雷』、『白式』、『リヴァイヴ・カスタム？』の三機のＩＳを待機モードに戻してそれぞれを二人に渡す。

「さて、そろそろアリーナに行くか」

「そうだね。セラが調整してくれてる間にボクらは着替えたから、セラも早く着替えてきなよ」

シャルに言われ二人を見ると、既にＩＳスーツを着用していた。

「分かった。ちょっと待ってろ」

私は粒子化していたＩＳスーツを展開する。
ＩＳスーツを展開すると、来ていた服が粒子化されてＩＳスーツを身に付けた状態になる。

「それ、前にも見たけど凄いよね（それとえっちぃ…／／／）」

「便利だな（それとエロい…／／／）」

「まぁな。じゃ、行くか」

二人の顔が赤いような気もしないでも無いが、気にせず行く。

～第三アリーナ付近～

「じゃあ今日も一夏をボコボコにする方針で行くか」

「ま、マジかよ……」

「あはは～、頑張ってね、一夏♪」

アハハと笑いながらアリーナに入ろうとしたその時――

《ドゴォンッ！！》

「「「！？」」」

大きな衝撃が空気を震わせ、大音量の爆発音が響いた。

「だ、誰かが模擬戦でもしてるのか……？」

「そうかな？」

「……」

「どうしたんだ、セラ？」

「嫌な予感がする。行くぞ！」

私は全力で走り出す。

「お、おい！」

「ま、待ってよセラ！」

二人も私に遅れて走り出した。

……

「鈴、セシリア！」

私が中に入ると、かなり損傷した二人の姿が目視できた。ＩＳアーマーの一部が完全に消失している。

「相手は……ラウラか！」

二人が向かい合う敵はラウラだった。ラウラには殆どダメージが無さそうだった。

どうやら二対一の模擬戦らしいが、圧倒的にラウラが圧している。

「ぐっ……！くらえっ！！」

鈴の衝撃砲がラウラに向かって飛ぶ。が、ラウラは回避をする素振りすら見せない。

「無駄だ。この『シュヴァルツェア・レーゲン』の停止結界の前ではな」

衝撃砲の不可視の弾丸はラウラには届かなかった。

ラウラの『シュヴァルツェア・レーゲン』には、『ＡＩＣ』という停止結界が搭載されている。元々私がドイツに渡した第三世代型には搭載していなかったが、『ＡＩＣ』の技術を開発したのは私と束さんだ。

「流石はドイツといったところか…」

私もこれには感心しざるをえない。

「ふん、セラ博士が創作した第三世代型をそのまま使っておきなが

らその様か。大したことの無い奴らだな」

ちっ、このままでは『甲龍』と『ブルーティアーズ』は再起不能に追いやられる……。助けるか！

「『天雷』」

《『アレ』ですか？》

「そうだ。行くぞ！」

《了解》

『天雷』を展開し、『反射』とは別のもう一つのワンオフ・アビリティ『瞬動』を発動する。

『瞬動』それはその名の如く、瞬く間に動く所謂瞬間移動であり、目視出来る範囲でなら一瞬でたどり着く。間にあるどんな障害物をも乗り越えて。

例えそれが……アリーナのバリアだとしてもな！！

《フッ……！》

「なっ……！」

「嘘っ……！」

「どこから……！？」

ラウラ、鈴、セシリアは驚きを隠せない。

「ラウラ、前に言ったな？学年別トーナメントまで待て、と」

「……しかし、今回はあちらから仕掛けて来ました。邪魔するならば、例え博士だろうと容赦はしません」

ギロッと私を睨むラウラ。

「良いだろう、相手になってやる。鈴とセシリアは下がっていろ」

ランスを展開し、構える。

「ごめん、セラ」

「申しわけありませんわ……」

二人が謝りつつ地面に着地し、ＩＳを解除し離れる。

「……行くぞ」

《ブンッ！》

近距離で始まる戦闘。ならば無理矢理距離をとるより先ずは一発、隙の少ない攻撃で攻め立てる！

「はぁぁっ！！」

突きのラッシュがラウラを襲う。スペック上でも操縦技術でもラウラを上回る私の攻撃を、ラウラは辛うじてかわす。

「くっ…、だがこの距離なら……！」

《ピキッ……！》

「ぐっ…、『ＡＩＣ』かっ！！」

「いくら貴女でも、動きを止めれば容易く倒せる！」

ラウラが攻めに出る。

ちっ…こうなったら『反射』で『ＡＩＣ』を――

「何をしているんだ、馬鹿者が」

「千冬？」

「き、教官っ！！」

「模擬戦をやるなとは言わん。が、あんな重傷者を出しては黙認できんな」

ボロボロのセシリアと鈴を見て千冬が言う。

「くっ……」

「だから言っただろ?学年別トーナメントまで待て、とな」

「……」

「セラの言う通りだ。では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散!」

パンッ!と千冬が手を強く叩く。

……

「ラウラ、少し良いか?」

私たち二人以外誰も居なくなったアリーナの更衣室で、私はラウラに話しかける。

「……何でしょうか？」

「その、偉そうに説教などして、すまない」

私はラウラに頭を下げる。ラウラはきょとんと目を見開いた。

「何故謝るのですか？悪いのは私です」

「いや、ラウラに突っかかったセシリアと鈴も悪いし、そこを考慮せずに偉そうに説教して、すまない」

再び頭を下げる。

「頭を上げて下さい。気にしていません」

「そうか？なら、詫びと言っては何だが――」

……

その後私は鈴とセシリアを見舞うため、一夏とシャルと保健室に来ていた。……そういえば私がラウラと戦っていた間、二人は何をしてたのだろうか…？

「全く、怪我が大したこと無くて良かったな」

「こんなの怪我のうちに入ら――いたたっ！」

「そもそもこうやって横になる必要なんて無――つぅぅっ！！」

……バカなのか？

「くっ、セラにバカって言われると言い返せないっ！！」

「悔しいですわっ！！」

いやいや、何故口に出してないのに分かるんだ？

「ま、先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら――」

《ドドドドドドド……》

「な、なんだこの音は？」

地鳴りのような音は多分廊下から聞こえる。しかもだんだんと近づいているよう――な！？

《ドカァァァン……！！》

「「「「「……」」」」」

私と一夏、シャル、セシリア、鈴は開いた口がふさがらなかった。

ドアが吹き飛んだのだ。しかもその奥からは大量の女子が……。

「織斑くん！」

「デュノアくん！」

「お姉さま！」

「「「これ！」」」

女子が一斉に何かを出してきた。よく見ると……

『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、二人一組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選で――』

なるほど、つまりは――

「私と組もう！織斑くん！」

「私と組んで、デュノアくん！」

「一緒に出ましょう、お姉さま！」

ということだ。が、

「すまんが私は既にパートナーは決まっている。一夏とシャルは二人で組むらしいから、諦めろ」

と言った。

「え？あ、そうそう！俺はシャルと組むんだよ！」

「うんうん！だからごめんね？」

女子達は意気消沈した。

「まぁ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりは……ね」

「お姉さまを独り占めなんて、妬ましいっ！！」

……最後のは聞かなかったぞ？うん、……知らない。

ぞろぞろと帰って行く女子。

「ちょっとセラ、アタシと組んでよ！」

「一夏さん、わたくしと――」

「二人はＩＳのダメージレベルがＣを越えているから駄目だ。いくら私が直しても、そんな直ぐには間に合わない。ＩＳ創作者として、ＩＳ学園スポンサーとして、トーナメントの出場は認めない」

ま、スポンサーといっても何機かＩＳを寄付しているだけだがな。

「うっ……」

「くっ……」

二人を強引に引き下がらせた。

「ところでセラの組んでる相手って誰なの？」

「ん？それはトーナメントが始まるまで内緒だ♪」

パチッとウインクして言う。

「ま、セラが誰と組んでもセラが居る限り負けるわけ無いけどな」

「いや、分からんぞ？それに今回のパートナーは頼りになる奴だしな♪ま、楽しみにしていろ」

私はそう言って保健室を出ていく。

これからパートナーと自分の機体の調整と訓練など、色々忙しくなりそうだな……。

VSラウラ？（後書き）

なんか中途半端ですみませんm（＿＿）m

セラのパートナーは誰でしょうね？ま、予想はついてるでしょうけど。

次回から学年別トーナメントです♪

では、感想お待ちしてます♪

学年別トーナメント！！（前書き）

更新です！

学年別トーナメント！！

鈴とセシリアがラウラと戦ってからおよそ一週間が経ち、学年別トーナメントのペアの申込の期限も過ぎてもうすぐトーナメント本番となった。

「ふぅ…、調子はどうだ、『天雷』？」

《エネルギー循環良好、シールドエネルギーＭＡＸ。問題ありません、マスター》

「そうか。トーナメントだからな、代表候補生として無様な姿は見せられんからな、しっかり頼むぞ『天雷』」

《了解しました》

よし、『天雷』の調整はこれくらいで良いか。

――と考えた時、

《ドンドンドンっ！！》

乱暴に私の部屋のドアが叩かれた。が、

《セキュリティ始動します》

防犯用のセキュリティがドアを叩いた犯人を捕らえた。

『う、うわぁっ！！何だこりゃっ！？って、のわぁっ！！』

この声…一夏か。
どうやら助けが必要のようだな。

「仕方ない奴だ…」

《ピッ…ドスンっ！！》

『いてっ！』

セキュリティ一時解除のボタンを押し、捕獲されて宙ぶらりんになっていた一夏を下ろしてやった。

《ガチャ》

「一夏、私の部屋にはちゃんとインターホンがあるだろ？ノックにしてもあんなにドンドン叩いたらセキュリティに引っかかるに決まっているだろうが……」

私はインターホンを指差して地面にキスしてる一夏に言った。

「わ…忘れてた……」

ホントにバカな奴だ…。

「まぁいい、で、何の用だ？」

「あぁ、そうそう！学年別トーナメントの一回戦の対戦表が公開されたらしいぜ！」

「へぇ、やっとか。じゃあ見に行くか」

私たちはモニターを見に歩き出した。

途中で会ったシャルも加え、三人で対戦表を見る。

「えっと……俺とシャルルの相手は……箒か！」

「あっ、ホントだ！でもあれ？セラの名前が無いよ？」

「私はシード枠らしい。だから一回戦は無しで二回戦以降から参加だ」

今、対戦表には一回戦の組み合わせしか載っていない。だから私の名前は無くて当然なのだ。

「へぇ、シード枠なんてあるんだね」

「まぁセラの実力なら当然だよな」

二人は感心したように言った。

「ま、セラのパートナーが分からなかったのは残念だけどな～」

「あはは、そうだねぇ。ボクもセラのパートナーは気になるかな？」

「ま、次になったら分かるさ。それより一夏、お前は今は篠ノ之の対策の方が大事だろ？あいつはＩＳの適性こそはＣランクだが剣の使い方は上手い。接近戦になるし、シャルとのコンビネーションも考えておけよ？」

「おお、そうだな！」

「うん、ボクは中・遠距離型だからそこそこ合わせやすい筈だよ」

シャルの『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』は大量の銃を搭載している中・遠距離型。一夏の『白式』は『雪片弐型』で斬り込む近距離型。前衛、後衛と分けるにもやり易い。

ちなみに篠ノ之のパートナーは名前の知らない奴だった。他のクラスの女子らしい。（まぁ同じクラスでも他クラスでも大半が『お姉さま！』とか呼んでくるから分からんぞ……）

……

で、トーナメント一回戦本番。トーナメントはスムーズに進み、早くも一夏たちの出番だ。

《それでは試合開始！》

「うぉ――っ！！」

「はぁ――っ！！」

《ギィィンっ！！》

いきなり一夏と篠ノ之が近接用ブレードでつばぜり合いになる。

「援護するよ、一夏っ！！」

《ダダダダダ……！》

そこへシャルが銃弾を乱射する。

「くっ……！」

篠ノ之は一旦下がった。

「一夏、先ずは一人に的を絞って一気に決めよう！」

「オッケー！はぁっ！！」

「えっ、えっ！？ひゃあっ！！」

篠ノ之のパートナーの子は一夏に斬り込まれて動揺する。そしてそこへ――

「ごめんね、チェックメイトだよ」

《ダンっダンっダンっ……！》

シャルがさっきとは違い、一点に集中して何発かの銃弾を全て同じところに当てる。

「きゃあっ！！」

篠ノ之のパートナーはシールドエネルギーが無くなる。

「これで後は」

「篝だけだな！」

ふむ、即席のタッグにしては息が合っているな。
相性が良かったか。

「くっ、まだ敗けてはいないっ！！」

篠ノ之が焦って突っ込む。が、冷静さを欠いた単純な攻撃が当たるわけもなく――

「はぁっ！！」

最後は一夏の一閃でシールドエネルギーが削られて試合終了。

《そこまで！勝者、織斑、デュノアペア！》

「やったぜっ！！」

「うん！！」

一夏とシャルは笑顔でピットに入っていった。

……

「二人とも、お疲れだ。ほら、ジュースとタオルの差し入れ」

私は二人にそれぞれ渡す。一夏は運動後は冷えたのよりも少しぬるめが良いらしいからそうした。シャルは普通に冷たいのだ。

「お、サンキュー」

「わぁ、ありがとうセラ♪」

二人は礼を言って直ぐに飲み始めた。

「ん、どうやら一回戦が全て終了した様だぞ？二回戦の対戦表が出た」

更衣室のモニターに一回戦の結果と二回戦の対戦表が映し出された。

「いよいよセラのパートナーが分かるな！」

「おいおい、その前に自分の対戦相手を確認しておけよ？」

「あ、そうだな」

「もう、一夏ってば。ボクたちの次の相手は……」

二回戦

織斑、デュノアＶＳヴィヴィット、ボーデヴィッヒ

「ん、どうやら二回戦の相手は私たちのようだな」

「ちょっ、何でラウラと組んでるんだっ！？」

「そうだよっ！！ボクもセラのパートナーになりたかったのに！」

えっ？シャル、今そこ突っ込むところか……？

「あー、まぁ何となくだ。ラウラは友達がまだいないからな、私はラウラと知り合いだし、仲を深めるっていうのも目的だな。ま、どちらにしても負けんがな」

フッと笑いながら二人に言った。

「へっ、相手が強ければそれだけ燃えるぜ！」

「うん、勝ってセラと……／／／（セシリアから聞いたあの噂がホントなら……♪）」

（※シャルはセシリアから、『優勝したらセラと付き合える』としか聞いてませんｂｙ作者）

「シャル、私がどうかしたか？」

「ふぇっ！？な、何もないよ！」

ブンブンと音がなるくらい勢いよく首を横に振るシャル。

「じゃ、私はラウラのところに行ってくる」

私はそう言ってピットを立ち去った。

……

「お、いたいた。ラウラ！」

「ん？あ、博士……」

ラウラは振り向きそう呟いた。

「いい加減その博士っていうのは止めてくれないか？セラと呼んでくれ」

「しかし、博士は博士です」

ぐ…、強情な奴め。
ならば強攻策だ。

「じゃあこれから私を博士と呼ぶ度にお前の服を一枚ずつ一夏に渡していこうかな？」

自分で言っておいて何だが軽く変態っぽいな…。

「なっ！？そ、それは困ります博――せ、せ、せ……セラ／／／」

「よし。なんだ、ちゃんと可愛い顔も出来るじゃないか。ま、元々可愛いが」

「なっな……っ！？／／／」

お、更に赤くなったな…。
ラウラは可愛いな…。

とまぁこんな感じで一時間くらいラウラをおちょくった……。

「はぁっ、はぁっ……／／／」

「まぁ冗談はこれくらいにして「冗談になってません！」はいはい。で、『シュヴァルツェア・レーゲン』の調子はどうだ？」

「はい、セラに調整してもらってからはかなり動きが良くなりました」

「そうか、それは良かった。あ、二回戦の相手が決まったが知ってるか？」

「いえ、一回戦には興味が無かったのでその時間は調整をしてましたから」

「そうか。二回戦の相手はな、お前が倒したい相手だぞ？」

そう私が言うとラウラはニヤリと笑った。

「そうですか…。いよいよアイツを叩きのめせる…。セラ、手出しは――」

「ああ。私はせいぜいシャルといちゃついておくさ（笑）」

「感謝します」

「さてと、そろそろ二回戦が始まる。行くぞ」

「了解」

……

私たちがピットから飛び立つと既に一夏とシャルが居た。

「よぉセラ」

「一夏、シャル、言っておくが手加減は一切しない。本気で来いよ？」

「分かってるよセラ」

「ふん、織斑一夏、叩きのめす！」

「やってみろ！返り討ちにしてやらぁ！」

《それでは……試合開始！》

学年別トーナメント！！（後書き）

なんかシャルが一番セラにベタ惚れな気がする（笑）まぁいいけど。

さて、ヒロインをアンケートしたら、鈴とシャル、ラウラ以外には、『千冬、束、楯無、簪』の全員が良いという意見が一番多かったです。

というわけで、全員ハーレム入りしちゃいます！

ま、千冬は既に入りかけでしたけど（笑）

色々なご意見ありがとうございました。

これからも感想お待ちしてます！

ラウラ・ボーデヴィッヒ（前書き）

知らぬ間にユニーク数が１００００突破してました♪

この調子でガンガン行くぞ！

という訳で更新です♪

ラウラ・ボーデヴィッヒ

《それでは、試合開始！》

「はぁっ！！」

アナウンスが入ると同時に一夏がラウラに飛びかかる。

「ふん、遅い」

《ピキッ……！》

しかしラウラのＡＩＣによって動きが止められた。

「くっ、やっぱダメか」

「開始直後に突っ込めば反応出来ないとでも思ったか？お前の攻撃など所詮こんなものだ。お前たちは私にダメージを与えることも出来ずに敗退だ」

ラウラは余裕の笑みを浮かべる。

「へっ、それはどうかな？」

「何っ！？」

動けない筈の一夏がまだ余裕を持っていることにラウラは一瞬焦る。

「ラウラ、気をつけろ！シャルが狙ってる！」

「なっ！？」

一夏とラウラをはさんで私とシャルは逆の位置にいる。これでは簡単にはシャルを止められない。

「あは、バレちゃった♪えいっ！」

《ダンっ！ダンっ！》

二発の銃弾がラウラに向かう。これではＡＩＣでも処理しきれない。仕方なくラウラは一夏にかけているＡＩＣを解除し、私のところまで退く。

「くっ……、ＡＩＣが！」

「よし、動けるぜ！サンキューな、シャルル！」

「うん、ＡＩＣも二人がかりなら恐くないよ！じゃんじゃん攻めよう！」

「オッケー、行くぞ！」

再びラウラに接近する一夏。ラウラはＡＩＣを発動せずに近接用の太刀を二本展開し、迎え撃つ。

「援護するよ、一夏！」

そこへまたしてもシャルが援護に入ろうとした。が、私がシャルの前に立ち塞がった。

「シャルは私と踊ろうか♪」

「セラ…。仕方ないね、一夏！ラウラは任せたよ！」

一夏とラウラ、私とシャルがそれぞれ一対一で戦う。

「仕方ないねって、シャルは私と踊るのは嫌か？」

「えっ！？そ、そんなこと無いよ！！凄く嬉しいよ！！鼻血が出そうなくらい！！」

「そ、そうか……」

何だろうか、凄く動揺してるのか？
というか、シャルはなんかキャラが変わってないか…？

「まぁいい。じゃ、行くぞ！」

いつも通りランスを右手に展開し構える。

「遠距離型のボクに近接用の武器で挑むなんてって言いたいけど、セラ相手なら寧ろボクが不利だよね」

基本的に近距離型の武器は懐に潜り込まないと当たらないから遠距

離型の武器で距離を保たれたまま攻撃されると最悪の場合、相手にダメージを与えることも出来ずに敗けてしまう。が、実力によってはそれを覆すことも不可能ではない。

「懐に入られたら遠距離型はかなりやりづらいからな。私に接近されないように足掻けよ？」

「えへへ、分かってるよ」

と、笑って言いながらもシャルはライフルを構えている。

流石に代表候補生同士だから気は抜いていない、か。ならばこちらも…。

《グンッ！！》

「は、速っ！！」

ノーモーションから一気に接近してランスを向ける。

「もう終わりか？」

「ううん、まだだよ！はぁっ！！」

《ガキンッ！！》

「うぐっ……！」

シャルは銃身で私の腹に一撃を入れつつランスを持つ右手を絡み取った。

「えへっ、形勢逆転だねぇ♪」

油断したな…。だが――

「私の『天雷』のワンオフ・アビリティを忘れたか？」

「えっ！？あっ！！」

急いで離れようとするシャル。だが私の方がコンマ一秒早かった。

「残念だったな。『反射』発動」

《バチィッ！！》

「きゃっ！！」

勢いよく弾き飛ばされたシャルはそのままアリーナの壁スレスレまで飛ばされた。

「むぅ、今のでかなりダメージ喰らっちゃったな…」

「あぁ、そうだな。それとこれで終りだ」

「えっ！？いつの間にっ！？って、うわぁっ！！」

セシリアの『ブルーティアーズ』、鈴の『甲龍』に加えてシャルの『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』まで修理するのは嫌だったから『超電磁砲』最小出力で放ちシャルのシールドエネルギーを削りきる。

「うぅ…、敗けたぁ」

「残念だったな。…さて、ラウラと一夏の方はどうなってるかな？」

私とシャルは残る二人の方を見た。

―Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ―

「らぁっ！！」

「はぁっ！！」

《ギィィンっ！！》

二人の刃はかん高い音をたてて幾度もぶつかり合う。

「ちっ、小賢しい奴め！」

「へっ、どうだ！」

一夏はラウラのＡＩＣが発動する度に一度距離をとり、ラウラが疲労してＡＩＣが消えたら再び接近するということを繰り返していた。そのやり方のせいでラウラはかなり疲労が溜まり、逆に一夏は余裕を持って戦えていた。

「くそっ！！ＡＩＣさえ当たれば……！」

「当たれば…な！！」

《ガキンッ！！》

「ぐっ……！ナメるなぁっ！！」

一夏にとうとうまともに一撃を喰らってしまったラウラは逆上して自分が限界にも関わらずＡＩＣを行使した。が、

《シュウ……》

「なっ！？そ、そんなバカなっ！！何故ＡＩＣが発動しない！？」

遂にＡＩＣは発動しなかった。

「チャンス！！っらぁ――っ！！」

《ブンッ！！》

一夏はそれを好機と見てラウラに思いっきり斬りかかる。

「ぐわぁっ！！」

ラウラの『シュヴァルツェア・レーゲン』はもはや限界の筈だった。

―ラウラｓｉｄｅ―

（こんな……こんなところで負けるのか、私は……！）

確かに相手の力量を見誤った。それはどう考えても私のミスだ。しかしそれでも――

（私は負けられない！負けるわけにはいかない……！）

ただ戦いのためだけに作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。
知っているのは戦い方。ただそれだけ。
格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得した。

私は優秀だった。性能面において常に最高レベルを記録した。

しかし世界最強の兵器『ＩＳ』が現れたことで全てが一変した。

『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』と呼ばれる動体視力の強化を目的としたナノマシンを移植した目を手にした。

危険性は全くない筈だった。が、私は、私の左目は金色へと変質し、常に稼働状態のままカット出来ない制御不能へ陥った。

それから私は部隊の中でもＩＳ訓練において遅れを取ることになる。
そしていつしかトップの座から転落した私を待っていたのは、部隊員からの嘲笑と侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった。

そんな闇の中、私が目にした光は教官との……織斑千冬との出会いだった。

「ここ最近の成績は振るわないようだが、心配するな。一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ私が教えるのだからな」

その言葉に偽りはなかった。別に他の奴等と違う特別な訓練をしたわけではない。しかしあの人の言う通りにするだけで、私はＩＳ専門へと変わった部隊内で再び最強の座へ君臨した。

それからあの人に憧れた。その強さに、凛々しさに、堂々とした様に、焦がれた。

――ああ、私もこの人のようになりたい。

そう思ってからは教官が帰国するまでの半年間に時間を見つけては話にいった。

そしてある日訊いてみた。

「どうしてそこまで強いのですか？どうすれば強くなれますか？」

その時、あの人が、鬼のような厳しさを持つ教官がわずかに優しい笑みを浮かべた。

その表情に私はなぜか胸を痛めた。

「私には弟がいる」

「弟……ですか」

「あいつを見ていると、わかるときがある。強さとはどういうものなのか、その先に何があるのかをな」

「……よくわかりません」

「今はそれでいいさ」

優しい笑み。そしてどこか気恥ずかしそうな表情、それは――

（違う。私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに）

だから許せない。教官にそんな表情をさせる存在が。

だから――

こんなところで負けるわけにはいかない。あの男はまだ動いている。動かなくなるまで徹底的に壊さなくてはならない。そうだ。そのためには――

（力が……欲しい）

ドクン……と私の中の何かがうごめく。そしてそいつはこう言った。

『――願うか……？汝、自らの変革を望むか……？より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。力があるのなら、それを得られるのなら、私など――空っぽの私など、何から何までくれてやる！！

だから力を……比類無き最強を、唯一無二の絶対を――私によこせ！

Ｄａｍａｇｅ　Ｌｅｖｅｌ……Ｄ．

Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ……Ｕｐｌｉｆｔ．

Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ……Ｃｌｅａｒ．

《Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ》……ｂｏｏｔ．

―セラｓｉｄｅ―

「あああああああっ！！！！」

突然ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発した。それと同時にラウラの『シュヴァルツェア・レーゲン』がドロドロしたものとなってラウラの全身を包み込んだ。

「あれは……ＶＴシステムかっ！？」

「ＶＴシステム！？セラ、それって……」

「ああ。正式名称『Ｖａｌｋｙｒｉｅ　ｔｒａｃｅ　ｓｙｓｔｅｍ』。それはＩＳ条約で禁止されている。だがラウラの『シュヴァルツェア・レーゲン』には積まれていたらしい。ドイツめ……馬鹿げたことをしてくれたな！！」

「なんだよ……おい、何で《雪片》を……何で千冬姉の姿をしてんだよ！！」

一夏は『雪片弐型』を握りしめ、中段に構えた。その刹那――

「――！」

黒いＩＳが一夏の懐に飛び込んで一閃。それは紛れもない千冬の太刀筋だった。

「かはっ……！」

一夏は『雪片弐型』ごと吹き飛ばされ、シールドエネルギーが底をついて『白式』すら解除された。

「一夏っ！！」

シャルが叫ぶ。しかし返事はこない。どころか起き上がる気配すら感じない。

「気を失ったか…。シャル、あれは私がやる。手を出すなよ？」

「で、でも……！」

「アイツは千冬のコピーだ。動きは確かに再現している。だが、あれは千冬ではない。所詮コピーだ。それにラウラは…ラウラはあんなものに取り付かれていて良い奴ではない。私が解放してやらなくちゃいけないんだ」

シャルの目をじっと見つめてゆっくり言った。

「分かった。どうせボクはシールドエネルギーが残ってないし、セラは殆どＭＡＸだもんね。でも無茶はダメだよ？」

「ああ」

私は『超電磁砲』を取り出す。そしてラウラ…いや、千冬モドキに殺気をぶつける。

「――！」

すると千冬モドキは私の殺気に対応するように突っ込んでくる。そして一閃――！

「させるか、馬鹿者が！！」

《ガィィィン！！》

『雪片』の刃を横から思いっきり蹴り飛ばし、手から離させる。そしてもう一発本体の腹に蹴りを喰らわせて距離をとる。

「いい加減目を覚ませよ……ラウラ・ボーデヴィッヒ！！」

《ドガァッ！！！》

最大出力の『超電磁砲』。
それはもはや光の塊。
その光に包まれて『シュヴァルツェア・レーゲン』が変形した黒い部分が剥がされていく。

そして光が消えた跡にはラウラと元々の待機状態の『シュヴァルツェア・レーゲン』が地面に倒れていた。

―ラウラｓｉｄｅ―

「どうして……どうしてセラも、そんなに強いのですか？」

「強い？私がか。そうだな。私が強いとすれば、それは守りたいものがあるからかな？」

「守りたい……もの……」

「ああ。一夏や鈴、セシリアにシャル、千冬、他にもたくさんの人を守りたい」

「それはなんだか、あの人のようですね……」

「そうか。その守りたいものの中にはラウラ。お前も入ってるんだぞ？」

「私が……？」

「ああ。お前もまた、私の大切なものの一つだからな」

この人は…、ドキッとするようなことを平気で言うんだな…。

でも、気分は悪くない。

私もこの人に守られたい。

そうか。私はこの人のことが……

……

結局トーナメントは中止となり、試合は終わった。

私はあの後ラウラと一夏を保健室へと運び、先に回復した一夏を返してから千冬と共にラウラが目を覚ますのを待っていた。

そして――

「ん……ここは……？」

「気がついたか」

「具合はどうだ？」

私と千冬はラウラの顔を覗き込みながら言った。

「私は……何が起きたのですか？」

「ＶＴシステム。それで分かるか？」

「……はい。断片的に記憶があります。……私が……望んだからですね」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「は、はいっ！」

千冬に呼ばれて反射的にラウラは返事をした。

「お前は誰だ？」

「わ、私は……。私……は、……」

「誰でもないのならちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィッヒになるがいい」

「お前は千冬にはなれない。お前はお前、千冬は千冬だぞ？」

私は千冬の言葉に続けた。

……

翌日のホームルーム、シャルの姿が見当たらない。
ま、一夏と違ってしっかりしてるから大事だろう。

「み、みなさん、おはようございます……」

教室に入ってきた山田先生はなぜかフラフラとしていた。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますか、既に紹介は済んでるといいますか……」

転校生？またうちのクラスにか？やけに多いな…。

にしても山田先生も歯切れの悪い…。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

ん？この声は――

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします♪」

スカート姿のシャルが礼をした。

「えと、デュノアくんはデュノアさんでした。ということです。はぁぁ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業が……」

「じゃあ先生、シャルはうちの部屋で引き取ろうか？」

私は山田先生に言った。

「ほんとですか!?じゃあじゃあ、ついでにボーデヴィッヒさんもよろしくお願いしますね♪」

「まぁ構わないが……」

実際、私の部屋は異常に広いしな。私の使わないスペースだけでも二人くらい余裕だ。

「えっ?デュノアくんって女……?」

「おかしいと思った!美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、織斑くん、確か同室だったよね!?まさか!!」

「ちょっと、勘違いは止してよ。ボクは一夏には微塵も興味はないよ?ボクが興味あるのは――(チラッ)」

なぜかシャルが私に視線を向けた。そして更にドアを蹴破って鈴が

現れた。

「セラは渡さないわ！！」

「いやいや、私は鈴の所有物じゃないぞ？」

「セラ！そんなの私は許さないんだからぁっ！！」

鈴がＩＳアーマー展開。さらに衝撃砲が解放された。

「させん！！」

ふと私と鈴の間に割って入ったのはラウラだった。

ＡＩＣで相殺したらしく、その体には『シュヴァルツェア・レーゲン』が纏われていた。

「助かった。ありがとう、ラウ――んぐっ！？」

なにが起きた……？

ラウラの顔がすぐそこに……？
唇には……柔らかい感触。

導き出される答えは……キスされてる。

「せ、セラは私の嫁にする！！決定事項だ！！異論は認めん！！」

「へっ？あ……ありがとう？」

訳が分からずとりあえず礼を言う私。

「って、ありがとうじゃなぁぁぁいっ！！」

「セラの唇が……セラの唇がぁ……！」

「まさか……ラウラが！？」

鈴やらシャルやら一夏やらが何やら言ってるがもうよく分からん。
というかクラスメイト（追っかけ）も千冬もなぜ膝をついてあからさまに落ち込んでいる？

あぁ。これからややこしくなりそうだな…。

ラウラ・ボーデヴィッヒ（後書き）

一夏、シャル……簡単にやられちまったな…。

セラは人にキスするのはともかく、されるのに耐性が０です（笑）

鈴、シャル、そして千冬！
頑張ってセラにアピるんだ！！

次回はシャルとデートかな？

では、感想お待ちしてます♪

お買い物デート！？（前書き）

更新です！お待たせしました♪

セラ「待たせたお詫びと言っては何だが、今回は後書きで私たちが少し話そうと思う。良かったら見てくれ」

作者・セラ「では、どうぞ！」

お買い物デート！？

「う…ん……」

朝。ベッドに何か違和感を感じて目が覚めた。
だが、目の前は真っ暗で何も見えない。
ま、目を閉じているんだから当たり前だな。
さて、そろそろ目を開くか…。

「くぅ……」

「……」

あー。状況を整理しようか。

昨日はシャルとラウラが同じ部屋になって二人のベッドを用意してからすぐに寝た。で、今は朝で、目の前には……ラウラが寝ている？

「くぅ……」

起きる気配は無い、か。
はぁ、仕方ない、逆に向いて寝直す…か…？

「むにゃむにゃ……セラぁ……♪」

逆サイドには……シャルがいた。

「何故こうなった？」

ちゃんと二人のベッドは用意したし、場所も言ってから寝た。なのに何故二人はここにいる？

「とりあえず二人を起こすか……って、何故私の服が剥かれてるんだっ！？」

体を起こすと私の胸が丸見えだった。
寝るときだからブラジャーは着けていなかったから、先っぽまで見えていた。

「寝ぼけて脱いだか…？いや、私の寝相は悪くない。それに昨日は脱ぐほど暑くなかった。となると……」

私は二人をちらっと見た。

「犯人は……お前たちかぁっ！！」

《バサッ！！》

「ひゃいっ！？」

「にゃふっ！？」

勢いよく布団をひっぺがして二人を起こした。

「む……セラ、おはよう」

「おはよーセラ♪」

「ああ、二人ともおはよう。そして何か言うことは無いか？」

「「えと、寝ている間に服を脱がせて胸を揉んでごめんなさい？」」

「やっぱりお前たちかぁ――っ！！」

「「ごめんなさぁいっ！！」」

二人はベッドから飛び降りて、クラウチング土下座をした。

「全く、ちゃんとそれぞれにベッドを用意しただろう！それに、寝ている間に服を脱がすなど、今後は許さないんだからな？」

「はぁい♪」

「分かったぁ。……でも起きてる間になら良いんだよね……えへへへ♪」

……何だか寒気がした気がする。

「セラ、私は今日は先に行くぞ」

ラウラがいつの間にか着替えを済ませて出ていく。

「行ってらっしゃい」

閉じたドアに向かって言った。

「そうだ、シャル」

「へっ？何かな？」

「付き合って欲しい」

「……え？」

一瞬、世界が止まったという。

……

「ん、なかなか良い天気だ」

週末の日曜日、天気は快晴だ。

「……」

何故か不機嫌なシャル。

「そりゃさ、勝手に勘違いしたのはボクだけどさ、前にあんなこと言われたし、もしかしたら――なんて考えても仕方ないもん」

シャルが女だと公表してから少し経つが、未だにシャルが息抜き出来ていないんじゃ無いかと思って、臨海学校の買い物に誘ったのだが…。

「シャル、少しは楽しめよ？私とデートだぞ？」

「でででで、デートっ！？／／／」

あれ、軽いジョークのつもりでデートなんて言ってみたのに、顔を真っ赤にされてしまった…。

「ん、ま、まぁな。そういえばシャルは今日も制服なのか？」

「うん。セラは私服だね。すっごくキレイだよ！！」

「そうか、ありがとう」

私の今日の服装は、黒いノースリーブのワンピースに薄いピンクのストールを羽織り、芸能人だとバレにくいようにサングラスをかけている。

「さてと、さっそくだが水着を買いに行こうか」

「そうだね。ボクが選んであげよっか？」

「じゃあ頼むよ」

さりげなく手を繋いできたシャルを可愛いなと思いつつ、水着売り場へ向かった。

「セラはどれが似合うだろ…。やっぱりスタイル良いし、そこそこ露出は高い方が良いかな…。金髪のロングだし、そこも考えると……」

シャルは真剣に私の水着を選んでくれている。

ちなみに私はシャルの水着を選んでいる。

「お、これなんてシャルに似合いそうだな」

そう言って手に取ったのはセパレートとワンピースの中間のようなもので、上下に別れている。また黄色に近いオレンジ色でシャルのイメージにぴったりだと思う。

「シャル、これなんかどうだ？」

「え？わぁ、凄く可愛いよ！セラはこんなのどうかな？」

シャルがそう言って見せてきたのは、鮮やかな水色のビキニ。布面積が少なく、かなり露出は高いが、私の好みではある。

「ああ、良いな。試着してみるか。シャルはどうする？」

「うーん、ボクも試着しよっかな？」

二人で試着室へ向かう。
入り口で別れ、二人で向かい合った部屋に入る。

「ん……こんな感じか？」

水着を着て鏡を見てみる。
なかなか良い感じだと思う。

「シャル、そっちはどうだ？」

シャッとカーテンを開けてシャルに声をかける。

「うん、こんなかんじ。どうかな？」

シャルもカーテンを開けて出てきた。

「なかなか可愛いと思うぞ？よく似合ってるよ」

「ほんと！？えへっ♪セラも綺麗だよ！やっぱりモデルさんだな～」

シャルも私も結局今着た水着に決めた。
会計はシャルがしてきてくれたのですぐに済んだ。
ちなみに代金は全て私持ちだぞ？

「シャル、何か買いたい物は他にあるか？」

「そうだなぁ…、買いたい物というか、少しお腹空いちゃったから軽く何か食べたいかな？」

「そうか。じゃあどこか喫茶店にでも入るか」

「うん、行こう！」

シャルと私は横に並んで再び歩き出した。

……

「ご注文はお決まりですか？」

私とシャルは近場の喫茶店に入り、空いていた四人席に向かい合って座っている。

注文をとってくれているのは見た目２０前後くらいの綺麗系な女性だ。

「セラは何食べる？」

「んー…モンブランとアイスコーヒーにしようかな…」

メニューをザッと見てから何となくで決めた。

「じゃあボクは…チョコレートケーキとミルクティーで」

「畏まりました。モンブランとチョコレートケーキ、アイスコーヒーにミルクティーですね？他にご注文はございますか？」

「いや、大丈夫だ。ありがとう（ニコッ）」

店員の丁寧な接客でとても気分が良い。

笑顔で返事をした。

「――っ！！／／／で、ではごゆっくり！！」

店員は顔を真っ赤にして走って行ってしまった。

「…むぅ。セラは無意識でしかも男女関係なく口説きすぎじゃないかな…？」

シャルが不機嫌そうに頬を膨らませた。

「？？？……よく分からんが、嫌な事があったなら謝る」

「いや、別にそうじゃないけどさ……。セラはボクが独り占めしたいもん……」

「え？すまん、最後の方があまり聞こえなかった」

「ううん、何でもない。それよりほら、ケーキ来たよ」

シャルに言われて見てみると、さっきの店員が顔を真っ赤にしたままケーキとドリンクを持ってきてくれた。

「お、お待たせしました、モンブランとチョコレートケーキとアイスコーヒーにミルクティーですっ！／／／」

……やっぱり顔が赤いな…。少し心配だな。

「店員さん、ちょっと……」

「は、はい？……って、ふぇっ！？／／／」

ん？私が何をしているかだと？
別に変な事じゃない。ただ単に額をくっつけて熱があるかを見ているだけだ。

「せ、セラ！！ダメっ！！」

シャルにグイッと引っ張られて店員から引き離される。

「もう！ちゃっちゃと食べて帰るから！」

「あ、あぁ……」

何故シャルはそんなに怒っているのだろうか…。

結局十分程で食べきってしまって、その後すぐに寮に帰った。

ちなみに喫茶店の代金も勿論私が持った。

お買い物デート！？（後書き）

シャルが凄くやきもち妬きましたね。

ちなみにこの時ラウラは部屋で一日中セラのベッドをクンクンしてました（笑）

ラウラ「はぁ……落ち着くにおいだ…♪セラぁ……♪」

一夏は千冬、山田先生に付き添いで来てたということにしてますが、セラたちと鉢合わせなかったのは一夏の不運のせいです（笑）

一夏「マジで俺のせいだったの！？」

千冬「…ほう、一夏のせいでセラに会えなかったのか……」

一夏「ちょっ、千冬姉――っ！！」

《スパンッ！！》

一夏「～～～っ！！」

山田「（織斑くん……憐れですね……）」

鈴はセシリアと何かしてたんじゃ無いかな～？

鈴・セシリア「「ちょっと！私（わたくし）たちだけ扱いが酷くない（酷いのでは）っ！？」」

気にしない気にしない（笑）

鈴・セシリア「「気にするわよ（しますわ）！！」」

シャル「ここだけ見ると……やきもち妬いてたのがバカらしいね。セラとデートできたわけだし」

篠ノ之「私も一夏と行けば良かったか？いや、しかしあの人に連絡

を取っていたから仕方ないな……」

セラ「次回はいよいよ臨海学校だ。楽しい行事で終われば良いが……。まぁとにかく、次回も見てくれ。感想を待っているぞ（ニコッ）」

一夏・千冬・鈴・シャル・ラウラ「ゴフッ……！な、なんだこの破壊力は……！」

海に着いたら十一時？いや、鼻血まみれだ！！（前書き）

セラ「今回は私が色々と苦労する話だ。……いつも苦労している気はするが」

微エロも有りますよ♪

セラ「な、それはどういう――」

ではどうぞ！

セラ「おい！あ、後書きまで読むんだぞ！？私が出てるからな！！」

海に着いたら十一時？いや、鼻血まみれだ！！

「海、見えた――っ！！」

長いトンネルを抜けたバスの中、クラスメイトが声を上げた。

臨海学校初日、天候も良好で、海は心地よい潮風にゆっくり揺られていた。

「やっぱり海ってテンション上がるなー！」

私の斜め後ろの席に座っている一夏がはしゃぐ。

「そうか？まぁ、確かに楽しみではあるな」

「ボクも早くセラと遊びたいな♪」

シャルは私のとなりの補助席に座っている。ちなみに窓際の隣はラウラだ。

「皆さんも、とても楽しそうですわね」

「ふむ、たまにはこういうのも悪くはないな」

一夏を挟んでいるのはセシリアと篠ノ之で、セシリアが窓際で篠ノ之が補助席だ。

ちなみに鈴はクラスが違うので別のバスだ。
かなり悔しがっていたけどな。

「そろそろ目的地に着く。全員下りる準備をしておけよ」

「忘れ物が無いように気をつけてくださぁい」

千冬と山田先生の言葉で全員が座席へ戻り、荷物を纏めだした。

そして間もなく、バスは目的地に到着した。

四台のバスからＩＳ学園一年生がぞろぞろと出てきた。

「全員揃っているか各クラス点呼をとって担任に報告しろ。終わり次第旅館に入る」

千冬が全員に声をかけ、それぞれのクラスが点呼をとりだす。
問題なく点呼を終えたようで、旅館へと向かっていく。

「ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ」

「「「よろしくお願いしまーす！」」」

この旅館には毎年お世話になっているらしく、手慣れた感じで女将さんが挨拶を済ませた。

「今年は男子が一名いるせいで何かとご迷惑をおかけします」

千冬が女将に頭を下げる。

「気にしないでちょうだい。で、そちらがその男の子かしら？」

「あ、織斑一夏です。お世話になります」

「いえいえ、清洲景子です。男の子一人で大変ねぇ、それともハー

レムかしら？」

「いや、そんなこと無いですよ？俺なんかより、ほら」

そう言って私を指差す一夏。

「え？あ、あれってもしかして……セラ・ヴィヴィット・アーレン！？」

「あ、知ってるんですか？そうですよ。セラが学園の大半の女子に狙われてますから」

「素敵……。私、セラの大ファンなの！！」

そう言って女将は私の方へ走ってきた。

「は、はじめまして、清洲景子です！」

「ん、今回は世話になります、セラ・ヴィヴィット・アーレンです。どうぞよろしくお願いしますね（ニコッ）」

これから三日間だけとはいえ世話になるんだからな、愛想はよくしておかねば。

「……これから三日もセラと一緒に過ごせるなんてっ！！あぁ、幸せ！！」

清洲さんは顔を手で覆ってイヤンイヤンと悶えている。

「あー、清洲さん、悶えているところ申し訳ないが、そろそろ皆を中に案内してやってほしい。長い間バスに揺られていたからな。荷物くらい早く下ろして遊びたいだろうから」

「な、なんて優しさ……！分かりました！すぐにご案内させていただきます！」

すると女将は物凄い勢いでＩＳ学園一年生全員を中へと案内し出した。

「千冬、私の部屋はどこだ？部屋割り表に載っていないんだが……」

「あ、俺のもないや。千冬姉――じゃなくて、織斑先生、俺はどこですか？」

部屋割りは表にして貼り出されている。にもかかわらず私と一夏の部屋は載っていなかった。

「今から案内する。ついてこい」

千冬はゆっくりと歩き出した。

……

「ここだ」

そう言って千冬が指を指した部屋には――

『教員室』

「「……」」

「最初はセラは普通に、織斑は個室に……と考えていたのだがな、セラには人が集まりすぎるし織斑の部屋には夜中こっそり忍び込みそうな奴がいるからな」

「で、それは分かったが、布団は二つしか無いぞ？千冬、どうするんだ？私と千冬が一緒に寝るのか？」

「……それは魅力的な案だが、残念ながら違う。一夏にはこの更に奥の部屋を使ってもらう」

千冬の視線の先には戸があり、そこからは違う部屋に繋がっているらしい。

「なるほどな。ま、確かに俺と千冬姉――織斑先生やセラが一緒に寝るわけにはいかないしな」

「そういうことだ。さて、今日一日は自由時間だ。荷物も置いたし好きにしろ」

「じゃあ私は海へ行ってくるか。一夏と千冬はどうする？」

私は荷物の中にある水着とタオル、替えの下着と日焼け止めクリームを探しながら尋ねた。

「あ、俺も行くよ！」

「私は仕事が終わり次第泳ぐ。先に行っていろ」

という訳で、私と一夏は用意を持って海へと向かうことにした。

……

「「「……」」」

私と一夏は更衣室へと向かう途中で篠ノ之にばったりと遭遇した。
それは良いのだが、問題は目の前の珍奇な光景だ。

道ばたに白いウサギの耳が生えている。
しかもご丁寧に『引っ張って下さい』と貼り紙までしてある。

「なぁ、これって――」

「知らん。私に訊くな。関係ない」

「えー、抜くぞ？」

「好きにしろ。私にには関係ない」

「私も知らなかったことにしよう。先に行ってる」

私と篠ノ之は一夏をおいて先に更衣室へと向かった。

後ろの方で何かが墜ちた音がしたのは聞き間違いだろう。

……

着替えを済ませて海へと出てきた。

とりあえず日焼け止めを塗らねばな…。

「お、丁度良いところに鈴がいるな。おーい鈴、ちょっと手伝ってくれ！」

鈴に向かって呼びかけると、海で遊んでいた大半の女子がいっせいに私の方へと振り返った。

「ん～？あ、セラ……って、ブシャァァッ！！」

……は？

「「「ブシャァァッ！！」」」

な、何だこの光景は…。
私を見た女子が次々に鼻血を噴いていくぞ…。

シャルだけは顔を真っ赤にしてはいるものの無事だが…。

と、そこへ――

「何だ？何があったんだ？」

「わわっ！皆さん鼻血が！！」

千冬と山田先生が到着した。二人も水着に着替えてきている。

「千冬……、山田先生……」

「何だ（何ですか）、セラ（さん）――」

「「ブシャァァっ！！」」

……二人も見事なアーチを描いて鼻血を噴出した…。

「篠ノ之、私が何かしたのだろうか……？」

近くに来た篠ノ之に尋ねてみた。

「その劣情を誘うような格好のせいだろう……。真っ白な素肌が、その…だな……え、エロい…／／／」

「……」

……

２０分ほど経ってようやく全員が回復した。……もっとも、私をチラチラ見ては鼻を押さえているが…。

「で、セラ。わ、私に何か用があるの？／／／」

鼻を押さえながら鈴が訊いてくる。

「あぁ、日焼け止めクリームを塗って貰おうと思ってな。背中には手が届かんし……、頼めるか？」

「「「「ひ、日焼け止め――っ！！？／／／」」」」

「お姉さま！是非とも私にそのお役目を！！」

「いえ、私に！！」

「お姉さまは私を選んでくださるに決まってますよね？」

……どうしてこうなる？

「あ――！！もう、頼まれたのはアタシ！！セラの身体に触れても

良いのはアタシだけよ！」

よく分からんが頼まれてくれるみたいだな…。

「じゃあ鈴、頼むな」

「ま、任せて！しっかり塗ってあげるから！」

……とりあえず、パラソルに移動するか。

「さてと、じゃあ……いくよ？」

「あぁ、いつでも良いぞ……」

《ヌチャッ……ピチャッ》

「あんっ……！そこは……っ、ひゃうっ……！」

「ここ？ここが良いの？じゃあ……こうね…」

「ひゃぁぁんっ！ら、らめぇ……そんな…鈴、もっと優しく…」

「ご、ゴメン…。セラ、綺麗……／／／触っててすっごく気持ち良いよ…」

「わ、私も……なんだか気持ち良く……はぁんっ！」

「そ、そんな色っぽい声出されたら……出ちゃう！！」

「ば、バカ！私にかかるだろ！向こうに出せ！」

「んっ……あぁッ！！」

《ブシァァッ！！》

鈴は私のすぐ隣に出した。

「すごいな……こんなにいっぱい出して大丈夫か？」

「う……でもアタシ、多い方だから」

「そうか。なら出るだけ出してしまえ。中途半端だと気持ち悪いだろう？」

「う、うん……」

《ピュッ、ピュピュッ……》

「たくさん……出ちゃった……」

「そうだな、たくさん出たな……」

――鼻血が。

私の横には鈴の血溜まりが出来ている。
ちなみに向こうの方でも血溜まりが増殖していっている。

「でも、何とか日焼け止めは塗れたよ」

「何を言ってるんだ？」

「へっ？」

「確かに日焼け止めは塗れたな。――背中には」

そう、背中には、だ。

「そ、それってつまり――っ！！」

《ブシャァァッ！！！！》

鈴は今、今日一番の勢いで鼻血を噴き出した。

血…足りるのか？

結局前は自分で塗った。

……

「ねぇ、セラさぁん！ビーチバレーしようよぉ！！」

そう言って誘ってきたのはクラスメイトの相川。
彼女は私のことをちゃんとセラと呼んでくれるので割りと好きだ。

「良いぞ。他は誰がするんだ？」

鈴は戦闘不能、ラウラもどうやら同じく、セシリアと篠ノ之は見当たらず……となると、

「シャルと一夏だな。おーい！」

私はシャルと一夏を呼ぶ。

「どうしたんだ、セラ？（うわぁ……この水着エロい……。た、谷間が……／／／）」

「何かあったの？（やっぱり似合うなぁ……。胸が強調されてえっちぃけど…／／／）」

視線が凄く胸元に集中している気がするが……まぁいい。

「あぁ、ビーチバレーをするんだが、一緒にどうだ？」

「「……っ！！」」

二人の目の色が変わった……ように見えた。

「（ビーチバレー……胸がバインバイン揺れるところが見れる！！）
やる！俺、凄くビーチバレーやりたいんだ！」

「（せ、セラのおっぱい……。も、もしかするとポロリとかも――
！うん、意図的に脱がせて見るのも良いけど事故で脱げるのはもっ
と良い！！）ボクもやりたい！！」

「じゃあ、私と一夏とシャルがチームでいいな」

「あ、セラさんが負けたら何かしてくれたりする？」

相川が訊いてくる。

「あ～、私もセラりんに何かしてほしい～」

便乗して布仏も訊いてくる。

「あー、じゃあ……一緒に風呂にでも入るか？背中くらいなら流して――」

「「絶対に勝つ！！そして裸をじっくり眺める！！」」

な、何故か気合いが入った二人。
もう一人のメンバーの岸里が苦笑いしているぞ？

……顔を少し赤らめて私をチラチラ見ながらだが。

……

「じゃあ行くよぉ！そーれっ！」

相川のサービスから始まり、こちらのコートにボールが飛んでくる。

「任せて！……セラ！」

シャルがレシーブで私の方へボールを上げた。

「行くぞ。……怪我はするなよ？」

「「「へっ？」」」

《ドガァッ！！！》

「「「ぽかーん……」」」

「これで１対０だな？（ニコッ）」

満面の笑みで私は言った。

「「「く、悔しい……。でもカッコイイからどうでも良い――！！」」」

アホだ……ここにアホが三人――

「「「キャー！！お姉さま素敵ぃ――っ！！」」」

――三人どころか大量にいた……。

「何やら盛り上がっているな」

「そうですねぇ～。ビーチバレーですかぁ。わぁ、セラさんが圧倒的ですねぇ♪」

「あ、山田先生と織斑先生！先生も参加しないんですか？お姉さまに勝ったら一緒にお風呂ですよ？しかも背中を流すサービス付きで」

「ほ、ほんとですか！？」

「――やる。今すぐ代われ」

千冬は岸里と入れ替わる。
更に山田先生も布仏と入れ替わった。

「千冬か……。面白い」

「私が勝ったら一緒に風呂だ！！そしてその胸で身体を洗って貰う

からな！！」

千冬……お前、鬼教官のイメージが……。

「勿論、それは私たちにもだからね～♪」

「勝ったら…な！！」

《バシィッ！！》

私は千冬に向かって思いっきりサーブを放つ。

「ふっ！！これくらい、セラの裸がかかっていると思えば軽いわぁッ！！」

《スパンッ！！！》

ボールをレシーブで高く上げた。そしてその先には――

「私もセラさんのおっぱいでゴシゴシしてほしいですからぁ！！」

《バシィッ！！》

山田先生が勢いよくボールを打ち付ける。

「一夏ッ！！」

「おう！！てりゃぁ――っ！！」

《バシィンッ！！》

ビーチバレーとは思えないような音が鳴り響き、ボールが再び高く舞い上がる。

「行け、シャル！！」

「うん！！セラは…ボクだけのなんだからぁ――っ！！」

《ドガァッ！！！》

訳の分からん叫びと共にシャルはボールを放つ。

「私もセラさんが欲しいもん――っ！！」

《バシィッ！！》

相川もまた訳の分からん言葉を放ちつつレシーブを高く上げた。

「これで決める！！はぁぁぁ――っ！！」

《シュボッ！！》

千冬の打ったボールはもはや勢いが強すぎて逆に音がショボい。だが球威はえげつない。

「くっ……、負けるかぁ――っ！！」

私の手元で回転が強まり、弾こうとする腕と拮抗している。

「うぉぉぉ――っ！！」

《バシィッ！！》

ボールは相手コートにゆっくりと高く上がった。
それだけなら良かったのだが――

《ポヨンッ》

私の胸が――水着が外れて無防備になった……。

「き……きゃぁぁぁ――っ！！／／／」

「「「「ブシャァァッ――――――っ！！」」」」

その場には、私の絶叫とそれ以外の人間の鼻血のアーチだけが残った……。

海に着いたら十一時？いや、鼻血まみれだ！！（後書き）

セラ「……くすんっ／／／」

裸……皆に見られましたね～（笑）

セラ「自室ならまだしも……あんなところでポロリなんて……」

まぁまぁ、セラの胸は巨乳だから需要は大きいって（笑）
出来れば千冬達に風呂で胸で洗うのも――ね？

セラ「絶対にやらん……」

まぁ、次回であの天才さんが出てきたらまた恥ずかしい目に逢うかもだけど（笑）

セラ「……帰っていいか？」

ダメだよ～♪
じゃ、最後の締めはよろしくぅ！

セラ「グスッ…えと、読者たち、私の裸……見たな？バカ！えっち！！」

こらこら、ちゃんとしなさいな。

セラ「……感想くれないと、もう泣いちゃうからな？（涙目上目遣い）」

今回いつも以上に可愛すぎだろ、この子……／／／

天才束さん登場～♪（束談）

セラ「今回も疲れる回だったような…？」

箒「私も疲れたぞ？」

千冬「同意だ……」

一夏「あははは……」

セラ「疲れて身体がダルい、そこの読者、悪いが身体を揉みほぐしてくれんか？」

《フニョン……♪（おっぱいをしたから持ち上げる）》

千冬・一夏「おっぱ――ブシャァァッ！！！」

箒「うっ、汚い……鼻血」

セラ「冗談だというのに……。とりあえず本編をどうぞ？」

天才束さん登場～♪（束談）

楽しい時間は流れるのが早い。
既に午後七時半をまわり、大広間三つを繋げた大宴会場で私たちは夕飯を食べていた。

「なかなか美味いな。しかも昼夜ともに刺し身が出るとは、これまた豪勢だな」

「うんうん。ほんとＩＳ学園って羽振りがいいよ」

頷いたのは私の右隣のシャル。

今は私たち全員が浴衣で、座敷に正座で座っている。そして一人一人に膳が置かれている。

メニューは刺身と小鍋、山菜の和え物が二種類に赤だし味噌汁とお新香だ。

刺身はキモ付きのカワハギで、独特な食感が何とも言えない。

「このワサビ、本ワサじゃないか。凄いな！」

そう言ったのは私の向かい側に座っている一夏。

「本ワサ…？一夏さん、それはいったい何ですの？」

一夏の左隣に座っているセシリアが尋ねた。

「あぁ、セシリアは知らないのか。本物のワサビをおろしたやつを本ワサって言うんだ」

「では、学園の刺身定食に付いているのは？」

「あれは練りワサ。原料は…何だっけ？」

「ワサビダイコンやセイヨウワサビなんかが使われている。着色や合成で本ワサに近づけているものだ」

一夏の話の続きを私が話す。

「へぇ…。じゃあこれが本物のワサビなんだね？」

シャルが私に尋ねた。

「あぁ。ま、最近は練りワサでも美味しいものも増えてきているがな。店によっては本ワサと練りワサを混ぜて出したりもしてるからな」

「そうなんだ…はむ」

……シャル、今ワサビの山を食べたな。

「っ～～～～～～！！」

案の定、シャルは鼻を押さえながら涙目になる。

「シャル…ワサビは刺身と一緒に食べるものだ。それだけで食べるとそうなるに決まってるぞ……」

「は、はぅ～～～」

「ほら、茶を飲んで口直ししろ」

「あ、ありがと……」

シャルに茶を手渡して飲ませる。
そしてシャルが落ち着いてきた時、今度は逆側で、

「う……くっ……！」

ラウラが足を擦っていた。

「ラウラ、キツイなら向こうのテーブル席に移動するか？」

「……嫌だ。この席を確保するのにはかなり苦労したんだ」

そう言えば確か夕飯前に多くの女子が集まってジャンケンしてたな…。

勝っていたのはシャルとラウラ。……私の隣に座る為だけにか！？

「だが、その状態では飯が食えんだろ？」

「うぅ…。でも……」

潤んだ目でこちらを見てくる。

「……仕方ない奴め。ほら、口を開けろ」

「ふぇ？」

キョトンとするラウラ。

「私が食べさせてやると言ってるんだ。不満ならいいが。ほら、あーん……」

「え、あ……あーん／／／」

刺身を一切れ口に運んでやる。パクっと食いつくラウラは少し可愛かった。

「あ――っ！！ボーデヴィッヒさん、お姉さまに食べさせてもらってる――！」

「え、うそ！！お姉さま、私もして――！」

「私も――っ！！」

一斉に群がる女子の大群。
めんどくさい奴等め…。

「お前たちは静かに食事をする事ができんのか」

その声に全員が一気に静まった。

「お、織斑先生……」

「どうにも体力が有り余っているようだな。よかろう。それでは今から砂浜をランニングしてこい。距離は……そうだな、五十キロもあれば十分だろう」

「いえいえいえ！とんでもないです！大人しく食事をします！」

全員が席に座っていく。

そして千冬は私の方を見た。

「セラ、あまり騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ」

「なんだ?千冬もしてほしいのか?ほれ、あーん……」

「え?あ……」

と、千冬は口を開きかけたのだが、

「「「「ジー……」」」」

という生徒たちの視線に負けたらしく、

「い、いらん!!そんなものはいらんぞ!!」

と言って目をうるつかせながら戻っていった。

「ま、仕方ないか。ラウラ、すまんな」

「え……あ、はい…」

なんだか悪いな…。

「じゃあ代わりに後で私の部屋に来い」

「……えええっ！？」

「ん、嫌なら良いが――」

「行きます！絶対に行きます！」

何故に敬語なんだ…？

結局ラウラは食事が終わるまで、いや、終わってもご機嫌だった。
が、それに反してシャルや鈴、一夏、山田先生、千冬は不機嫌そうだった。

……

風呂から上がり、千冬が代わって風呂に行った。
一夏も部屋に居ないらしく、一人きりだ。

《トントン》

扉が叩かれた。

「千冬か？」

「ラウラだ。セラ、入っていいか？」

ラウラか。そう言えば呼んでいたな。

「良いぞ、入れ」

《ス…》

「えっと、来たんだが…」

「あぁ、じゃあ始めるか」

―千冬ｓｉｄｅ―

「ふぅ、全くもって疲れる奴等ばかりで困る…。ん？」

風呂から上がり、私とセラとの愛の巣（？）に帰って来たのだが、その部屋の前にいつもセラと絡んでるメンバーが集まっている。ちっ、めんどくさい奴等だ…。

「おい、お前たち、自分の部屋に「シーっ、静かに！！」なんだと？」

いきなり一夏に声のボリュームを下げるように言われた。

よく見ると、全員が扉に耳を当てて中の音を聞いているようだ。

「何かあるのか…？」

私も耳を当ててみた。

『はぅっ、せ、セラ……』

『なんだラウラ、ここが気持ち良いのか…。じゃあもっと丹念に……』

『ああんっ！！そんなにしたら……気持ち良すぎて……』

『じゃあそろそろこっちも……』

『痛っ……』

『すまん、大丈夫か？』

『大丈夫じゃないぞ、私はこういうのは初めてなんだから、優しくしてくれ……』

『あぁ、こうか…？』

『はぅん、らめぇ、くすぐったいぃ……！』

『ラウラはここが敏感なんだな。もっと強くしてみるか……』

『はんっ、ら、らめぇ……これ以上は…あああああッ！！』

「な、何をしているかぁぁぁ――っ！！」

《バァンッ！！》

我慢出来ずに飛び込んだ私。そこに居たのは…。

「「……何をしてるんだ（ですか）…」」

「「「「「「へっ…？マッサージ…？」」」」」」

一夏、箒、オルコット、鈴、デュノア、そして私は開いた口が塞がらなかった…。

―セラｓｉｄｅ―

「全く、私とラウラが何をしていると思ったんだ…？」

盗み聞きしていた一夏たちを正座させて聞く。

「えっと……」

「何というか、だな……」

「その、ですね……」

「あの、ね……」

「セラとラウラが……」

「ああいった行為をしていると……」

上から一夏、篠ノ之、セシリア、鈴、シャル、千冬だ。

「なななな……!?私とセラとが……／／／」

「はぁ、バカもん共が……。千冬まで、何を言ってるんだか……」

「うぅ……だがセラは女もイケるし……」

「まぁ確かに私は女だろうが関係なく好きになるし、ヤりたかったらヤるだろうが……／／／」

否定できないのが何故か悔しいな…。

「セラが男しか無理なら俺が確実にセラを食べれるのに……（ボソッ）」

何だろう、一夏が凄く問題発言をした気がする…。

「いっそのことアタシが襲って戴いちゃうか…？（ボソッ）」

ブルッ…！身体に何か寒気が……。

「と、とにかく全員反省することだ！さぁ、今日は帰って寝ろ！」

「そうだぞ！早く私たちの愛の巣――ゲフンゲフン、部屋から出ていけ！」

千冬……。

お前はそんなキャラじゃなかっただろう…？

ぞろぞろと出ていく一夏たち。

……私ももう寝よう。

……

翌朝、今日はＩＳの各種装備試験運用とデータ取りだ。

「千冬、これはいったい？」

「見た通り、専用機持ちには大量の装備を試してもらうのでな、集まってもらった」

「ちょっと待ってください、箒は専用機持ちじゃないですよね？」

鈴が尋ねた。

「あぁ、それは「ちーちゃぁぁぁん！！」……」

《ガシィッ！！》

千冬に向かって飛び降りて来た人物が千冬のアイアンクローにより受け止められた。

「痛いッ！！いたたたたっ！！ちーちゃん、痛いよ！！」

「ふん！」

千冬が投げ捨てた（笑）
すると束さんは今度は篠ノ之の方を向く。

「やぁ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。大きくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

いつの間にか隠れていた篠ノ之にセクハラ（？）をする束さん。

《ドゴッ！！》

「殴りますよ…？」

「ひどぉい！殴ってから言ったぁ！し、しかも日本刀の鞘で叩いたぁ……！」

何というか……。
丈夫だな、この人は。

「むむ、この息遣いと体温、それにエロエロぼでぃの匂いは……」

「た、束……さん…？」

「セ～ラちゃぁぁん！！おっひさー♪相変わらず良い身体してるねー♪舐めまわして良いかなぁ？ぐへへへ！」

《もにゅもにゅッ！！》

「は、あぁん！……って、何するんですかぁ！！／／／」

この人は瞬間移動でも出来るのか？
いきなり私の後ろから胸をわしづかみしてきた……。

「さいっこぉ……。これはもう私が唾を付けておくしか無いよ――へぶっ！！」

私にセクハラをしていた束さんを千冬がぶっ飛ばした。

「させるか、バカ者」

今回はナイスだ千冬！

「痛た～、もぉ、ちーちゃんは私とセラちゃんとの愛の育みを邪魔するの？」

「……そんな物を育んだ覚えはありませんから」

「えー、セラちゃんひどぉい！ぶーぶー！！」

餓鬼か……。

「……ったく、造りかけの第三、第四世代型を放置して失踪して…。迷惑にも程がある…」

「あはは～、ごめんね～♪でもでもぉ、ちゃんと箒ちゃんに頼まれた物は造ってきたよぉ？出でよっ！！さぁさぁ大空をご覧アレ！」

束さんが天を指差したから全員が吊られて上を向く。……すると――

《ヒュー……ドガァッ！！！》

なんか降ってきた。

「ふふふ、これが現在する全てのＩＳを遥かに上回るスペックを持つ箒ちゃん専用機、その名もぉ……『紅椿』！！」

「現在する全てのＩＳを、ってことは、セラの『天雷』も……！？」

シャルが目を見開いた。が、

「……これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！！全スペックが現行する私が造ったコアで動くＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ！」

……言い直したっ！？

「私の『天雷』には勝つ自信が無いんですか？」

「あ～、だってセラちゃんも天才だし～、それに束さんはセラちゃんを越すんじゃ無くて支えたいの♪だって妻は夫を支えるモノだから♪」

「……さて、じゃあ篠ノ之、フィッティングとパーソナライズに入るか」

「ああ、頼む」

「ちょ、ちょっと、シカトは辛いよぉ！束さんも手伝う――っ！！」

「「早くしてください」」

「うわぁん！！箒ちゃんとセラちゃんが冷たいよぉ！！」

と言いつつも空中投影のディスプレイとキーボードを六枚ずつ取り出し、作業をしていく。

私は八枚ずつだがな。

「こちらは終わりましたが、束さんは？」

「こっちもかんりょー！超速いね、流石私とセラちゃん♪」

『紅椿』
近接に特化しているように見えるな。
左右一本ずつの日本刀型ブレード以外の装備は無い。

だが何やらいろいろと搭載してもいるな。
割りと万能そうでもある。

「ねぇ、あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの…？身内ってだけで」

「だよねぇ。なんかズルいよねぇ」

ふと専用機持ち以外の生徒からそんな声が聞こえた。

それに対して一番早く反応したのは意外にも束さんだった。

「おやおや、歴史の勉強をしたことが無いのかな？有史以来、世界が平等だったことなんて一度たりともないよ」

ピンポイントな指摘を受けて気まずそうに作業に戻る女子たち。

「あ、いっくん、『白式』見せて！束さんは興味津々なのだよ！」

「え、あ、はい」

一夏は淡い光を発して『白式』を展開した。

「データ見せてね～。とりゃ！」

ブスリとコードを差し込む束さん。

「なぁんか不思議なことになってるね～」

「あの、なんで男の俺がＩＳに乗れるんですか？」

「んー分かんない。ナノレベルまで分解すれば分かるかもだけど…。してもいい？」

「……遠慮しておきます」

そもそもどっちをナノレベルまで分解するんだ？『白式』か？それとも、まさか一夏か…？

「にゃはは、そう言うと思ったよん。んー、まぁ、わかんないならわかんないでいいけどねー。そもそもＩＳって自己進化するように造ったし、こういうこともあるよ。あっはっはっ」

「後付装備が私ですら殆ど出来なかったのも束さんのせいですね……」

「そだよ～♪まぁ元々そういう機体を拾ってきてちょちょいっと弄っただけだったんだけどね～。でもそのおかげで第一形態から『単一仕様能力（ワンオフ・アビリティ）』が使えたでしょ？」

「所々が機密事項な気がしてならないんですけど…？」

「全くだ、バカたれ」

べしんっ！と手加減無しの千冬の打撃が束さんの頭に吸い込まれていった。

「いたた。もぉ、ちーちゃんはドＳなんだから…。過激すぎると何かに目覚めそうだよ？」

「やかましいわ！」

《バシィッ！》

「あふんっ！！」

……今のは既に目覚めてないか？

と、そこへよせばいいのに一人の女子が束さんに声をかけた。

「あ、あのっ！篠ノ之束博士のご高名はかねがね承っておりますっ。もしよろしければ私のＩＳを見ていただけないでしょうか！？」

誰かと思えばセシリアか。

有名人である束さんを前にして興奮しているのか、その眼はキラキラと輝いている。が――

「はぁ？誰だよ君は。金髪で私の知り合いは夫のセラちゃんだけなんだよ。そもそも今は箒ちゃんとちーちゃんといっくんとセラちゃんとの数年ぶりの再開なんだよ。そういうシーンなんだよ。どういう了見で君はしゃしゃり出て来てるのか理解不能だよ。っていうか誰だよ君は」

視線も口調も冷たい。
束さんは興味の無い人間にはこうだからな…。
今は私と一夏と篠ノ之と千冬くらいか…？

「え、あ、あの――」

「うるさいなぁ。あっちいきなよ」

「う……」

ここまで拒絶されると流石に凹むわな。

「束さん、それくらいにしておいてやって下さい。セシリアも、ＩＳなら役不足かもしれんが後で私が見てやるから」

「役不足なんて…！そんなことありませんわ！」

セシリアは納得したようだな。束さんは――

「うー。じゃあセラちゃんに抱き着いて良いなら良いよ～？」

……はぁ。

「分かりました、構いません」

半分呆れながら言った瞬間には既に束さんは私に抱き着いていた。

「クンクン…。はぁ、良い匂いだぁ…。流石私の夫！！」

「違います。そもそも私は女です」

「えー！でもでもぉ、結婚は出来るし、っていうかするし――」

「そんなの分かりません！」

「否定はしないんだねぇ♪ということは、可能性は0じゃ無いわけだね？やったね！」

まぁ、そういうことだが……。

別に束さんは嫌いじゃないし、可愛いところもあるしな。

「下らんことを言ってないでやることをしろ！」

「んにゃ？ちーちゃんヤキモチ？どっちに？セラちゃん？それとも束さんかな？」

《ドガァッ！！！》

「痛ぁ――っ！！」

いやいや、今のは痛いじゃすまないだろ！？

「いいからさっさと『紅椿』の方を済ませろ」

「んー、とっくに出来てるけど…？」

《ドガァッ！！バキィッ！！》

「ち、ちーちゃん…。今日はいつもより…激しいよ……」

「篠ノ之、試運転も兼ねて飛んでみろ」

「はい！」

プシュ、プシュ、と空気の抜ける音と共にケーブルが外れていき、篠ノ之が目を閉じる。

そして次の瞬間には――

《ビュンッ！！！》

と空気の切れる音がして、『紅椿』は遥か上空にいた。

「ふむ…。速さはそこそこか。今のが全力でないにしても私の『天雷』の6、7割になるかならないか…」

「せ、セラちゃん？一緒に造ってた時は『天雷』って第三世代くらいのスペックじゃなかったかなぁ…？」

「そこから色々と直した結果がこれですが？」

束さんに『天雷』のデータを送った。

「……チートとしか言えな――ん？この『単一仕様能力』の『反射』の後の『絶対防御』の一時的な自動オフって直せないようだけど、大丈夫なの？」

「……まぁ大丈夫でしょう。よっぽどの攻撃でないと『天雷』には掠りもしませんし」

「あはは、確かにね～♪おっとっと、忘れかけてた。じゃあ箒ちゃん、刀使ってみてよー。右のが『雨月』で左のが『空裂』ね。武器特性のデータ送るよん」

データを受けとると直ぐ様展開し、構える。軽く振るい、手応えを確かめている姿も様になっている。

「束お姉ちゃんが解説もしてあげよぉ！まず、『雨月』は対単一仕様の武装で打突に合わせて刃部分からエネルギー刃が放出されるよ。射程距離はアサルトライフルくらいかな？スナイパーライフルの間合いでは届かないけどスペックで十二分にカバー出来るよん♪」

束さんの解説に合わせて（？）試しとばかりに突きを放つ篠ノ之。
右腕を左肩まで持っていって構えた。
攻防どちらにも転じやすいな。

そこから赤いレーザーが多量に放たれる。
それらはそこらを漂っていた雲を貫きやがて見えなくなった。

「じゃあ次は『空裂』ね？こっちは対集団仕様の武器だよん。斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーをぶつけるんだよー。振った範囲に自動で展開するから超便利♪じゃあこれを打ち落としてみてね？ほーいっと」

束さんは３０連発のミサイルを展開し、全てを篠ノ之に向かって放った。

勢いよく向かって行くミサイルを篠ノ之は焦ること無く迎えた。
そして『空裂』で一振り。すると３０発中の２０発程が一振りで赤いレーザーにより消滅した。
続いてもう一振りし、残り１０発を消し去った。

「す、すげぇ……」

隣で一夏が思わず声を漏らした。
他の奴等も同様だった。

威力的には私の『超電磁砲』の最大出力の3割程度だろうが、瞬間

的にあの威力と範囲で攻撃をできるのはかなり強力だ。

「たたた、大変です、織斑先生！」

「どうした？」

いきなりの山田先生の発言に皆がそちらを向く。

「は、はい！こ、こっこれをっ！」

山田先生は小端末を千冬に渡す。
すると千冬の表情が曇る。

「特命レベル……A以上。現時刻より対策をはじめろだと…？」

それを聞いて何やら嫌な予感がした。

「おい、専用機持ち以外の皆は一度自室へ戻れ！その後は連絡があるまで自室待機だ！」

私は一年生全員に呼びかける。

「ちょ、ちょっとセラ？何勝手に――」

「いや、セラの言う通りだ！生徒は速やかに自室へ戻れ！山田先生、他の先生方にも連絡を」

千冬が言う。

「分かりました！」

山田先生は走って他の先生方のところへ向かって行った。

「ねぇ、特命レベルA以上ってヤバくない？」

「うん、なんか事故でもあったのかな…？」

専用機持ち以外の女子が騒ぎだす。

「いいから早く戻れ。お前たちの安全確保の為にも、いいな？大丈夫だ、私に任せておけ」

「「「お姉さまぁ……／／／」」」

女子たちは素直に部屋に戻りだした。

「で、千冬。内容は？」

「あぁ、だがその前に移動する。旅館の一室で話すぞ」

……

「全員いるか？」

「一名欠席ですが、それ以外は全員いますね」

千冬の問いに山田先生が答えた。

「分かった。で、内容だがな…。二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエルの共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『

銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』と『闇の福音（ダーク・エンジェル）』の二機が制御不能の暴走。監視空域より離脱したらしい」

「……」

「その後衛星の追跡によると、二機は行動を共にしており、しかもここから二キロ先の空域を通過することが分かった。時間にして五十分後。上からの指示により、我々で対処することになった」

「教員は…ダメだな、海域、空域の封鎖にまわるだろう。となるとその二機の対処は私たち専用機持ちだけか…」

ちっ、厄介だな…。

「こちらの専用機は七機。対する相手は二機。それぞれ三機、四機で当たる」

「いや、片方は私が受け持つ。私の『天雷』なら大丈夫だ。『単一仕様能力』で『反射』と『瞬動』もあるしな。勝率は充分だ」

「……了解した。では『闇の福音』にセラが当たってもらう。『闇の福音』は『銀の福音』よりも変則的な攻撃パターンが豊富らしい。気をつけろ」

「分かった。じゃあ準備があるから先に部屋を出る。作戦の残りは後で伝えてくれ」

「分かった」

部屋を出て自室へ戻る。

……さてと、今回は装備を増やして行くか。
丁度新しい武器を試したかったところだ。

どれにするかな…？

「しかし何だ…。
本当に嫌な予感しかしないのはいったい…？」

心の中のモヤモヤした気持ちに不安を抱きつつも準備を済ませるのであった。

天才束さん登場～♪（束談）

束「やっほぉ♪今回はこの天才束さんがこの後書きを乗っ取っちゃいました～♪」

セラ「ふっ……そんなことが出来ると思っているのですか？」

束「あっ、セラちゃぁん♪おっぱい舐めさせ「ダメです」ぶー、ケチー」

セラ「いつからそんなに変態になったんですか…？」

束「私は変態じゃないよ！変態という名の紳士だよ！」

セラ「結局変態じゃないですか！！しかも紳士って！女なんですからせめて淑女！」

束「そんな細かいことを言う悪い子にはぁ……こうだ！」

セラ「ひゃぁぁぁん！！それはらめぇ！！／／／」

（※Ｒ１８な内容なので何があったかはご想像でお楽しみ下さい（笑））

セラ「ふぁ……／／／」

束「ふふふ、これでセラちゃんとは既成事実が――へ？後書きでは何があっても本編には全く影響しない？ということは――！？」

セラ「残念でしたね（笑）」

束「うわぁぁぁぁぁん！！」

セラ「ここらで終わりますか。感想、アドバイス待ってるぞ♪あ、ここで見たエッチぃことは私と束さんとお前だけの秘密だからな？／／／誰にも言うなよ？」

墜ち逝く者（前書き）

お待たせしましたです。

セラ「全くだな。しかも久しぶりに見てこんな話だとはな……」

まぁちょっとシリアス気味ですけど、どうぞ！！

墜ち逝く者

「三人とも、準備は宜しいですか？」

「ああ、大丈夫だ」

「俺も行けます」

「私も」

山田先生の問いに私と一夏、篠ノ之がそれぞれ答えた。

「もう一度だけ作戦内容を伝えておく。敵機体は『銀の福音』と『闇の福音』の二機。それに対してこちらは織斑と篠ノ之が『銀の福音』、セラが『闇の福音』にそれぞれ攻撃を仕掛け、撃墜する。他の専用機持ちは先ずは待機だ」

そう、私が部屋を出た後、今回の作戦では先ずは私たち三人だけで撃墜させることになった。

何故、他の代表候補生たちを差し置いてこの二人なのか。それは二人の機体によるものだった。

『銀の福音』と『闇の福音』に対応できるスピードを持つこちらの機体は私の『天雷』と篠ノ之の『紅椿』だけだ。

そして一夏の『単一仕様能力』である『零落白夜』による一撃必殺。

つまり、『銀の福音』の方に関しては接触直後に一夏が全力で一太刀を浴びせ、一瞬で決めようという訳だ。

《セラ、聞こえるか？》

「ん、千冬か。どうした？」

千冬がプライベートチャネルで話しかけてきた。

《織斑と篠ノ之の方はお前の方ほど確実性が無い。もしお前が先に『闇の福音』を撃墜出来たら手伝ってやれ》

「分かった」

《後……何だか嫌な予感がする。気をつけろ》

「私もしてるさ。言われなくとも気をつけるよ」

私がそう言うと、千冬は私とのプライベートチャネルを切り、今度は一夏にプライベートチャネルで話しかけている。

「篠ノ之、落ち着いて行けよ？お前の『紅椿』は今回の作戦が初めての起動なんだからな」

「ふ、分かっている。大丈夫だ」

見るからに浮かれているな…。大丈夫なのか…？

「では、作戦を開始する！」

「「「了解ッ！！」」」

千冬の号令で、返事と共に飛び立った私たち三人。

一夏は紅椿に掴まっていて、私と篠ノ之がほぼ同じ速度で飛んでいる。

「『銀の福音』がここから2キロ、『闇の福音』がここから3キロってところか…。少し急ぐぞ」

「分かった。一夏、振り落とされるでないぞ！」

「おう！！」

私と篠ノ之は一気に加速した。

……

「見つけた…」

途中で篠ノ之と一夏と別れ、更に加速して飛び続けること三分。

目標『闇の福音』を確認した。

幸い、向こうはまだ気づいていないらしい。

――好機だな。

私はランスを展開した。
そして一気に距離を詰める。

「シッ！！」

「――！！」

《ブォンッ！！》

勢いよく突きだしたランスを『闇の福音』はギリギリでかわした。

《キィィィン！！》

かん高い音を出しながら『闇の福音』は黒い翼を広げる。

「ちぃっ！！」

私は一度距離をとり、体制を立て直しにかかる。

《バサッ！！》

勢いよく翼が広がると、羽の一枚一枚が私に吸い込まれるように飛んできた。

「くっ…。だが、当たらないッ！！」

《ヒュッ》

私は素早く上にかわし、『超電磁砲』を展開。

《バチチチチ……》

蒼白い光を放ちながらエネルギーを溜める『超電磁砲』。だが――

「な、なにっ！？」

後ろからさっきかわした筈の羽が襲いかかってくる。

「一体何故……。ん？なるほどな」

よく観察すると、羽の一枚一枚はブーメランのように丸まっている。

「だが、そうと分かれば簡単なことだ」

再び『闇の福音』が放ってきた羽の刃に、丁度エネルギーが充填できた『超電磁砲』の銃口を向ける。そして――

《ドガァッ！！！》

極太のレーザーのような光が放たれて一瞬で多量の羽が塵と化した。

「さて、もう終わりか？」

「……」

『闇の福音』は言葉を発しない。だがその代わりになのか、新たに一太刀のブロードソードを展開し、それに炎を纏わせた。

「――――！！」

『闇の福音』はブロードソードを大きく振り上げて、そして一気に振り下ろす。すると纏わせた炎が渦を巻いて私に襲いかかる。

「千冬の言う通り、変則的だなっ！！ちっ……！」

迫り来る炎を辛うじてかわす――とはいっても、少し掠めているためか、エネルギーがヤバくなってきた。

「……こうなったら、使うか！！行くぞ、『天雷』！！」

《了解！！》

私は両手を前に掲げる。するとそこには直径一メートル強の球体が出来る。

「『霧の楽園（ミスト・エデン）』！！」

私はそう叫び、球体を前へと放つ。
球体は前方へしばらく進み、いきなり凝縮して弾けた。

瞬く間に『闇の福音』の辺りは霧に包まれていく。

「――自滅しな」

『ドガァッ！！！』

大きな音を立てて一気に『闇の福音』のいた辺りが爆発した。

何故かって？

『闇の福音』は炎を纏わせたブロードソードを持っていた。そこへ水素原子の多い球体を飛ばし、水蒸気爆発を起こしたのさ。

「ギギギ……」

流石に今のだけではやりきれないか。……ならば！！

「『霧の楽園』ッ！！」

再び『霧の楽園』を放ち、『闇の福音』の辺りを霧で満たす。

「――ダイアモンドダストって知ってるか？空気中の水蒸気が凍り

つき起こる現象なんだがな。まぁ……こういうやつだ！！」

私は小さなハンドガンのような銃を撃つ。

パァンと音が鳴り響き、『霧の楽園』が小さな凍りの結晶の集まりに変わる。

「砕けろ……！」

『闇の福音』を巻き込み凍りついた『霧の楽園』にランスで一突きする。

《ピキピキピキ……バリィィーン……！》

細かく砕けた結晶が辺りを舞う。
更に、『闇の福音』には大ダメージが与えられた。

「エネルギーはもう残ってないようだな。回収だけしてもらうか」

直ぐに教員たちに連絡をとり、『闇の福音』の機体と中の操縦者を回収に来てもらった。

さて、一夏たちの方へ向かうか…。

《ドクン……！》

「な、なんだ？嫌な予感が……より一層増した…？……まさか一夏たちに何か――！？急ぐぞ、待ってろ、一夏、篠ノ之！！」

私は残りのシールドエネルギーが僅かしかない事も気に止めず一夏たちの所へと全力で移動を始めた。

―一夏ｓｉｄｅ―

くっ……まさか最初の一撃をかわされるなんて……！

しかもこの『銀の福音』、ヤバイくらい強い…。

機体のスペックじゃ箒の『紅椿』の方が上だけど箒はまだ『紅椿』

を乗りこなせていないし…。

俺の『白式』も『銀の福音』のスピードについていけてない…。

「くっ……箒、もう一度仕掛けるぞ！！」

「分かった！！私が隙を作る。一夏はその隙に『零落白夜』で奴を討て！！」

「任せろ！！」

箒が『銀の福音』に突っ込んでいく。

まだだ…。まだ…。

……今だっ！！

「はぁぁぁぁッ！！」

俺は再び『銀の福音』に斬りかかろうとする。けど――

「Ｌａ……♪」

かん高い音を出しながら『銀の福音』は回転し、エネルギー弾を出した。

くっ、でもこれくらいなら……イケる！――えっ？

――船？

おかしいぞ、船は先生たちが海域を閉鎖しているから通れない筈。

……くそ、密漁船か！！なんで今なんだよ！！

俺は急いで船を庇うように動き、エネルギー弾を叩き落とす。

「一夏！！何をしているんだ！！」

「船がいるんだ。多分密漁船だ！」

「そのような犯罪者たちなど放っておけば良かろう！！」

「箒ッ！！」

「――っ！！」

「そんな……悲しいこと言うなよ。らしくない…。全然らしくないぜ……」

「あ…あ…、わ、私は……」

「――っ！！箒！！危ない！！」

「えっ？」

その瞬間、『銀の福音』からさっきまでとは比べられない程の大量のエネルギー弾が俺たちに降り注いだ…。

―セラｓｉｄｅ―

「くっ……間に合うか…？」

風を切り、まともに目を開けるのもしんどいようなスピードで飛び続けること一分。いよいよ一夏たちのいる場所に近づいてきた。

「……ん、あれか！どうやら無事のよう……って、危ない！！」

私の目に映ったのは、『銀の福音』が一夏と篠ノ之に無数のエネルギー弾を放つところだった。

二人とも全く反応出来ていない……下手をすれば……不味い！！

「くっ……『瞬動』！！」

一瞬で一夏たちの前に移動する。

「「セラっ！？」」

二人が叫んだ。

「ちっ……『反射』――なっ！？発動しない！？しまった、タイムラグが――ぐぁぁぁっ！！」

その瞬間、身体中に焼けつくような激痛……いや、そんな言葉では生ぬるいような痛みが走り、私の目の前は真っ暗になった。

あぁ…。嫌…な……予感は……これ……だった…の…か……。

―一夏ｓｉｄｅ―

「せ、セラぁぁぁぁッ！！」

墜ちていくセラを俺は何とかキャッチした。それはいい。でも……

――何が起こった？

「なんで『反射』が発動しなかったんだよ！？

タイムラグ…？

まさか、『瞬動』と『反射』は連続して使えないのか…？

じゃあセラは…？

セラはどうなるんだよ！？『反射』の後は『絶対防御』が消えるんだよな…？

発動しなかったから大丈夫…？そうだよな、大丈夫だよな？おい、セラ、返事しろよ！！」

「一夏、落ちつ――」

「落ち着けるか！！今は急いでセラを千冬姉のところに連れていく！！行くぞ、箒！！」

「ま、待て、一夏！！」幸いなことに『銀の福音』はもうこの場にいない。

俺は全力で帰還した。

セラを大事に大事に抱えながら。

……

「千冬姉ッ！！セラは！セラはっ！？」

「織斑先生ッ！！」

「千冬さん！！」

「教官！！」

俺だけじゃなく、セラに好意を寄せている、シャル、鈴、ラウラも千冬姉に詰め寄った。

「落ち着いて聞け……セラは……セラは……

……死んだ」

「えっ…？」

涙を流しながらの千冬姉の言葉を、俺は、俺たちはまだ信じられなかった…。

墜ち逝く者（後書き）

セラぁぁぁぁぁ――っ！！（泣）

主人公が死んじまった…。

こ、こうなったら束さんを主人公に――

箒「させるかッ！！」

『ドカッ、バキッ、ドガァッ！！！』

……グフッ。

箒「し、しまった、やり過ぎたぁ――っ！！」

……

箒「……あ、えっと、か、感想やアドバイス、待っているぞ！！」

失って……（前書き）

今回は皆暗いです。
どうぞ～＼（＾ー＾）／

失って……

―一夏ｓｉｄｅ―

「死んだ…？セラが…？ははは、変な冗談止めろよ…。なぁ、千冬姉ッ！！」

俺は千冬姉を押し退けて部屋に入る。続いて他の専用機持ちの皆も駆け込んだ。

そんなこと、絶対にあり得ない！
セラが、セラが死ぬなんてあり得ねえよ！！

そう思っていた。でも、そこに居たのはピクリとも動かないセラだった。

「冗談なんかじゃ……ないッ！！クソっ、嫌な予感はしていたのに……！！何をしていたんだ、私は！！」

《ドガァッ！！！》

千冬姉が壁を思いっきり殴った。その手にはじんわりと血が滲んで

いる。

「織斑先生、セラは……本当に……」

「セラ、セラぁ……」

「くっ……」

シャルと鈴は目から大粒の涙を溢していた。

箒は俯き、暗い顔をしている。

「なんだよ……何でこんなことになったんだよ！！」

「――何故だと？」

いきなり後ろから低い、憎しみの籠った声が聞こえた。

「ラウラ…？」

《バチィィィンッ！！》

「っ！？」

いきなり頬を叩かれた。

「な、なにするんだ――」

「貴様たちのせいだろうっ！！」

「なっ！？」

「私たちはな、全部衛星からの情報で知っているんだよ！！あろうことか貴様等は『銀の福音』との戦闘中に敵に背を向けて話をしていた。それによって敵の攻撃に反応出来なかった所へとセラが庇って入ったんだろうが！！それを……何故だと！？ふざけるなッ！！」

ラウラは俺と箒を睨み付けて怒鳴った。

「止めろ、ボーデヴィッヒ…。そんなことを言っても、セラは戻って来ない…。全員、自室で待機だ、いいな…」

千冬姉が小さな声を震わせながら言った。

セラは…俺のせいで…。

―千冬ｓｉｄｅ―

一夏たちが帰ってきた時、私は目を疑った。

あのセラがぐったりとした姿でピクリとも動かず、一夏に抱えられていたからだ。

私は直ぐに山田先生や他の教員たちと治療を始めた。

全力を尽くした。

でも、既に死んでいたセラを蘇生させることは不可能だった。

正直、私は自分の不甲斐なさが憎い。

作戦を考える時点で、既に嫌な予感がしていた。にもかかわらずセラを一人で行かせて、後の二人を守るために死なせてしまった。

ラウラは一夏と箒のせいだと言った。だが違う…。

本当は、セシリアや鈴やデュノア、ラウラを一夏たちと一緒に行かせなかった私の判断力の無さのせいだ。

そう、私がセラを殺したんだ…。

セラの死体の隣に倒れ込み、セラの冷たくなった手を握った。

私は涙で目の前が何も見えなくなった……。

―鈴ｓｉｄｅ―

いつもあんなに元気で、強くてかっこ良かったセラがもう……居ない。

何でアタシはあの場にいなかったんだろう。

もしアタシがあの場にいたらセラは死ななかったかもしれない。

何でアタシは……、ううん、答えは解りきってる…。

――弱いから。

セラみたいに圧倒的な力が、操縦者としての腕が無さすぎるからアタシは作戦に参加出来なかったんだ。

――悔しいよ…。

――憎いよ…。

自分の未熟な力が大っ嫌い…。

「セラ……」

その呟きに返事は無く、言葉はただ虚空へと消えていった。

―シャルside―

ボクの一番大事な人が……死んだ？

ウソ…。

これは夢…。そう、夢だ…。

なんて、そんな現実逃避をしても何も変わらないのに…。

ボクはどうしたら良いの？

ねぇ、セラ…。

どうしてボクたちを置いて死んじゃったの…？

止めどなく溢れる涙がボクの心の隙間を更に広げていった…。

―ラウラｓｉｄｅ―

セラは『闇の福音』との戦闘でかなり消耗していた。

本来ならば、織斑と篠ノ之の二人だけで『銀の福音』は倒さねばならなかったのだ。

それが無理でも、せめて撃墜されないように回避しながら少しでもダメージを与えることさえしていれば、あんなことにはならなかっただろう。

だがあの二人は、回避を怠ったどころか、敵の居る所で呑気に会話をしていた。

そのせいで二人が撃墜されたのならば自業自得とされるが、セラが撃墜され、更に死んだとなると許せない。

私やシャルロットたちが作戦に参加出来なかったのならば、その分の働きもしてもらわなくてはいけなかったのに！

もうアイツ等には頼らん。

教官に怒られても構わん。

『銀の福音』だけは、私のこの手で必ず潰してやる……！！

―箒ｓｉｄｅ―

私は……あの時、密漁船を犯罪者だからという理由で見棄てようとした。

だが一夏は犯罪者だろうと関係なく助けようとした。

その隙を突かれて攻撃された結果、セラが私たちの前に割って入って、私たちを庇って死んだ。

私があの時、迷わず一夏と協力して密漁者たちを守っていれば…。

そうすれば誰も傷付かなかったんだ…。

静けさに包まれた海を眺める。

私は自分の行動の愚かさとセラへの謝罪の気持ちで押し潰されそうになった…。

―一夏ｓｉｄｅ―

――セラはもう居ないんだ。

「俺は何の為にＩＳ操縦者になったんだよ…。なんで力を手に入れたんだよ…。

守りたい人を守るために手に入れた力だったのに。

セラを守るための力だったのに…。

結局いつも俺は、俺たちはセラに守られてばかりだ。

前のクラス対抗トーナメントの時の無人機との戦いの時と何も変われてない…。

セラに守られてセラを傷付けるだけだ…。

もう俺が…、ＩＳに乗る意味なんて。……いや、『銀の福音』を壊して仇を……」

俺は再び戦場へと飛び立つ決意を決めた…。

―ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ―

数時間前に、セラや一夏たちが飛び立った場所に六つの影があった。

悲しみと悔しさで傷付いた心の者たち。
だがその目には今は迷いがなく、ただ空へと飛び立とうとしている。

「貴様等がどういうつもりかは知らんが、『銀の福音』は私が倒す。邪魔だけはするな」

怒気を含んだ言葉。

「ハッキリ言うとボクもラウラと似たような気持ちだよ。……でも、それじゃあセラは喜ばないから」

複雑な表情で無理矢理絞り出したような言葉。

「アタシは…自分の力の無さがセラを殺したと思うからアンタ達を責めることは出来ない。だから、自分の手で仇を討ちに行く」

強い決意が表れた言葉。

「わたくしはセラさんには色々とお世話になりましたわ。だからセラさんを殺した『銀の福音』は許せませんわ」

力強い怒りの言葉。

「あの時の私の判断の迷いがセラを殺した。……だからもう迷わん。私は『銀の福音』を討つ」

真っ直ぐ心の中に伝わる意志の籠った言葉。

「俺は……セラに守られてばかりだった。そんな自分は許せない。だから今の俺に出来ることをやろうと思った」

自身への戒めと同時に覇気を込めた言葉。

六つの言葉が宙へと消えていった。

そして六人はそれぞれのＩＳを展開して空へと飛び立った。

目標は『銀の福音』。
目的は――セラの敵討ち。

To be continued.

失って……（後書き）

感想やアドバイス、お待ちしてます！

蘇りし翼（前書き）

何かよく分からないことになっちゃいました…。
とりあえず投稿です～！

六人が離陸してからおよそ十分が経った。

『銀の福音』は未だに移動する様子は見られず、その場で停滞しているようだ。

六人と福音との距離はぐんぐん縮まっていく。

そしてついに、六人はセラの仇『銀の福音』と合間見えた。

「『銀の福音』っ!!私は断じて貴様を許さん!!覚悟しろっ!!」

「今回はさっきと違ってアタシたちも戦うんだから!さっきみたいに簡単にいくと思わないでよ!!」

「わたくしの大切な友人の仇は討たせて戴きますわ!!」

「セラ…。ボクたちを、見てて!!」

『銀の福音』の右側ではラウラが左目の眼帯を外してキャノン砲を展開し、鈴は『衝撃砲』の準備をする。

左側ではセシリアが四機の『ブルー・ティアーズ』、シャルはシールドとマシンガンを展開している。

「今度こそ、この『紅椿』で貴様を討つ!!」

「行くぞっ!!はぁぁぁっ!!」

上から箒、下から一夏がそれぞれの武器を展開して突っ込む。

「Ｌａ……♪」

福音は回転しながらエネルギー弾を放つ。

「くっ……！」

一夏はそのエネルギー弾を避けるのが精一杯になり、進撃が止まる。

だが――

「貰った！！」

やはり機体のスペックが群を抜いている箒は上手くエネルギー弾をくぐり抜けて敵の頭上に迫る。

《ブゥゥンッ！！》

『雨月』を思いっきり振り下ろした。

「……！」

福音は一度ふっ、と急降下してからの急上昇により、箒の横をすり抜けて上へと舞い上がる。

だが外れたその一撃のスピードと威力は凄まじく更にその刀身から放たれるエネルギー波が海を割る勢いで海へと飲み込まれていった。

今回の箒はもはや迷うどころか敵を捻り潰すことに全力を注いでいるようだ。

「ふっ、逃がすかっ！！」

《ドォォォォン！！》

上空へと逃げた福音に対してラウラがキャノン砲で追撃をかける。

「喰らいなさいッ！！」

《ドンッ、ドンッ、ドンッ！！》

鈴も『衝撃砲』でそれを援護する。

「……」

しかし福音はさっきまでと変わらない、いや、それ以上のスピードで上手く避けた。

更にその勢いのまま鈴へと接近した。

「なっ……！こ、この……、グハッ！！」

首を掴まれて動きを止められた鈴。

「鈴さんを放しなさいっ！！」

セシリアが『ブルー・ティアーズ』のうちの二機を使って福音に攻撃する。

「……！」

《ガンッ！！》

「かふぅっ！！」

福音は鈴を蹴り飛ばし、その反動でかわした。そしてそのままシャルの方へと突っ込んだ。

「……！」

強烈な踵落としを放つ福音。だがシャルはシールドでなんとか防ぐ。

「重――っ！！ぐっ……！はぁぁっ！！」

《ダァンっ！！》

即座に展開したハンドガンで福音の額を撃ち抜いた。が、

福音は反動で顔が上に向いただけで、ほぼノーダメージだった…。

「う、うそ……！そんな――うぐっ！！」

《メリッ……》

福音の右足がシャルのわき腹へとめり込んだ。

そしてシャルは勢いよく吹き飛ばされていく。

「このっ！！」

「はぁっ！！」

それを見て一夏と箒が再び奇襲を仕掛ける。が――

「Ｌａ……♪」

またしてもエネルギー弾が行く手を阻む。

「くっ…。またこれか……！」

「ちっくしょぉ！！らぁっ！！」

一夏は『雪片弐型』を展開し、エネルギー弾を迎撃しながら進む。

「喰らいやがれぇッ！！」

「……！」

《ヒュッ！》

「くそっ、惜しいっ……！」

後一歩の所で当たらない。

「（いつもならセラの指示で連繋がとれるのに……！）」

そう、今の一夏たちには機体のスペックや操縦技能以前に連繋が足りていない。

そしてそれを補う指示、つまり司令塔が居ないのだ。

いつもはセラがやっていた仕事。

セラは何気なくこなしていたが、その仕事は作戦を実行する中で最も重要で難しいと言ってもいい。

そしてその司令塔がいない今、連繋がとれず攻撃が当たらない……。

「クソッ！！一体どうすれば……」

―??ｓｉｄｅ―

「ん……、ここは…？」

気がつくと見知らぬ不思議な場所に立っていた。

右を見れば桜が舞い、蝶がヒラヒラと飛んでいる。

後ろを見れば海が静かに波をうっていて、その近くの木々にはセミがミンミンと鳴いている。

更に左側を見れば真っ赤な紅葉と、栗や柿の木が並び立っている。

そして後ろにはチラチラと真っ白な雪が降り、そして積もっていく。

「四季が全て同時に…？それに……」

真上を見たら巨大な太陽がサンサンと輝き、私を照らしている。

「どうしてこんな所に……？私は確かあの時――。夢だったのか？いや、そんな筈は――」

《夢ではありませんよ》

「……誰だ？何処にいる……」

《私は貴女の盾であり、貴女の矛であり、貴女の分身であり、貴女の子であり、貴女自身です。そして私は貴女の真上にいます》

「私自身……だと？それに私の真上…？だが、今私の上には太陽しか…。まさか！！」

そんなバカな…。あり得な――……くないな、ああ。

《そのまさかですよ。それより良いのですか？こんなところでのんびりしていて…》

「良いも何も、私はもう……」

そう、私はもう……死んだ（・・・）のだから……。

《いいえ、貴女はまだ、死んではいませんよ》

「何っ!?」

どういうことだ!?
私はあの時確実に……。

《貴女の最後の行動が貴女の命を救ったのです。さぁ、もう目覚めてください、貴女の仲間たちが貴女の助けを待ってますよ。そして私も新たな姿で――》

突然光が強くなり、だんだんと意識が薄れて――。

「さ、最後にお前の新たな名を――！」

《私の名は――》

そして完全に意識が途切れて――。

「はっ……！」

私は目が覚めた…。

―一夏ｓｉｄｅ―

鈴がやられ、続いてシャル、セシリア、ラウラと福音は一人ずつ確実に倒していく…。

「はぁぁっ！！」

《ギンッ、ギンッ！！》

箒と福音が物凄い速度で何度も何度もぶつかり合う。

スピードは互角。
だが徐々に押されているのは箒だ。

やっぱり起動時間が短すぎる……！あっ！！

《ガィーーンッ！！》

「しまっ――がぁっ！！」

「箒ッ！！」

くそ、箒まで……！

「まだ諦めねぇ！！俺はまだやられてねぇ！！」

『雪片弐型』……全開ッ！！

「うぉぉぉ――っ！！」

『瞬間加速』で一気に詰め寄り一閃――っ！！

「……」

《ヒュッ！》

ヒラリとかわされる。けどもう一度――っ！！

《ヒュッ！ヒュッ！ヒュッ！》

何度も『雪片弐型』で斬りかかるけど全部紙一重でかわされちまった…。

「Ｌａ……♪」

「なっ……！しまっ……ぐぁぁぁっ！！」

攻撃直後の隙にエネルギー弾をぶつけられた。
まずい、もうシールドエネルギーが……！

「くそったれ！！」

「Ｌａ……♪」

追撃をかけるように大量のエネルギー弾を放つ福音。

その殆どが俺の方に向かってきた。

「悪い、セラ…。仇を討てなかった……」

そう呟いた瞬間――

《バチチチ…、ドォォォォッ！！》

蒼白い光が俺の目の前を横切り、エネルギー弾を全て消し去った。

「こ、これって……！」

アイツの……だよな？

「ほ、本物か……？」

俺も信じられねぇよ…。

「間違いありませんわ……！」

あぁ、間違いない……！

「うそ……！」

うそじゃ…ない！

「来てくれたんだね……！」

「全く、心配ばかりさせて……」

全くだぜ、ホントに……！

「「「「「「セラっ！！」」」」」」

そう、そこには新たな姿の『天雷』を纏ったセラが居たんだ……！

「あぁ、待たせたな！！」

セラはニッと笑い、翼を大きく羽ばたかせた。

光に包まれたその姿はまるで天使のようだった。

蘇りし翼（後書き）

セラ「……」

作者「……」

セラ「……駄文、だな……」

作者「ほんっとぉに、さぁせんしたぁっ！！」

セラ「……とりあえず感想とアドバイスを頼む……」

作者「お願いしますっ！！」

新たな力、『神機・日輪（じんき・にちりん）』（前書き）

セラ「なんだか語呂が悪いタイトルになったな……」

一夏「ま、まぁそこは気にしなくても……！」

セラ「作者のネーミングセンスの無さがよく分かるな。まぁいい、とりあえず本編をどうぞ」

新たな力、『神機・日輪（じんき・にちりん）』

「「「「「「セラっ！！」」」」」」

「あぁ、待たせたな！！」

私は微笑みながら言った。

「セラ、確かに心臓が止まってた筈なのに……それにその機体って……」

一夏が私に尋ねる。

「あぁ、私も今度ばかりは死んだと思ったがな…。多分『反射』の吸収作用のお蔭だろう」

「き、吸収…作用…？」

「ああ。本来『反射』には敵の攻撃を瞬間的に跳ね返す能力と、それを吸収して自らのエネルギーに変換して取り込む作用がある。今回のケースは跳ね返す能力が働かず変換作用だけが働いたんだろう。で、絶対防御の切れている状態では機体が耐えきれず私の身体にエ

ネルギーが逆流して許容量をオーバー。そして私は仮死状態、ってところだな」

「仮死状態……そうか、そうだったのか……！良かった！！」

「心配かけて悪かったな。……で、この機体なんだがな、雷撃を操る『覇式・天雷』の新たな姿で、季節を操る『神機・日輪』だ」

天雷の時よりも白と黄色の割合が増え、青色だった部分は薄い橙色になっている。

「き、季節を…？」

「あぁ、それを見せてやる」

そう言って私は一対の双剣を展開する。

その名を『春夏秋冬』という双剣はまさに『日輪』の力そのものだ。

「『銀の福音』、さっきはやられたが、今度こそお前を倒して操縦者を解放させてもらうぞ！！」

「……」

「参るっ！！３６５日、始まりは春の桃園、『華蝶の舞』っ！！」

『春夏秋冬』をゆらりゆらりと流れるように揺らしながら舞っていると、気づけば辺りは光で出来た桜の花弁でいっぱいになっている。

「……！」

その一枚に福音が触れた、その時――

《ドォォォォン！！》

一枚が爆発し、次々に無数の花弁へと誘爆していく。
そして福音も爆発に包まれた。

「続き来たるは夏の猛暑、『夢花火』っ！！」

その直後、辺りは次第に熱気に包まれた。

「……！」

さらにその熱気が空気を歪ませ、私の姿が分身したように見える。

「はぁっ！」

全ての私が福音に向かって『春夏秋冬』の刀身から放たれる衝撃波で攻撃を仕掛ける。

福音は間一髪で避けた。筈だったが、避けた先で爆発した。

「残念だったな、空気が歪んでいるため、攻撃の座標を誤認したようだな」

福音に当たった衝撃波がキラキラと輝き、まるで花火のように散っていった。

「更に続くは秋の夕焼け、『幻魔蟋蟀（げんまこうろぎ）』っ！！」

その発言と共に私の姿がフッと消える。

辺りが静けさに包まれた時、突然福音の背後から蟋蟀の鳴き声のような音がする。

「……！」

福音は慌てて後ろに振り返るが、私は突如福音の右側から現れて一閃。

《ザクッ！》

「……！」

そして再び私の姿が虚空へと消える。そして今度は福音の左側から蟋蟀の鳴き声のような音が鳴り響く。

福音は反射的に左側へと蹴りを放とうとする。だがそこには私は居ない。

「残念だったな。こっちだっ！！」

突如福音の正面から現れて福音を一蹴した。

《ドガァッ！！！》

「終に来たるは冬の冷気、『絶対零度』っ！！」

そう言って私は『春夏秋冬』をクロスさせて掲げる。すると周囲の空気中の水蒸気が凍てつき、まるで『ダイアモンドダスト』の時のように無数の氷の結晶が辺りを漂っていた。

「はっ！！」

私の合図でその無数の結晶が福音へと集束し、次々に突き刺さって動きを封じる。

「この技の名は、双剣と同じく『春夏秋冬』。春の桜吹雪が敵の視界を奪い、夏の花火が敵を惑わし、秋の蟋蟀が相手を怯えさせ、冬の冷気が相手を封ず。そしてこの技が――」

私は『春夏秋冬』の先端部を合わせて天へと掲げる。

雲の切れ間から差し込んだ光が刀身へと吸い込まれていき、その刀身を七色に輝かせる。

「――その光は我が身を助け、我が敵を挫く。

――我が意思により、邪悪を砕け！！

これが私の最後の一撃っ！！必殺必中、『シャイニングブラスト』

おぉおっ！！」

七色に輝くオーラを纏いし双剣、『春夏秋冬』を真っ直ぐ、そして大きく振り下ろす。

その直後、刀身から光のエネルギー波が放たれる。

そしてそのエネルギー波は福音を包み込み、地平線の彼方へと消えていく。

福音はシールドエネルギーが完全に無くなる。

「おっと、回収も忘れずにっと……！」

私は落下していく福音を抱き抱え、一夏たち全員の安否を確認した。

全員辛うじてシールドエネルギーが二桁残っているという程度だった。

「全く、一夏や篠ノ之はともかく、代表候補生のお前たちならばもっと戦い方が有ったろうに……」

「うっ……」

「面目ありませんわ……」

「あはは……」

「むぅ……」

四人はそれぞれ違う反応を返す。

「ま、私からの説教はもう止めておこう。なんせお前たちにはこれから『織斑先生の鬼よりこわぁいお説教～地獄編～』が待っているだろうからな」

「そ、そんな！」

「だって、どうせお前たちは『部屋で待機していろ』とかいう千冬からの命令を無視して来たんだろう？」

「な、何故それを――！？」

「勘だ（笑）」

いやいや、我ながら素晴らしく冴えた勘だな。
どこぞの外史の三國志に出てくる孫策並じゃないか？

「で、でもそれだったらセラだって……！」

「私は特別扱いの人物だからな。なんせＩＳの創作者でもある、正にＶＩＰ中のＶＩＰって訳だ。
千冬はおろか、世界中のトップどもの命令など聞く必要は無い。残念だったな」

私はニヤリと笑って言った。

「そんなぁ……」

「くっ……！」

「セラだけズルいわよ！」

シャル、ラウラ、鈴はそれぞれ私を睨む。

まぁそんなことをしたところでこの事実は覆らんがな（笑）。

「さぁ、帰るぞ！」

私は満面の笑みで言った。

……

「ふぅ、やっと帰ってこれたぁ……！」

「全く、もうクタクタですわ……」

「まさか福音があんなに強いとはね……」

「もう寝たいよぉ……」

「……だが今から、……なんだろうな」

六人が溜め息をついていると――

「み、皆さんっ！！大変ですぅ！！」

山田先生が走ってきたようだ。

「ど、どうかしたんですか？」

一夏が聞いたらしい。

「はぁっ、はぁっ、はい、帰ってきてすぐで申し訳ないです…。ですが大変なんですっ！！セラさんの遺体が消失したんです！！」

「悪いがこれは一刻を争う。今すぐに探してきてくれ！」

山田先生の後ろから千冬も現れたようだ。

「あ、あのさ、千冬姉……」

「なんだ！無駄話は後にしろ！一刻を争うと言っているだろうが！！」

「い、いや、あのぅ……」

と、その時――

「ふぅ、やっと着いた。全く、人を抱えて飛ぶと色々と面倒だな…。ん？おっ、千冬、ただいま」

私が着いた。
そう、さっきから『だろう』とか、『ようだ』とか言っていたのは、私はその場に居なくて、オープンチャネルで聞いていたからだ。

「「せ、せせ、せ、せ、せ……」」

「せ？」

「「セラぁぁ（さん）っ！？」」

「ん、そうだが……」

「イヤイヤ、そうだが……じゃないだろ！！お前、死んだ筈じゃ……！」

「そ、そうですよぉ――――！！！？」

「あぁ、それは――（以下省略）」

「「……」」

二人はあんぐりした表情で私を見た。

「まぁ要するに、色々ありましたが、セラ・ヴィヴィット・アーレン、無事帰還致しました！！」

軽く微笑みながら言った。

「ううぅ……、セラさぁぁんっ！！良かったですぅ！！」

ガバッと山田先生が抱き着いてきた。

「はは、山田先生、心配かけてすまなかった」

山田先生を優しく抱きしめながら囁くように耳元で言った。

「ほ、ホントに心配したんですからぁっ！！ふぇぇんっ！！」

とうとう泣き出す山田先生。

よしよしと頭を撫でる私。……これじゃあどっちが先生か分からな

くないか？

「セラ、ホントに、心配ばかり、掛けおって、この馬鹿者が……」

千冬も鼻声で私に顔を見せないように伏せながら言った。

その千冬を、山田先生を抱いている手と逆の手で抱きしめる。

……両手に花だな♪

「さて、じゃあ解散ということで――」

と、一夏が言って、全員が旅館へ戻ろうとした。が、

《ガシィッ！！》

それを留める鬼神の姿が一つ。

「え、えっと、何か用でしょうか？」

「いや、大したことでは無いんだがな、私が『部屋で待機していろ』と命じたにも関わらず、それを無視して無茶した大馬鹿者どもが六人ほどいたらしいんだが」

「へ、へぇ……」

「その特徴はな、全員が専用機持ちらしいんだ。さらにその内一人は男子生徒らしいぞ？」

「うっ……！そ、それを何処で……」

「とある親切な天才代表候補生が教えてくれたんだが？」

さっき抱きしめた時にこっそりな（笑）。

「さて、ではお待ちかねの反省文と懲罰用の特別トレーニングだ。今すぐ始めるぞ、さぁ、走れ！！」

千冬が一喝する。

「「「「「「せ、セラ（さん）のバカぁ――っ！！」」」」」」

その声はここからけっこう離れている筈の旅館まで響いたらしい。

新たな力、『神機・日輪（じんき・にちりん）』（後書き）

セラ「私のセリフの、『これが私の最後の一撃っ！！必殺必中、『シャイニングブラスト』ぉぉぉっ！！』って、某魔法少女のＳＬＢっぽくないか？こう、『これが私の全力全開ッ！！』的な……」

鈴「気にしたら負けよ！！」

ラウラ「考えたら負けだ！！ツッコミは禁止！！」

一夏「あのさ、『春夏秋冬』の冬ってさ、ぶっちゃけ『ダイアモンドダスト』と同じじゃ――」

箒・セシリア「突っ込んだら負けだ（ですわ）ッ！！」

セラ「今回はえらく厨二病っぽかったな……」

一夏「一応さ、セラの台詞……だぜ？」

セラ・一夏「……」

シャル「か、感想やアドバイス、それと、『セラの絵を描いてみました』的なのもお願いしますっ♪」

ＩＳ学園よ、私は帰ってきた！……言ってみただけだ…。（前書き）

短いです。
まぁ次の話の間話なので…。

セラ「言い訳ほど見苦しい物は無いな」

うっ……！
で、ではどうぞ！

ＩＳ学園よ、私は帰ってきた！……言ってみただけだ…。

「皆さぁん、バスに乗り込んでくださぁい！」

山田先生が一年生全員に呼びかけた。

……にしても今回の臨海学校はまともに遊べたのは初日だけだったな…。

束さんにセクハラされたり、戦闘で死にかけたり、心配かけた詫びにシャルや千冬達に何故か耳掃除をするはめになったり…。

「これじゃあ何をしに来たんだか…」

バスの一番前の座席に座りながら私は呟いた。

その時、車内に見知らぬ女性が入ってきた。

「ねぇ、織斑一夏くんとセラ・ヴィヴィット・アーレンさんっているかしら？」

「あ、はい、俺と――」

「私だが……何か？」

偶々一番前の座席にいたことが幸いした。私たちは呼ばれたまま、直ぐに返事をした。

その女性は見たところ二十歳くらいだ。

鮮やかな金髪が綺麗で、ブルーのサマースーツともよく合っている。

「君たちがそうなんだ、へぇ……」

何故か一夏の方はちらっと見ただけで私の顔を、熱のこもった目で見てくる。

「ところで貴女は？」

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

「なっ！？」

私が驚いていると、ナターシャはいきなり頭を下げた。

「その、ごめんなさい…。私のせいで貴女は死にかけてしまったのよね…。謝って済むとは思っていないけれど、本当にごめんなさい」

そう言ったナターシャの肩を私は優しく抱いた。

「気にしなくてもいいさ。貴女も、そしてソイツ（・・・）も、ただ巻き込まれただけ、だろう？何も悪くないよ」

「っ！！貴女、それをどこで……！」

「さぁな、ただ私は貴女と仲を違えるは微塵も無い、それだけのことだ」

「……ねぇ、セラ？」

「ん、なん――んぐっ！！！？」

いきなり抱き寄せられて唇を奪われた。

「……ぷはっ、えへっ、これは助けてくれたお礼よ♪じゃあね、愛してるわ、セラ♪きゃっ♪」

「は、はぁ……」

顔を、真っ赤にしつつヒラヒラと手を振って乙女らしさＭＡＸでバスを降りていったナターシャ。

「まぁ、役得……なのか？」

と、呟いた瞬間、周りからとてつもなく鋭いオーラを感じた。

嫌な予感がしつつも、ゆっくりと振り向いた。

「浮気者め！」

「セラってモテるんだねぇ、フフフ……」

「アハハハハッ！」

「セラりんは罪な女だねぇ」

「お姉さまっ！！私とも熱いキスをっ！！」

「私とも！！」

「いえ、寧ろ純潔を！！」

「「「それだっ！！」」」

いやいや、それだっ、じゃないだろ……。

とりあえず……、

「私は寝る！」

逃げることにした。

「……すぅ」

「寝るの早っ！！」

「えっ、もう寝たのっ！？」

「……みたいだな」

「にしてもこの寝顔……」

「「「天使だ……」」」

「……むにゃむにゃ、えへっ♪」

「「「ゴフッ……！し、写メを……、ムービーを……！」」」

その後、車内ではシャッター音が止まらなかったらしい。

「……むにゅう」

「「「カハッ……！！」」」

……

「で、では皆さん、速やかにバスから降りてくださいね……」

というわけで、気付いたらＩＳ学園に着いていた。

にしても……

「なぁシャル、なんで山田先生は……いや、このバスに乗っている全員はこんなに死にかけているんだ？」

そう、なんだかまるで大量の血を失ったような…。

そういえば何か鉄臭いな…。

全員、タオルやウェットティッシュで口元を拭っている。

「あ、えーと……そ、そういえばセラはよく寝てたね？（決してセラの小悪魔的な寝顔のせいだとは言えない……っ！）」

「んー、昔から色々と忙しい時期が多かったからな、寝たい時には即座に深い眠りにつくことが出来るようになったんだ」

もはや特技のレベルだぞ？
某ネコ型ロボットの漫画に出てくる、射的と昼寝以外の特技が無い主人公の少年にも劣らんよ。

「そ、それは凄いのか凄くないのか……」

「ま、今は早く部屋に戻りたいな、疲れたから寝たい」

「ま、まだ寝るんだね…」

「一緒に寝るか？」

「是非お願いします！！」

返答早っ！！

「出来れば抱き枕にしてください！！」

しかも要求が付いてきたっ！？

「わ、分かったから落ち着け……！」

「ほんと？やった！！」

まぁ、柔らかいシャルを抱いて寝るのは気持ち良さそうだな…。

べ、別に性的な意味じゃ無いんだからな！！

……

おはようございます、セラです。

昨晩は結局シャルを抱いたまま寝た。

途中でラウラも、

「セラ！シャルだけズルいぞ！私のことも抱け！」

と、乱入してきたから、結局三人で抱き合って寝たよ。

時期が時期だから暑かった…。

まぁ気持ち良かったから良いけどな。

……だから、性的な意味じゃ無い！！／／／

コホン、で、今は翌日の朝なんだが、二人はまだ起きて――「んっ……」いや、シャルは起きたようだ。

「あ、おはようセラ」

「ああ、おはよう」

「ねぇ、セラ」

「なんだ？」

「……セラのおっぱい、前よりおっきくて柔らかかったよ？」

「誤解を招くような事を言うなっ！！」

ちょっ、ちがっ、違う！！
ホントにえっちぃことはしていない！！
ただ、シャルが胸に顔を埋めてきただけ……って、そこの男子！絵面を想像するなぁっ！！／／／／

……ぐすっ、いぢわるっ、バカぁ！／／／／

「せ、セラが……可愛すぎる件っ！？ゴフッ……！」

「ふぇっ？し、シャル？お、おいっ！！シャルぅ――――！！！？」

「……我が人生に……一片の悔い無し……ガクッ」

「ん、そんな冗談が言えるなら大丈夫か、放っておこう」

「ってちょっとぉ――――！！！？」

さて、こんなことをしてる暇は無い。
同時に投稿した次話に行こうか。

生徒会副会長のなお――ごほんごほん、生徒会長の更識楯無です

遂に夏休みに入り、今は七月下旬。

セミの鳴き声が余計に暑さを感じさせる。

今日の午前中はシャルと一緒にトレーニングをして過ごした。さて、午後は何をしようか……？

「セラ、午後から、どうしよう？」

「そうだな…。外にでも出掛けるのもいいが……」

そこで言葉を切って、後ろに振り向いた。

「どうしたの、セラ？」

「そこに隠れている奴、出てこい」

曲がり角の方に向かって私は言う。すると――

「ふふふ、見つかっちゃったわね。にしても、先輩に向かって『奴』は無いんじゃないかしら？」

どこからか扇子を取り出してそう言った女性。

「人の事をずっとつけ回していたクセに、そんなことを言うか？」

「もう、イケズね。ところでセラさん？私は誰でしょう？」

この女性が誰かだと？
そんな簡単な問題があるのか。

「特徴的な青い髪に、捕らえ所の無い性格、整った顔つきで、常に扇子を持っている二年生、と言えば一人しか思い付かんが？生徒会長さん？」

「せ、生徒会長っ！？」

シャルは分からなかったようだな。

「あらら、私のこと、結構知ってくれているのね、嬉しいな♪」

「まぁ有名人だからな。……ところで用件は？何も無しにただつけ回していた変態って訳じゃ無いんだろう？」

「あらあら、そこまでお見通しなら、隠しても無駄ね。では改めて、初めまして、セラさん。私はＩＳ学園生徒会長の更識楯無です。よろしくね♪」

扇子を口元に当てながらウインクしてきた。

「イタリア代表候補生のセラ・ヴィヴィット・アーレンだ。よろしく」

とりあえず私も自己紹介した。

「じゃあ、本題に入りたいのだけれど……」

生徒会長はシャルの方を見て口ごもった。

「あぁ、すまんがシャル、先に帰っていてくれるか？」

「あ、えっと、分かった。では、失礼します」

シャルは生徒会長にペコリと一礼して去っていった。

「で、話とは？」

「単刀直入に言うわね？貴女を生徒会に勧誘しにきたの」

「私を生徒会に？また、どうして」

「もう、分かってるくせに…。貴女、噂では何でも少なくとも一年生の中ではダントツの実力者らしいじゃない？あの織斑先生にも負けたこと無いのよね？」

「まぁＩＳでは知らんが、それ以外での格闘技やら武術やらではな」

「ふふ、そしてＩＳを生み出した、あの篠ノ之博士にも勝るとも劣らない天才的頭脳。ＩＳの第三世代型は貴女が生み出したと聞くわ」

あぁ、束さんを拾った（笑）時のことか…。

「まぁ、確かに第三世代型は私の作品だな。ま、今は第四世代型やら第五世代型やらを作っているがな」

とは言うものの、きちっとした第五世代型は『神機・日輪』だけだがな。

第四世代型も途中で手を止めたままのものも多々あるし、実質上現存する第四世代型は篠ノ之の『紅椿』だけだな。

「だ、第四世代型と第五世代型って……、まだ世界中ではやっと第三世代型がまともに出来だしたばかりなのに……」

「コアも幾つか所持してるぞ？自作のな」

「う、噂以上の天才ね…。うん、ますます欲しくなったわ！どうかしら、入らない？」

どうしたものか、そもそも学園のスポンサーでもある私が生徒会に所属しても良いのだろうか。

というかそれ以前に面倒だな、ああ。

「悪いが私にそういうのは向いてない。断らせてもらおう」

「どうしても？」

「ああ」

「絶対に？」

「めんどくさい」

「泣いちゃうわよ？」

「それは困る」

「じゃあ入って？」

「うっ……」

「じぃー……」

か、顔が近い…。

「はぁ、分かった」

「ホントに!?」

「ああ、だが条件がある」

「条件？」

「ああ、私と勝負して勝ってみろ。勝てたら入ってやる」

そう私が言うと、彼女はニヤリと笑った。

「ふふ、貴女、私に勝てると？」

「ま、負ける気はしないな」

「ふぅん…。ねぇ、この学園の生徒会長の意味、知ってる？」

生徒会長の意味？
そんなものがあるのか。

「いや、知らない」

「この学園の生徒会長の意味はね、『最強』であることよ」

「ほぅ……面白い、ならばやるか」

「勿論よ」

私と生徒会ちょ「あっ、私のことは名前で呼んで？」……なるほど、
コイツも千冬と同様に読唇術が使えるんだな…。

改めて、私と楯無は火花を散らした。

……

「で、何故こうなった？」

私と楯無は今、畳道場で向かい合っていた。

「何故って、貴女が言い出したのよ？」

「いや、てっきりＩＳでの勝負だと思ったのだが……はぁ、まぁいい、掛かってこい」

私は楽に構える。

「その前に、一応ルールの確認ね。私か貴女のどちらかが降参するか、完全に勝負が着いたらそこで終了」

「構わん。じゃ、どうぞ」

「じゃあ――行くよ」

どんっといきなり目の前に接近してきた。

「ほう、『無拍子』か。面白いな。――が、まだまだだな」

《パシィッ！》

「嘘っ！？見切られたっ！？」

両手を受け止めた私の早業に驚いて叫ぶ楯無。

「じゃあ次はこちらの番だな？――ふっ！」

「ぐっ！？これは……何っ？きゃっ！！」

楯無は私が両手を受け止めた後、直ぐに距離をとっていた。そして今もその距離は詰まってはいない。

ただ私がポケットに手を突っ込んで突っ立っているようにしか見えないだろう。

しかし楯無は吹っ飛ばされる。

「『居合拳』だ。その距離だとモロに当たるぞ？」

「あらぁ……そんな業使えるのね……」

「まだ色々とあるぞ？例えばそうだな、これとか」

私はどこからともなく細長い布を取り出した。

「これは『布槍術』だ。布だからと言って痛くないとは思うなよ？」

《ヒュン…ヒュボボッ！ドドドドッ！！》

軽く自分の周りで布を回して型を整え、何度も突きを放つ。

「くぅ～っ！！やるわね、でも当たってあげないんだから！」

顔を先ほどのダメージによる苦痛に歪ませながら何とかかわしていく。

「じゃあ次はこれかな？」

そう言って出したのは十円玉。

「ちょっ、まさか『羅漢銭』まで！？」

「お、知っていたか」

『羅漢銭』。

中国の暗器の一種で、あの銭形平次も使用した業だ。

「まぁ十円玉だからあまり殺傷力は無いが、それでも痛いぞ？私のサイフもだが（笑）」

《バッバッバッバッ！！》

「きゃぁぁんっ！！」

もはや一方的すぎて可哀想か？

「もう終わりでいいか？これ以上やって楯無を怪我させたく無いしな」

「へっ！？／／／」

楯無の顔が真っ赤に染まる。

「ほら、立てるか？」

楯無に手を差しのべて微笑む。

「あっ……／／／」

私に引っ張り上げられ、ふらついた足の楯無を抱き止めてやる。

「ちょっ……あっ……！／／／」

顔がこれ以上ないくらい赤くなった楯無。

「まぁやり過ぎた気もするし、詫びに入ってやるよ、生徒会」

「えっ、あ、ほ、ホントに？」

上目遣いで聞いてくる楯無。

……可愛いな。

「あぁ、ホントだよ。だが役職は楽なもので頼むぞ？」

「うん！」

ヤバい、本気で可愛い…。

楯無は正直ちょっと好みのタイプだ。

女の子の中ではな。

「セラさん、次は負けないんだから」

「ふっ、いつでも挑め。返り討ちだ。あと、私のことはセラでいい」

「分かったわ。じゃあ……セラ、一緒に生徒会、頑張りましょうね♪」

そう言って楯無は私の頬にキスをした。

「なっ……！／／／」

「私、貴女のこと、好きになっちゃったみたい♪一年生達がお姉さまって慕っているのがよく分かったわ」

「そ、そうか…。とりあえず、返事は保留だぞ？」

「良いわ。でも、絶対に私が貴女を落とすんだから♪」

いや、もう既に落ち掛けてるかもしれんが…。

「まずは今日、今からデートしましょ♪」

「はっ……？」

……

結局デートということで、着替えて、@クルーズという店に来たのだが…。

「ねぇ、あれって確か……」

「ああ、シャルとラウラ……だな」

二人が給仕をやっていた。

しかもラウラはメイド服、シャルは執事服でだ。

「はぁ、全く何をバカな……。まぁいい、とりあえず何か頼んで――」

「全員動くんじゃねぇ！！」

いきなりドアを破らんばかりの勢いで三人の男が雪崩れ込んできた。

《パァァンッ！》

しかもそのうちの一人が発砲した。
天井に向かって撃ったため、誰も怪我はしていないが、その恐怖に店内がざわめきだす。

「うるせぇっ！！」

「はぁ、うるさいのはどちらの方だか…」

「全くよね。セラとのデートが台無しよ……」

と、二人であきれていると、

「えー、犯人に告ぐ。君たちは既に包囲されている。大人しく投降して出てきなさい。繰り返す――」

と、窓の外にズラリと並んだパトカーが見えた。

迅速な行動は肝心できる。だがな……、

「……なんか」

「……警察の対応も」

「……古い」

店内の客が私の心を代弁してくれた。

「ど、どうしやしょう兄貴！このままじゃ俺たち全員――」

「うろたえるな！焦るこたぁねぇ。こっちにゃ人質がいるんだからな。強引な真似はできねえさ」

「へ、へへ、そうでしたね。俺たちには高い金払って手に入れたコイツがあるし」

と言って、再び天井に威嚇射撃を行ったバカが一名。

「銃弾の無駄使いだ。バカが」

「全くよね。ＩＳ学園の生徒ならそんなバカなミスはしないわよね」

《ズズズ……》

二人揃って、店に入って直ぐに出てきたお冷やをすする。

一人はショットガン、一人はサブマシンガン、で、リーダーがハンドガンだな。

シャルとラウラは――

大丈夫そうだな。
ここは二人に任せよう。

するとラウラはスタスタと犯人グループの方へと歩いていく。

その手には氷が大量に入っている一杯のお冷や。

「なんだてめぇ？」

「黙って飲め。――飲めるものならな」

ラウラは突然トレーをひっくり返し、氷と水を宙に浮かばせる。

それらを回転するような動作で掴み――弾いた。

「『羅漢銭』擬きか。やるな」

私は感心しつつ眺める。

氷の指弾を、トリガーを引こうとする人差し指、瞼、眉間、そして喉へと当てながら、次の男を膝蹴りでノックアウトさせる。

「っざけやがって！このガキ！」

いち早く痛みから復帰したリーダーが、ハンドガンをぶっぱなす。

火薬の炸裂音が連続して鳴り響くが、ラウラには届かない。

ソファを、テーブルを、観葉植物を、ドリンクサーバーを、あらゆる物を盾にしてラウラは駆ける。

「あ、兄貴っ！？コイツ――」

「うろたえるな！相手はガキ一人だ！すぐに片付けて――」

「――残念だけど、一人じゃないんだよねぇ」

マガジンを切り替えたリーダーの後ろには執事服の美少年、いや、美少女のシャルが。

「せーのっ！！」

バキィッと良い音をたててシャルは三人を蹴り飛ばした。

そしてその先には――

「――ナイスアシストだ、シャル」

ラウラが走ってきていて――

《ドガァッ！！！》

三人を一気にねじ伏せた。

「「さて、チェックメイト――」」

と、言いかけて二人がその場から離れた瞬間、

「捕まってムショ暮らしになるくらいなら、いっそ全部吹き飛ばしてやらぁ！！」

再びリーダーが立ち上がり、皮ジャンを広げた。

そこには軽く四〇平方メートルは吹き飛ばせそうな、プラスチック爆弾の腹巻きがあった。

「しまったっ！！」

「ちっ、この距離では……」

「ふはははっ！！全員吹っ飛べぇぇぇ――っ！！」

リーダーが叫ぶ。
そして次の瞬間――

《ドゴォォォッ！！》

壁にめり込んだリーダーがいた。

何故なら、リーダーが立っていたその場所の隣に有った座席には、

「「いい加減、ウザイ」」

私と楯無が座っていたからな。

「えっ!?せ、セラ!!それに、会長さんっ!?」

「な、なんだと!?」

二人は驚いている。

「二人とも、詰めが甘いぞ?」

「まだまだだね」

繰り出したままだった拳を戻して擦りながら、私達は言った。

その直後警官隊が雪崩れ込むように入ってきて犯人グループを確保した。

「た、助かったの……？」

「な、何がなんだか……」

「っていうか、あれって――」

「「「モデルの、セラ・ヴィヴィット・アーレンっ！！！？」」」

あ、しまった…。
顔を隠すのを忘れていた…。

「楯無……」

「ええ、分かっているわ」

「「三十六計逃げるに如かず！！」」

「あ、ちょっと！セラ――っ！！」

「シャル、私たちも逃げるぞ！！」

「えっ？あ、うん！！」

結局こうして、騒がしくなった一日であった。

―次の日―

『都内喫茶店にて銀行強盗の立てこもり事件発生。
美少女メイドと美少年執事により犯人グループ逮捕。

その場にはあの世界的モデルにしてＩＳ開発者のセラ・ヴィヴィット・アーレンも居合わせたらしく――』

新聞の一面に大きく私の写真と共にその記事が書かれてあった…。

生徒会副会長のなお――ごほんごほん、生徒会長の更識楯無です（後書き）

初めての二話連続投稿ですね。

セラ「短いし、ネタ回みたいなものだがな」

楯無「でも、私はセラと会えたから幸せよ♪」

セラ「う、うむ……／／／」

シャル「ちょ、なんかセラと会長さん、なんか良い雰囲気になってないっ！？」

ラウラ「そんなものは許さんぞ、セラ！お前は私の嫁だろう！！」

束「むむむっ、セラちゃんは私の旦那さんだよぉ――っ！！セラちゃん、おっぱい揉ませて――っ！！」

《ふにょん、ふにょん……！》

セラ「あぁんっ！！／／／」

束「はぁっ、はぁっ……、良いよぉ、セラちゃん……！その喘ぎ声、堪らないよぉ……！」

セラ「た、束さんっ！！どこから湧いて……ひゃんっ！！／／／」

束「セラちゃんの為ならどこからでも現れるよん♪」

《ふにょん、ふにょん……！》

シ・ラ・楯「ブシャァァァッ！！」

楯無「こ、これが……セラのおっぱいの破壊力……！（ボタボタボタボタ……）」

シャル「は、鼻血が……」

ラウラ「止まらない……！」

束「じゃあそろそろお時間かな？感想、アドバイス待ってるよ♪」

《ふにょん、ふにょん……！》

セラ「ら、らめぇっ、イッちゃ――！！！／／／」

シ・ラ・楯「ブワッシャァァァァァァッ！！！！」

セラ家にて（前書き）

今回は後半がちょっとエロいですかね…？

セラ「私の家での出来事なんだがな、何故かギャグ回だ」

セラ家にて

「ふんふふ～ん♪」

どうも、セラだ。
今日は久しぶりに日本での家に帰ってきた。
この家はしばらく無人だったが、セキュリティ的には何の問題も無い。
怪盗アルセーヌ・リュパンも悲鳴をあげて逃げ出すような仕掛けがたんまりしかけてあるからな。

さて、それはそうと、私が今、何をしているかというとだな、ケーキを作っている。
別に客人が来るという訳では無いが、何となくだ。
見た目は悪くないと思うぞ？店とかに置いてありそうなかんじだ。
あとはフルーツをカットしてのせるだけだな。

―???side―

「ここ……だよね」

ボクは手に持った紙に書かれてある住所、それから表にある名前の表札の『ヴィヴィット』というのを確認して、インターホンに手を伸ばす。が、

「あぁっ、でも、いきなり来ちゃったし、何て言えば良いんだろうっ？えっと、本日はお日柄も良く……じゃないっ！！」

インターホンの一センチ手前くらいで指を止める。

「そ、それ以前にセラ、起きてるかな…？」

よくよく考えたら、今は午前の9時。休日のこの時間なら、別に寝

ててもおかしくないんだよね。

「ちょっと覗いてみようかな…？」

ボクは庭の方へと一歩踏み出した。

――踏み出したんだけど…、

《ビーッ、ビーッ！！》

「ちょっ、警報サイレン！？ボクは泥棒じゃないよ！！きゃあああっ！！」

いきなり足が引っ張り上げられ、近くの木に宙吊りにされる。

「くぅっ、でも、これくらいなら……たぁっ！！」

と、罠を外したら……

「ギャァァッ、なんかいっぱい来たぁぁぁっ！！」

―セラｓｉｄｅ―

「ん？これは……」

気分良くフルーツを切っていると、セキュリティシステムに何か掛かったという報せが来た。

「野良犬か、野良猫か、それとも泥棒か？はたまた私が帰ってきたのを嗅ぎ付けたメディア関係者か？」

とりあえず向かうことにしよう。

……

あ、えーと、なんだ、この光景は…？

庭のセキュリティから全力で逃げる金髪の美少女。

それは紛れもなく――

「シャル？」

そう、シャルだった。

「ふぇーーんっ！！誰か助けてぇ！セラぁぁっ！！」

「……はぁ」

溜め息をつきながらセキュリティシステムの電源を落とす。

《フシュー……》

軽い空気の音を鳴らしながら、セキュリティの機械が停止した。

「た、助かったの…？」

「あぁ」

「そうかぁ、良かったぁ。……って、セラっ！？」

溜めが長い。

「何故インターホンを鳴らさなかったんだ？そうすればちゃんと出たのに」

「あぁ……えっと、そのぉ……てへっ♪」

「むっ……。か、可愛いからって、不法侵入は許さんぞ」

「ふ、不法侵入……」

「そうだ。だから詫びに、ケーキを味見してもらおうか」

ニッコリ笑ってシャルに言った。

……

「で…？何故こうなった？」

今、私の目の前にはいつものメンバー、つまり一夏、篠ノ之、セシリア、鈴、シャル、ラウラの六人がケーキを頬張っている。

「俺は暇だったから久しぶりにセラの家にでもって……」

「私は偶々一夏と遭遇したからだ」

「べ、別にわたくしは一夏さんが来たから来たのでは無いですわよ？」

「アタシは、休みをセラと楽しもっかなって。……余計なのがいっぱい居たけど」

「ボクは……何となく？」

「嫁の家に行くのに理由など要らん」

と、六人六様の答えが返ってきた。

「まぁ来るなとは言わんが、せめて事前に連絡くらいしろ」

「仕方ないじゃん。今朝になって暇になったんだから。それとも何か見られたら困るものでもあんの？エロい物とか？」

「鈴、一夏じゃないんだからそれは無いよ」

とシャルが言った。

「そうそう、俺じゃ無いんだから――っておいっ！！」

「何よ、じゃあアンタ、エロ本の一冊も持ってないの？枯れてるの？」

「ちげぇよ！！ちゃんと反応するわ！現にセラが薄着なのを見て反応してるわ！！」

「ちょ、幾らなんでもそこまでカミングアウトする？引くわー」

「い、一夏……そんなこと言われると薄着しにくいだろ…？」

……ちょっと上着でも持ってこようかな…。

ちなみに今はノースリーブのピッチリした服と、スパッツしか着ていない。

……実はノーブラだったりもする。

「待ってセラ！お願いだからそのままで！ね？」

「そうだぞ嫁よ。私に全てをさらけ出すといい」

「……まぁ、今のままでも良いんじゃないの？アタシ的にはそのほうが……」

そ、そこまで言われると…。
だがなぜ全員胸を凝視する…。

「「「「「「（あの胸のポッチって……まさかノーブラっ！！！？）」」」」」」

「……なぁ、そんなにジッと見られると、何か恥ずかしいんだが…」

「えっ？あっ、そ、そうね！せっかくだし、皆で何かする？」

鈴があからさまに同様しているが、まぁ気にしないでおこう。

「そうだな、だがこの人数で何をするんだ？」

「あ、確か昔アタシと一夏と三人で…いや、弾もいたっけ?まぁ昔やったゲームあったよね?名前は……」

「バルバロッサだな。確かドイツのゲームだった筈だな」

「ねぇ、これってどんなゲームなの?」

シャルが聞いてくる。

「カラー粘土で何かを作って当てていくゲームよ。質問とかしていいわけ」

「それでは作り手の技量に左右されるのではなくて?」

「別にそんなことないわよ。むしろ上手すぎるとすぐに正解されてポイント入んないし。適度にわからないくらいがいいわけ」

結局、経験者である私と鈴、一夏が最初説明役に回るということで、ゲームが始まった。

こねこねこねこね…。

「できたっ」

「それじゃ、スタートね」

シャルが最初にサイコロを振り、ゲームスタートだ。

「えーと、一、二、三、と」

「あ、宝石を得ましたわ」

「私は……質問マスだな。よし、ではラウラの粘土に質問するぞ」

「受けて立とう」

「あ、ちなみに質問に対する回答は『はい』『いいえ』『わからない』よ。『いいえ』を出されるまで質問できるから、最初は大分類ではじめるとお得ね」

鈴のアドバイスを聞きながらふむふむと頷く篠ノ之。そして再度、ラウラの粘土を見る。

（……にしても、ラウラのアレは何だ？）

その粘土は『ゴゴゴゴ……』と威圧感を放っているような円錐形の何かで、全く見当が付かない。
実際、ラウラ以外は誰も分かっていないようだ。

「それは地上にあるものか？」

「うむ」

「よし…。では、それは人間より大きいか？」

「そうだ」

ここまできても、まだ誰も見当が付かない。
強いて言うならば、東京タワーやエッフェル塔のような塔かと思える。

「それは都会にあるものか？」

「どちらとも言えないな。あると言えばあるが、ないと言えばない」

カオスだ…。
もはや全く分からん。

「では、人間の作ったものか？」

「ノーだ」

「はい、質問終了。箒はこのまま回答もできるけど、する？」

「う、うむ。そうだな。外しても失点は無いようだし、答えよう」

ちなみに正式なルールでは、回答は紙に書いて製作者だけが見るのだが、今回はお試しゲームだからということで回答情報を全員で共有するというルールに鈴が変更した。

「じゃ、答えをどうぞ」

「油田だ！」

ビシィッという効果音が付きそうな勢いで篠ノ之は物体を指差して答えた。

「違う」

ラウラは即答した。

がっくりとうなだれる篠ノ之に対し、全員が、

（何故に油田…？）

という疑問を抱いていた。

なんやかんやでゲームは中盤に。
このゲームは中盤に当ててもらえれば製作者にも得点が入るため、ここらがベストタイミングだ。

「ラウラ、セシリア、そろそろ当てて貰わないと得点無くなるわよ？」

あの後、シャルの馬はクオリティが高かったため、すぐに当てられた。

篠ノ之のは井戸だったのだが、シャルの上手い質問により、ベストタイミングで当てられた。

が、問題はラウラの円錐形の物体とセシリアのアメーバのような何か。

「そ、それは食べ物？」

「違いますわ」

「それはビルより小さいのか？」

「いや、巨大だ」

既に自分の粘土は当てられたシャルと篠ノ之はひたすら質問を重ねるが掠りもしない。

そうして結局お試しゲームは終了となった。

「なぁ、ラウラ。これは……何なんだ？」

私はあまりにも気になったので、早速ラウラに尋ねた。

「分からんのか？嫁失格だぞ」

「う…。で、答えは？」

「山だ」

「……は？」

「山だ」

「いやいや、山はこんなにてっぺんは尖ってないだろう！！」

「エベレストなどはこうなっている」

「なら答えはエベレスト限定の山だろ」

「エベレスト以外にもたくさんある」

ラウラは自分は間違っていないと腕を組んだままだ。

「ま、まぁラウラは正解されなかったから減点ね。そ、それでセシリアのは？」

「あら、誰もわからないのかしら？」

いやいや、わからないから聞いているんだろうが。

「我が祖国、イギリスですわ！」

「「「「「「……」」」」」」

全員が沈黙した。

これまでの答えは、『潰れたジャガイモ』『原初細胞体』『ぐちゃぐちゃのピザ』『藻』『ボロ布』『怪我をした犬』『ジャンプ中の猫』。

要は全く似ても似つかないのだ。

「全く、皆さんの不勉強には驚きますわ。一日一回世界地図を見ることをおすすめしますわ」

（（（（（（（（イギリスの形を知らない訳じゃ無いよ……））））））））

全員の心が一致した瞬間だった。

「さて、じゃあ次はアタシたちもはいるわね」

「鈴、あのシュウマイだか豚まんだか分からんようなやつは無しだ

からな」

「失礼ね、あれは桃まんよ！」

「げ、桃まんかよ…。もはや反則すれすれだろ」

「何よ、一夏だってただの四角を豚の角煮って言ってたじゃない」

「俺のは三層になってたんだよ。大体、弾は分かった」

「しょっちゅう食べてるからでしょうが……」

と、口論しながらも粘土をこねていく。

こねこねこねこね……。

「出来たっと。……って、何か……すごいね」

全員の粘土を見てシャルは言った。

「まぁ、始めよう。じゃあ私からな」

私がサイコロを振り、ゲームスタートだ。

「宝石か」

「次はアタシね！……んと、質問マスね。じゃあセラの粘土に質問するわ」

いきなりか。

「いつでもいいぞ」

「……」

「どうした？早く質問しろ」

「いや、あのさ…。アタシ、もう答え分かっちゃったんだけど」

鈴が半ば呆れたように言う。

「じゃあ答えるか？」

「……そうね。答えは、『ＩＳ『神機・日輪』に乗って『春夏秋冬』を展開したセラ』……ってどんだけよ！！」

「正解だ。よく分かったな！完璧な答えだ」

「よく分かったな！……じゃないでしょ！こんだけクオリティ高かったら誰でも分かるわぁぁッ！！」

り、鈴が壊れた（？）……。

「いや、ホントにフィギュア並みだな」

篠ノ之が私の作品を手に取ってジッと眺める。

「そういえば昔やったときもセラのは異様に凄かったな…」

あはは…、と一夏は苦笑い。

「これ、ホントに粘土で作ったの？」

「もはや芸術の域ですわ……」

シャルとセシリアはまるで高級骨董品を見るかのような目で見ている。

「流石は我が嫁だ。出来ない事など無いな」

ラウラは私を絶賛。

「そうね。ケーキも作ってたし料理は出来るし、ＩＳ作れるし、勉強出来るし、部屋も綺麗に掃除してるし、武術もできるしね」

「いや、私にも出来ない事など山ほどあるぞ？例えば、そうだな…。地図が読めない」

「「「「「「ぶ――っ！！」」」」」」

全員が吹き出した。

「他には……一人で電車やバスに乗れない」

「子供かッ！！」

一夏が鋭いツッコミをいれた。

「実は高校入学直前まで、何か抱いていないと一人で寝れなかった」

「アハハハッ！！ちょっ、せ、セラ、以外すぎ！」

鈴が床をバンバン叩いて爆笑する。

「後は……最近、胸が大きくなったからか知らんが、一人でブラを着けられない。今も、着けてないしな」

《ぽよんっ♪》

「ぷはっ！！」

「ブシャァァァッ！！」

シャルとラウラは片手を付いてプルプルしながら鼻血を垂らしている。

「「ご、ごちそうさまでした……」」

鈴と一夏に至っては倒れてピクピクしている。

「気持ちはよく分かるぞ…。私も最近少し…な」

「ですわね。全く、胸が大きいと肩がこって困りますわ……」

篠ノ之とセシリアはうんうんとうなずいて共感してくれた。

「で、出来ない事だが、最近最も危機感を感じていることがある」

「き、危機感…？」

「あぁ、それはだな……」

「「「「「「ゴクリ……」」」」」」

「立ったまま靴下が履けないんだッ！！」

「「「「「「……は？」」」」」」

その場にいた私以外の全員の口がポカーンと開いている。

「いや、だからな、立ったまま靴下が履けないんだ。周りの奴等は皆出来るというのに…。くそっ！」

立ったまま靴下を履こうとすると、ポテッと尻餅をついてしまうんだ…。

「えっと、それが…危機感を感じていることなのか？別に大したことじゃないような……」

「大問題だ！一夏は立ったまま靴下を履けるからそんなことが言えるんだ！」

私が毎日どれだけ苦労しているか……！

「せ、セラにも意外な部分があったのね…。幼なじみなのに知らなかったわ……」

「嫁のそういう部分も可愛いから私的にはアリだ！」

「ボクも……アリかな」

ラウラとシャルは温かな目で私を眺める。

「なんだかもう、シャルやラウラの基準が分からん」

「何気に鈴さんも、セラさんに抱きついてますわね……」

「やぁんっ、カワイーっ♪今まで何でも出来すぎだと思ってたから、それとのギャップに萌えるわ！」

ぎゅーって私を抱き締めてほっぺをすりすりしてくる。

「むぅ…、子供扱いするなぁっ……！」

「のわぁぁっ！！セラが暴れだしたぁぁッ！！」

「ちょっ、セラ、落ち着いてぇぇっ！！」

「うるさいうるさいうるさぁぁいっ！！」

「い、一夏、お前が何とかしろぉっ！！」

「えぇっ！？何で俺だよ！！ここは普通、子供扱いした鈴だろうが！」

「はぁっ！？アンタ男でしょ？とっとと逝きなさい――よっ！！」

《ゲシッ！！》

「のわぁっ！！って、セラ、どけぇぇぇ――っ！！」

「ふぇっ！？きゃぁぁっ！！」

いきなり一夏が私に突っ込んできたため、私と一夏は衝突して倒れる。

「いてて……。ん？この柔らかい物は何だ？手のひらの中心にはコリコリした固い物が……」

《もみもみもみもみ……》

「あんっ！ひゃぁんっ……！そこは……らめぇっ！」

「せ、セラ？ってまさか！」

衝突の衝撃で服が捲り上がり、生乳をさらしている私。

そしてそれを激しく大きな手で揉みまくる一夏。

「そ、そこは……あんっ！感じ…やすい…ひゃあんっ！のに、……だ、だめぇ……もう……あああああっ！！」

「えっ？おい、セラ？」

ビクッビクッと痙攣してぐったりする私。

「ま、まさかセラ……イっちゃったのか…？はっ！」

一夏が寒気を感じたらしく、ゆっくりと後ろを向くと――

「フフフフ、一夏さん？何をしていらっしゃるのでしょうか？」

「アンタ……アタシのセラに……」

「は、破廉恥だよっ！！しかもボクたちの目の前で！」

「私の嫁に……手を出すか？」

「……一夏ァァァァッ！！」

そこには鬼が五人いた。

「ご、ごめんなさぁぁいっ！！」

「待てぇっ！！」

「逃がしませんわっ！！」

「よくも嫁を――っ！！」

「殺す殺す殺す――っ！！」

「……にしてもセラは子供扱いされるのが凄く嫌なんだね…？」

「はぁ、はぁ…、う、うん……」

「だ、大丈夫？」

「ら、らめかも…。気持ち…良すぎた…。一夏…は、マッサージ…上手い……から、手つき…がヤバ…い」

「……そうなんだ」

結局、私が回復した頃には、一夏たちのせいで家の庭のセキュリティシステムは全壊していた。

ま、幸いにも家からは出てやってくれたお陰（？）で家は無傷だから、良しとしよう。

……にしても、人生で初の絶頂体験だったが、気持ち良かったな…。

／／／

胸だけでイってしまうのは、感じやす過ぎなのかな？

……今度シャルに聞いてみよ。

セラ家にて（後書き）

鈴「セラの意外な部分が見られて良かったわ」

一夏「セラの胸…。柔らかくて最高だったな……」

箒・セシ「い～ち～か～（さ～ん）？」

一夏「な、何でも無いです……」

ラウラ「話は変わるが、この小説、実は毎回感想やアドバイスのコメントが必ず数件はあるんだ」

シャル「ユニークアクセス数もこの前２５０００を突破したしね！」

セラ「これからも応援ヨロシクな。感想やアドバイス、私の絵、今後の展開についてやヒロインの希望など、どしどし送ってくれ」

繊斑イチカ育成計画！……と生徒会にて（前書き）

久しぶりに投稿！
でも駄文です、ごめんなさい！

セラ「全く、今まで何をやっていたんだか……」

部活の本番が幾つか有ったから執筆する時間が無くて…。

セラ「それはお疲れさまだな。だが、人を待たせるのは感心しないが」

ごめんなさいです……。

セラ「長い間待たせてホントにすまなかったな。それでは本編をどうぞ」

繊斑イチカ育成計画！……と生徒会にて

今日は久しぶりにアリーナで一夏を鍛えることになった。

面子はいつも通り、篠ノ之、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、そして私だ。

「さて、今回からは篠ノ之も専用機でやることだし、今日の課題は少し難易度を上げようか」

「難易度を？俺は何をすれば良いんだ？」

「今回は、一夏の二次移行（セカンドシフト）と、『紅椿』のワンオフ・アビリティを開花させることを目的にしてやろう。一夏は篠ノ之と組み、それ以外は私を除いた四人で全力で攻撃していってくれ。私はデータを取るから」

「二次移行……。大変そうだな」

「『紅椿』のワンオフ・アビリティか…。いったいどんな能力が…？」

二人はそれぞれボソッと呟いた。

「ちなみに二人は力業での強攻策はダメだぞ？敵の攻撃に対しては回避のみ、攻撃は近接型ブレードによる通常攻撃のみだ」

「「なっ…！？」」

「条件が厳しいほど見えるものも意外と多い。なぁに、機体のスペックでは明らかにお前たち二人の方が上だ。そのくらいは余裕だろ」

実際、私も普通に出来るしな。
武器は無しでの打撃のみでな。

「じゃあ行くぞ？全員ＩＳを展開しろ！」

私が急かし、全員がようやくＩＳを展開した。

「では、戦闘開始！！」

《ビュッ……！！》

六人は素早く上空へ舞い上がる。

「じゃ、遠慮なく行くわよ！」

「精々、足掻いて見せろ」

鈴とラウラがそれぞれ青龍刀とワイヤーブレードを展開して言った。

「へっ、言われなくても！」

「返り討ちにしてやる！」

一夏は『雪片』、篠ノ之は『雨月』と『空裂』を展開する。

「前衛は鈴とラウラに任せるよ！ボクとセシリアは後衛から援護射撃！」

「了解ですわ！」

流石は連携が上手いシャルだ。
こういう場面では最も冷静に戦闘方法を考えている。

「箒、ラウラの『ＡＩＣ』には気をつけろよ！」

「分かっている。挟んで一人ずつ確実に倒すぞ！」

「了解！行くぜ！」

一夏と篠ノ之の二人は『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』で先ずは鈴に接近した。

「ちょっ、いきなり過ぎんの……よっ！！」

《ダンッダンッダンッ！！》

鈴は二人に『衝撃砲』を放つ。

「あぶっ！」

「くっ！」

超スピードで鈴に迫っていた二人はギリギリでかわす。が、その隙に――

「――甘いぞ！」

《ピキッ……！》

「しまっ……！ＡＩＣかっ！！」

一夏に対してラウラがＡＩＣを使い、動きを封じる。

「ナ～イス、ラウラ♪」

「ふっ、当然だ」

ふむ。ラウラのＡＩＣ、の発動までの時間が０．２秒縮まっているな。

「くそっ、動けねぇ……！」

「じゃ、悪いけどタコ殴りにさせてもらうわよ！」

鈴は青龍刀を構え、一夏に突撃する。が、

「させるか！はぁっ！！」

「なっ…！？ちぃっ！！」

篠ノ之がラウラの隙をついて攻撃した。

「よし、動けるぜ！！」

「嘘っ！？ラウラ、何やってんのよ！」

鈴は一夏に向かって進み続けている。

「喰らえ鈴！おらぁ！！」

《ブンッ――！！》

《ダンッダンッ――キキンッ！！》

一夏が振り下ろした雪片に向かってシャルがアサルトライフルで射撃し、若干ながらも太刀筋を逸らした。

「しまっ……！」

太刀筋がずれたことにより、一夏が雪片を振り下ろす速度が落ちた。

それを見た鈴は身体をひねり、スレスレのところで刃をかわし、一夏に接近した。

「もらいっ！！」

《ドガァッ！！！》

鈴は青龍刀で斬った――というより殴り、一夏を吹き飛ばした。

「ぐはっ……！」

大きくシールドエネルギーが削られながらも、再び舞い戻った一夏。

「一夏さん、気を抜いている暇はありませんわよ！」

《ギュンギュンギュンッ……！》

セシリアの『ブルー・ティアーズ』によるビームの雨が一夏を襲う。

「くっ！だけどかわせない量じゃないぜ！」

『銀の福音』との戦いで、多量の攻撃に対する回避力はかなり上がっているらしい。

「よし、いける！はぁっ！！！」

回避しながら遂にセシリアの目の前まで到着した一夏。

セシリアは近接用の武器の展開が遅いため、これにはかなり慌てている。

「らぁっ！！」

《ヒュンヒュン、ドスッ！！》

「きゃあっ！！」

三度の攻撃がセシリアにモロに入った。

《ビー――！！！》

セシリアは脱落だな。

一方で篠ノ之も機体のスペックを生かし、鈴と優勢に戦っている。

シャルが援護射撃をしようとするが、その度に篠ノ之はシャルとの対角線上に鈴を挟み、攻撃を封じていた。

ラウラはセシリアの方に来ようとしたが、セシリアがやられるのが思ったより早かったため、間に合わずだ。

そして遂に鈴がやられ、数の優劣が無くなった。

「これで二対二だぜ！」

「これでは私たちの機体がバージョンアップしないまま終わるかもな」

「くっ…。言わせておけば！」

目に見えた挑発だが、ラウラには割とこたえる内容だな。

「待ってラウラ。ボクはまだ、幾つか手札を使って無いよ。ラウラだって、まだ余裕はあるでしょ？」

シャルには、未だ私たちの前では使っていないが『原子崩し（メルトダウナー）』がある。

他にも『シールドピアース』などの武器も私が搭載したからな。

「……そうだな。奴らの余裕を消し去ってやるか」

ラウラは落ち着きを取り戻した。

「じゃあ早速、いかせてもらうよ！はぁっ！！」

《ギュィンっ！！！》

「なっ！？」

「ぐっ……！」

シャルから高速で放たれる『原子崩し』により、篠ノ之と一夏は分断され、さらに追撃を受ける。

「くっそ…。なんだ、この無数のビームは！」

「きりが……ない！」

徐々に追い詰められる二人。

「そこだっ！！！」

《ヒュッ、ギュィンっ！！！》

シャルは前方に小さなカードのような物を展開して、そこに『原子崩し』を当てる。

すると、『原子崩し』はカードの模様を通して拡散して一夏たちを襲う。

「ぐあっ！！」

「がっ！！」

拡散した『原子崩し』は見事に二人を直撃し、シールドエネルギーを削る。

「くそ、あんなのどうやって――「余所見をしていて良いのか？」なっ！？」

一夏の後ろにはいつの間にかラウラが回り込んでいた。

《ドガァッ！！！》

鋭い蹴りが一夏の横腹辺りに入り、一夏を吹き飛ばした。

「かはっ！！」

そして飛ばされた方向には――

「――終わりだね！」

シャルが『原子崩し』を放つモーションで待ち構えていた。

《ギュン……！》

「くそっ……！やられて……たまるかァァァ！！」

《バチィィッ！！》

「な、何っ！？」

「一体何が！」

「一夏！！」

「……来たな！一夏、それがお前の機体『白式』の第二形態、その名も……『雪羅』だ！！」

私は一夏に叫んだ。

「これが……」

一夏の手には、いつの間にか『雪片弐型』が右手に、そして左手に新たな武器である『雪羅』が備わっていた。

何故ここまで名称やらに詳しいかだと？
私を誰だと思っている。
現在も進行形で『雪羅』の解析を行ってるんだ。

「一夏、ここからは『雪片』も解禁だ。存分にやれ！」

「応ッ！！……と言っても、シールドエネルギーが足りねぇよ！」

あ……。

そういえばそうだったな。

「その点は心配するな！私の方も一夏に同調して解放された！」

篠ノ之が叫ぶ。

「行くぞ、受けとれ一夏！『絢爛舞踏』……！」

赤い光に黄金の輝きを得た真紅の機体は、一夏の所まで空を裂くように駆けた。

「な、なんだ……？エネルギーが――回復！？すげぇ！！」

一夏はエネルギー刃を最大限まで高める。

そして――

《ビー――！！！》

一夏の一閃により、ラウラとシャルはシールドエネルギーが無くなる。

……まぁ、二人が空気を読んで避けなかったからだがな。

「そこまでだ！全員ご苦労だったな」

六人がゆっくり私の前に降り立つ。

「これで一夏と篠ノ之の機体もだいぶ強くなっただろう。技術では鈴たちに及ばずとも、スペックでカバー出来るだろうな」

「とは言っても、セラには勝てる気がしないけどな」

「機体スペックでも技術でも負けているからな。もっと訓練して精進せねばな」

篠ノ之が意気込む。

「うむうむ。鈴とセシリアはもう少し頑張れよ？せめて一夏の二次移行までは粘れると思ったんだがなぁ……」

「「うっ……！」」

「まぁいいか。私はこれから少し用事があるのでな。お前たちは休憩してから引き続き訓練していろ。じゃあな」

そう言って私はアリーナを去った。

……

私はとある部屋の前にやって来た。

「失礼するぞ」

ガチャっと音を立ててドアを開ける。

「あー……、セラりんだぁ～……」

「あら、来たのね？」

「いらっしゃい。お茶でも出すわね」

出迎えてくれたのは、のほほんさんこと布仏本音と楯無ともう一人の三年生の女子だ。

「あー……何故、本音がここに？」

「ん～……？私は生徒会……役員……だからだよ～……」

「そ、そうか。にしても眠そうだな……」

「うん……。深夜……壁紙……収集……連日……」

「……」

何が言いたいのかさっぱりだ。

「あら、名前で呼ぶなんて、親しいのかしら？」

楯無が優雅に腕組みをして尋ねてくる。

「いや別に。私は知り合いに対しては基本的に下の名前で呼ぶし」

「ええ～！？」

ガバッと本音が大声をあげて起き上がる。

「ヒドイ、ずっと私を下の名前で呼ぶからてっきり好きなんだと思ってた～……」

「え？あ、すまん」

よくは分からんがとりあえず謝る。

するとティーカップを持ってきた三年生が口を挟む。

「本音、嘘をつくのはやめなさい」

「てひひ、バレた。分かったよー、お姉ちゃん～」

「お姉ちゃん？」

「ええ、私は布仏虚。よろしくね」

「むかーしから、更識家のお手伝いさんなんだよー。うちは代々」

へぇ、なるほどな。

「姉妹揃って生徒会か。凄いな」

「そうでも無いわよ。生徒会長は最強でないといけないけど、他のメンバーは定員数になるまで自由に入れていいの」

「だから私は幼なじみの二人をね」

虚に楯無が続けて言った。

「お嬢様にお仕えすることが私どもの仕事ですので」

ちょうどお茶が出来たらしく、虚がカップに注いでくれた。
様になりすぎて、まるで社長秘書みたいだな。

「あんっ、お嬢様はやめてよ」

「失礼しました。ついクセで」

私の家もそうだが、どうやら更識家も結構な名家らしいな。楯無の仕草からしても分かる。

「何かお茶菓子あったっけ？」

「ん～…さっきのでケーキも最後だったしなぁ…」

「それに関しては大丈夫だ。初の顔出しだからな。これからよろしくという意味も込めてケーキを持ってきた」

そう言って私はどこからともなく箱を取り出す。

一応五個作って来ておいたからな、足りるだろ。

「あら、美味しそうね♪」

「これはどこのお店で買ったの？」

「ん？いや、自分で作ったんだが――」

「「「ええっ！？」」」

な、なんだ！？いきなり大声を出して…。そんなに驚くことか？

「こ、こんな細かいチョコレート文字まで全部？」

「ああ」

「こっちのちょっと大きい飴細工も？」

「勿論」

「何かの調理本のレシピ？」

「いや、自作のレシピだ」

「「「……」」」

「あ、味のほうは……はむっ」

「何これ～！セラりん、ちょおちょおちょおちょお～……おいしいよー！」

「これはなかなか……」

「文句無しね！」

「気に入って貰えたようで何よりだ」

無意識に頬が緩む。

「っ……！これは確かに一年生やお嬢様が惚れるのも分かる……かも」

「お姉ちゃんも惚れちゃった～？」

「……いえ、ギリギリセーフよ」

「私はキュンキュンなんだけどね」

三人が訳の分からんような話をし出した。

「あー、ところで私は何をしたら良いんだ？一応形式上だけは生徒会役員だしな」

「んー。学園のスポンサーに雑用させる訳にもいかないしな～。……私の心の癒し？」

「……基本的には手が回らない仕事を手伝うことにしよう」

「完全にスルーされたっ！？……うぅ、じゃあそれで」

楯無がしょぼーんと効果音を鳴らしてしょげる。

「拗ねるな。たまにはマッサージくらいならしてやるから」

「ホント？じゃあ私の大事なところを念入りにほぐしてぇ……／／／」

「脚を開くな。卑猥なことはしないからな」

ビシッとデコピンをする。

「いたっ！ぶーぶー！」

額を擦りながら不満を訴える楯無。

「はぁ、生徒会に入ったのは失敗だったか？……辞めるか？」

「えぇっ！？いきなり衝撃の告白！？」

「冗談だ」

「セラりん、今のだと洒落になってないよ～……」

「む、そうか？」

子供のような可愛らしさがある楯無。
クールで大人な虚。
のんびりおっとりした本音。
かなり個性的な所だな。

ま、悪くはない……かな。

何より三人とも可愛いしな、役得だろう。

繊斑イチカ育成計画！……と生徒会にて（後書き）

セラ「いきなりだが、読者から質問があった」

一夏「どんな質問なんだ？」

セラ「『一夏はヒロインに入りますか？』だそうだ」

一夏「……えっ！？何、この小説って俺とセラでハッピーエンドじゃないのかっ！？」

鈴「誰がそんなこと決めたのよ」

シャル「そうだよ。『シャル√』に決まってるよ」

ラウラ「いや、『ラウラ√』だろう」

千冬「小娘どもが、何を勝手な事を…。ここは『千冬と愛の逃避行√』だろうがッ！！」

セラ「いや、逃避行は無いから。にしても一夏か…。私は嫌いじゃ

無いが、どうなんだろうか。……ん？作者曰く今のところはヒロインの方向で行くらしいぞ？」

一夏「っしゃぁぁっ！！作者ありがとう！！」

鈴「……くっ！」

一夏「あ、ずっと気になってたんだけど、そもそもセラの好みのタイプって何だ？」

セラ「そうだな…。『可愛い女の子』と、『自分より優れた点を多く持った奴』。そして……」

一・鈴・シ・ラ・千「そ、そして……？」

セラ「『関西弁』だな」

全「「「「「意外なとこ来たーーっ！！！」」」」」

セラ「今のところは小説中には出てきていないけどな。作者はオリキャラとして出すか否か迷っているらしいぞ」

一夏「これは……アンケート的なやつか？」

セラ「ということで、オリジナルキャラクターとして関西弁の少女もしくは少年を出すことに賛否の意見をくれなイカ？出来れば男女の希望も書いて欲しいでゲソ」

シャル「イカ娘っ！？」

セラ「普段通り、感想やアドバイス、ヒロイン希望やイラストも募集中だからよろしく頼むぞ！」

繊斑一夏、楯無に苦労するの巻（前書き）

セラ「遅くなってほんっとーーーに済まんっ！！」

織斑一夏、楯無に苦労するの巻

教室にて放課後の特別ホームルーム。クラスごとの出し物を決めるため、わいわいと盛り上がっている。

「えーと……」

クラス代表の一夏は一応クラスの意見を纏めなければならないのだが、何と言うか…。

そもそも意見が纏まらないのは、恐らく今朝の全校集会での楯無のとある一言が原因で、今回の学園祭の出し物で、全校生徒がクラスのものより部活動のものを優先させようとしているせいである。

それはというと――

『各部対抗織斑一夏争奪戦！』

――という、おふざけ半分（？）の企画である。

内容は、学園祭での各部活動ごとの催し物に対する投票で、一位を取った部活動に織斑一夏を強制入部させるというもの。

生徒会役員の私にもこんな企画は報告が来てないぞ…。

おっと、それなりの量の出し物がクラスで挙がったらしい。どれ…？

『織斑一夏のホストクラブ』

『織斑一夏とツイスター』

『セラ・ヴィヴィット・アーレンのファッションショー』

『織斑一夏とポッキー遊び』

『織斑一夏と王様ゲーム』

「……はぁ？」

思わず間抜けな声が漏れてしまった。

しかも殆どの意見が織斑一夏と○○○っていう…。

一つ私の物も有ったが。

……コホン、

「「却下」」

私と一夏が声を揃えて言った。

えええええぇぇっ！！とブーイングが起こる。

「こんなもの私は認めん」

「流石にこれはなぁ…。大体、誰が嬉しいんだ、こんなもん」

「私は嬉しいわね。断言する！」

「そうだそうだ！女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

「お姉さまと織斑くんは共有財産よ！」

「他のクラスとか部の先輩から色々言われてるんだよ～！」

「助けると思って！」

「メシア気取りで！」

意味不明だ…。
いつもなら千冬が静めてくれるんだが、今日はもう居ない。

『時間がかかりそうだから、私は職員室に戻る。後で結果報告に来い』

――だと。

「山田先生、ダメですよね？こういうおかしな企画は」

「えっ！？私に振るんですか！？」

よし、山田先生、ここは教師らしくガツンと――

「そ、そうですね…。意見を組み合わせて…。『セラ・ヴィヴィッ

ト・アーレンとポッキー遊び』なんていうのは……／／／」

そうそう――って、オイ！まともなのは私と一夏だけかっ！？

「「「それだぁっ！！」」」

「オイ待て、今の中に一夏の声も混ざっていなかったか？混ざっていたよな？いや混ざっていた！」

「えっ！？いや、だって、なぁ？」

一夏がクラスの全員に対して呼びかけると、大半が鼻息を荒くしてブンブン首を縦に振っている。

「絶対にやらん。というか、もっとマトモな意見が出せる奴はいないのか？」

「じゃあ、メイド喫茶はどうだろうか？」

そう言ってきたのはラウラだった。

「客受けは良いだろう？それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ」

いつも通りの淡々とした口調だったが、あまりにも本人のキャラと違う言葉だったため、クラス全員が一瞬戸惑う。が、今の私にとっては最高の案だった。

「……おぉ！！流石はラウラ、頼りになるぞ！」

マトモな奴がいて嬉しかった私はラウラに笑顔でそう言った。

「う、うむ！嫁に頼られるのは気分がいいな／／／」

「え、えーと……みんなはどう思う？」

一夏が多数決を取るために皆に尋ねた。

「うーん……」

「ちょっと恥ずかしい気も……」

と、乗り気では無かったようだが、次の瞬間のシャルの一言で全てが覆った。

「……セラのメイド…。いや、執事も有りかも（ボソッ）」

「「「「異議なしっ！！」」」」

クラス全員がビシィッと一斉に手を挙げた。

「お、おぉ…。じゃあ決定で」

「はいはーい！どうせなら個人の売り上げで勝負しようよー！」

「それいいかも！一位の人にはご褒美とかあげたりしてー」

「お姉さまの一日メイド券とか？」

「それ、絶対欲しい！！」

何だか勝手に話が展開して――いや、だがこれでサボる奴も減るだろうし、良いかも？うむ。

「それくらいなら良いぞ。ただし、一位を取った奴だけだ」

「お姉さまから許可が出たぞーっ！！」

「「「うぉおおおっ！！」」」

……凄まじいな。とりあえず一年一組の出し物はメイド喫茶改め『ご奉仕喫茶』に決まった。ちなみにメイド服はシャルとラウラにツテがあるらしい。

―一夏ｓｉｄｅ―

「――ということで、うちのクラスの出し物はメイド喫茶に決まりました」

職員室の千冬ね――織斑先生に報告に来ている俺。

「また無難な物を選んだな。――と言いたいところだが、どうせ何か企んでいるんだろう？」

「いやぁ…。正直に言うと、ほぼ全員セラのメイド服が目当てです、はい」

「ふむ。まぁあの騒がしい連中どもらしい意見だな（セラのメイド服か……／／／）で、発案者は誰だ？田島か？それともリアーデか？まぁあの辺りの騒ぎたい連中だろうが……」

まぁだれでもそう思うよな。
俺だって同じ状況ならそう考えると思うよ。

「あー、えーと……」

織斑先生はニヤニヤとしているため、ホントのことが言いにくい。
が、意を決して言うことにした。

「……ラウラです」

「……」

きょとんとしている織斑先――って、よくよく考えたら心の中ぐらい千冬姉って呼んでもいいか。

「……くくっ、あははっ！！そうか、ボーデヴィッヒか！それは意外だ。しかし……ぷっ、アイツがコスプレ喫茶？よくもまぁそこまで変わったものだ」

「やっぱり意外――ですか？」

「ああ、そうだな。私はアイツの過去を知っている分、おかしくて仕方ないぞ。ふ、ふふっ、アイツがコスプレ喫茶……ははっ！」

そんなにおかしかったのか…。

千冬姉の反応は職員室の中でも意外だったらしく、他の先生たちもきょとんとしている。

「ん、んんっ。――さて、報告は以上だな？」

周囲の視線に気づいた千冬姉が、咳払いをして語調を整える。

「はい。以上です」

「ではこの申請書に必要な機材と使用する食材などを書いておけ。一週間前には出すように。いいな？」

う、めんどくさそう…。

「い・い・な？」

「は、はいぃっ！！」

相変わらずこういうところは怖い。それが千冬姉。

ま、でも昔からしたら変わったよなぁ…。

あんまし覚えてないけど、中学の頃の千冬姉はすげぇ怖かった。身内の俺でさえビクビクしていたくらいだからな。

でも、高校になってからかなり丸くなったんだよな。
確かあの頃って、束さんとよくつるんでたなぁ…。

稀代の天才、篠ノ之束。その隣に肩を並べるのは、世界広しといえど、千冬姉くらいのもんだな。

あぁ、セラはもう別格だ。
二人に肩を並べるどころか、二人の一歩前を行き、それに二人がついていっているかんじだ。

セラは天才なんてレベルじゃない。
多分、いつの時代に生まれていたとしても後世に名を残す偉人となっていただろう。

まぁ、千冬姉や束さんも俺らみたいな一般人からしたら別格だけどな。

「織斑、学園祭には各国軍事関係者やＩＳ関連企業などの多くの人が来場する。一般人の参加は基本的には不可だが、生徒一人につき一枚配られるチケットで入場できる。渡す相手を考えておけよ」

「あ、はい」

ＩＳ関連企業ということは、セラの親が経営しているヴィヴィット社の人とかも来るのかな…？

そんなこんなで千冬姉への報告は終わり、俺は一礼して職員室を出る。

ドアが閉じる音を背中で聞いて、俺はふぅっとため息を漏らした。

「やぁ」

「……」

職員室を出てすぐのところで一人の女子が待っていた。

その顔は忘れもしない、生徒会長・更識楯無その人である。

「……何か？」

「ん？どうして警戒しているのかな？」

「それを言わせますか……」

遅刻騒動といい、学園祭騒動といい、騒ぎの元凶である先輩は、しかし涼しげな顔で俺を楽しそうに眺めているだけだった。

「あぁ、最初の出会いでインパクトがないと、忘れられると思って」

「忘れませんよ、別に」

この小説では描写されてないので、詳しいことは原作を読んでくれ！

「……って、何を訳のわからないこと言ってんだ俺は！？」

「……えと、どうかした？」

「い、いえ、何でも無いです」

しまった、変な奴だと思われてる…！

若干引かれてるし…。

とりあえず俺はアリーナへと歩き出す。
その横に、ごく自然な流れで先輩が並んで歩き出した。

「……」

どうやら振りきれそうにないみたいだ。この人は完全に空気の『流れ』を支配している。
強引でないのに、圧倒的な存在感。

「まぁまぁ、そんなに塞ぎこまないで、ね？」

「誰のせいだと思ってるんですか……」

「むぅ、手厳しいわねぇ。じゃあ交換条件を出しましょう。貴方のコーチをしてあげるわ。それでどう？」

「間に合ってます」

コーチなら既に箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、そしてセラがいるからな。
これ以上増えたら身が持たないよ……。

「そんなこと言わないで、私は生徒会長なんだから」

「はっ？」

生徒会長だから何なんだ？

「あら、知らないの？なら教えてあげる。この学園の生徒会長をするってことはね――」

《パリィィンッ！！！》

更識先輩がそこまで言ったとき、硝子が割れて一人の生徒が竹刀で更識先輩に斬りかかった。

「覚悟ぉぉぉっ！！」

「……甘いわっ！！」

《パシィッ、ドガァッ！！！》

更識先輩は正面からの斬撃を受け流しながら女生徒の腹に蹴りを放った。

あ、パンツ見えた。

「隙有りィィっ！！」

今度は逆側からボクシングのグローブを着けた生徒が右ストレートを先輩に放つ。

「仮に隙が有っても声を出したら意味無いわ…よ！！」

《ガシッ、ブゥン！！》

後ろからの攻撃を見ずにかわし、その腕を掴んで一本背負い。

「かはっ……！」

受け身は一応取れたようだが、自らの攻撃の勢いもプラスされている分、ダメージもかなり、でかかったようだ。

「もっとも……隙なんて無いけど、ね♪」

この人……強い！

「むふふん♪……で、さっきの続きね？この学園の生徒会長であるということは、ひとつの事実を証明しているんだよね」

「ひとつの事実…？」

「そう。……生徒会長、すなわち生徒の長たる存在は――」

ニヤリと口を歪めて先輩は俺に言い放った。

「――最強たれ、とね。……ところで織斑一夏くん？」

「はい？」

「さっき私のパンツ、見たよね？」

「み、見てませんよ！（嘘）」

「ふーん…。まぁいいか。ねぇ、これからちょっと生徒会室に寄ってかない？お茶くらい出すわよ？」

「はぁ……」

どのみち逃げ切れそうに無いし、パンツも見ちゃったし、行くか。

「じゃあ行くわよ、織斑一夏くん」

「一夏でいいですよ」

「じゃあおねーさんも楯無でいいわよ？なんならたっちゃんでも可」

「はいはい……」

何かもう、この人にはある意味絶対に勝てなさそうだ…。

……

「……いつまでぼんやりしているの」

「眠……夜……遅……」

「しゃんとしなさい」

「まぁまぁ、こういうところも可愛くて良いじゃないか」

「そーそー……」

そんな声がドアの向こうから聞こえてきて、俺は何となく躊躇ってしまう。

「ん？どうしたの？」

「いや、何か聞き覚えのある声が……」

「ああ、そうね。今は中にあの子達がいるからかしらね」

そう言って楯無先輩はドアを開けて中に入った。

「ただいまぁ」

「お帰りなさい、会長」

出迎えたのは三年生の女子だ。眼鏡に三つ編み、いかにも『お堅いが仕事は出来る』風な人で、その手に持ったファイルが非常によく似合っていた。

そしてその後ろにいたのは二人とも意外な人物だった。

「わー……。おりむーだ～……」

片方はのほほんさんだった。

そしてもう片方は――

「なんだ、一夏か。よく来たな」

――俺のよく見知ったサード幼なじみ、セラ・ヴィヴィット・アーレンだったのだ…。

繊斑一夏、楯無に苦労するの巻（後書き）

作者「もしもセラが他の作品に行ったら、っていうのを考えてみよう」

セラ「ほう、面白そうだな」

鈴「アタシも考えるっ♪」

一夏「皆で一緒に考えよーぜ！」

作者「じゃあ先ずは……バカとテストと召喚獣！」

一夏「無双だな」

鈴「無双ね」

シャル「無双だね」

ラウラ「Ａクラス全員がかりにでも勝てそうな気がするな」

セラ「そんな化け物みたいに扱うな」

作者「さて、次は……真†恋姫無双」

一夏「そうだなぁ、曹操軍で百合？もしくは大陸平定してハーレムとかだな」

セシリア「呂布と互角以上に戦いそうですわね」

簫「諸葛亮並の頭脳で軍師なんてことも有りうるな」

シャル「北郷一刀くんに抱かれたりは……って、ダメ！！」

セラ「まぁ意外とイケメンだから無しではないが、もう少し強ければな。同じ男なら一夏の方が私は好きだぞ」

一夏「俺も好きだぁぁぁっ！！」

鈴「抜け駆けすんなっ！！」

《ドガァッ！！！》

一夏「きゅー……」

作者「き、気絶した一夏はおいといて、最後に……ＴｏＬｏｖｅる」

全員「１００％ハーレムにしかならないだろっ！！」

セラ「可愛い娘達を抱き放題か…。ふふっ、それもいいな♪」

作者「そうだねー」

セラ「ま、今の世界でも好きな人はたくさんいるからな。充分だ」

作者「そうかぁ。あ、そういえば前回のあとがきで話したオリキャラなんだけど、読者様の意見により、女の子に決まりました！多分次回か次々回に出ます！」

セラ「関西弁美少女か…。早く会いたいな」

作者「さて、まだまだ話したいことはありますが、今日はここらで

さようならです」

シャル「感想やアドバイスよろしくね♪」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4946u/

サード幼なじみはＧｅｎｉｕｓ！

2011年11月28日02時51分発行